サードハーナー

訳者

略伝

ラビンドラ・ナート・タゴール

にも当たったのである。英米にも良く 合に努め、 たのである。彼はよく東西文化の融 想家として世界にもその名声を馳せ 想に開花せしめし印度の詩人並に思 影響を受け、 る。タゴールはその子として自らこの ものは悉く捨てて依用せず、又印度に ドの教義に心酔し、後にはこれ以外の 吠陀(ブェーダ)を研究し、ウバニシャッ 的に純粋精神的の 1 神教にありとし 第二代代表者であって、印度教は根本 教会)の後援者であり、父は同教会の warkanatheTagare の家に、宗教思想家たりしドワルカ・ 印度ベンガル州の富裕なるバラモン族 (RabindranathTagare)ぜ、1861 てはキリスト教の不要を考えたのであ して有名なるブラーフマ・サマード(梵 して生きる。祖父は印度教改革派と ル(DavendranathTagare)を父と 同じきデーベンドラ・ナート・タゴ 学園を自営して子弟の訓 自らそれおその作品に実践 印度教的理念を詩や思 ゴ ー)をとして祖父と ル (D)

> ず。 多し。 ベル文学賞を獲得、 我々に真の意味の祝福を与えるを信 名である。一九四一年(昭和一六年) Gardener; Citrangada; Gara 等有 のきを吐いた。著作としては本書の他 タンジャリ(Gitanjali)を英訳し・ノ 渡り、我国に来ることも屡次・知友の 歿す。タゴールは、 ;並びに 前記 1913年(大正二年)には傑作ギ Gitanjiali;Truit Gathering Evening Songs : The 向後こそはじめて、 東洋のために万丈

目次

序文

訳者自序

原著者序文

第一章 個人と宇宙の関係

第二章 霊意識

第三章 悪の問題

第四章 自我の問題

第五章 愛に於ける悟り

第七章 美の悟り

第六章

行動に於ける悟り

第八章 神の悟り

訳 註 其の一 一から八二

其の二 一から六二

上

訳者自序

ギータ等こてんに依存しつつ解明し ざして、一千有余年に渡る屈従生活 そこそこに、回教徒の支配に屈し、 而して我々はここに一巻の人生論を 処によって教示宣明せしものである。 又それら古典の眞精神を自ら悟る 正なる理解を与へんため、主要なる の間に自国はもとより、他国により 度国有の精神・思想が永井ねんげつ たる婆羅門族に生まれし著者が,印 とである。本書はかかる分化維持者 ち続けてきたことは利目に値するこ よって文化史的には独自の印度を持 度にも、主として婆羅門のちからに から脱却せんとしている。かかる印 リアーバルタ(聖民の国)」復興をめ 願の下に、「インド人の印度」、「ア 更に英国支配下の奴隷的状態に屈 ても曲解・歪曲され居るを慮り、 し居しも,今や八紘一宇の日本の悲 一連の問題を八つ抱え来たり、ブエ 印度は「インド人の印度」の時代も -ダ、ウバニシヤッド、佛陀の教え、 若々しくも落ち着ける、

> 果たしてくれる。 果たしてくれる。 果たしてくれる。 果たしてくれる。 まに見えて実は明るく、しかも生々 を知れる人々にとっても、本書は示 であろう。印度と言えば仏教をしか であろう。印度と言えば仏教をしか であろう。印度と言えば仏教をしか であろう。印度と言えば仏教をしか である。読者はこれを機縁に、 を知れる人々にとっても、本書は示 である。読者はこれを機縁に、 を知れる人々にとっても、本書は示 とである。 である。 である。 である。 はさう言う入門書としての意義も はさう言う入門書としての意義も といる。 とい。 といる。 といる。

せられるのである。
せられるのである。
は、東亜共栄圏の良き同士と読者が、東亜共栄圏の良き同士と読者が、東亜共栄圏の良き同士と

感謝の意を表する次第である。 (で預かる所実に多大であった。 慈に世代現四条畷中学校在職)の御盡力 (現四条畷中学校在職)の御盡力 の場別のののででである。 (現のののでは、現新潟高等学校校長)の の (ののでは、恩師日野月本書訳了については、恩師日野月

尚本訳については左を原書とした。 n of ---fe);tauchn--tz, -e--px--g.

戦?なる日

原著者序文

現されている印度の古代精神に触 裡に再現され、且つ今日の生活に示 そこで、本書の読者は我々の聖典の た父の先例を持っているのである。 緊切な交わりの裡に長い生涯を送っ 心を敢えて軽減してまで神との最も 又は凡ゆる俗事に対する切実な関 拝に使用さるる家庭の人となり、現 土(ウバニシャッド)の経典が日常礼 好都合なことである。余は優波尼沙 とをお断りしておくことは余にとり 見地からも取り上げられていないこ 哲学的にも取り扱われず、学究的 れる機会を得られることと存ずる。 に余は、世間に対する義務を怠らず 本書に発表される諸論文の主題は

我々はキリスト教の真義を、よしそ 神に依って判断されねばならない。 いて人間の成長につれて発現する精 字に依ってでなく、精神―歴史に於 なるとも、 れが原始キリスト教と重要な点で異 人間の偉大なる叫びの全ては、文 現在の相をかんさつする

事によって知る様になる。

る。 ある。 於いても、用いる。此等は他人にとつ 等を自己の生活に於いても、説教に それ故にこそ無限の活力ある成長 にとり、優波尼沙土の節々や、仏陀 えざるを得ない。偉大な人間の体験 されるとその意味を失ふものと考 望の木乃伊化した標本として展覧 箱に容れられ、博学の外被に包まれ 然し我々にとっては、活言なのであ 古学的な興味しか無い様に見える。 期しているものと考えられるが故で 等の確証、即ち、その独特の説明を に満ちているものと考えられ、又此 を賦与して呉れるのである。余は此 れは、個々の生活によって果てしな てしても尽し得るものではない。そ から発露した活言の意味は、決して なる宗教的聖典は、単に懐古的、 てと同様、自分にとって独特の意味 の教えは、常に、魂あるものであり 毎に神秘を増して行くのである。余 く説明さるべきであり、新しい啓示 如何な体型だった論理的解釈を以 て終始保存される人間の思想や願 西洋の学者にとっては、印度の偉大 しかも我々は、この聖典は陳列

なっているベンガル語の講話の幾つか 余の学校の教え子に授ける習慣に から選び出された諸思想を、 (bengal)ボルパー(bolpur)にある 本書の諸論文は、ベンガル

である。 ラ 具現していることを一言附加すべき 版に適はしく、関?せる形をとって ん d ら nathtagare)が翻訳下も野 ンドラ・ナート・タゴール (バブすれ るベンガル語の講話を甥のバブ・スレ は「羯磨玉伽」(カルマヨーガ)に関す の第六の論文、「行動に於ける悟り」 話中の幾章かを使用した。この論叢 rchakrauuarti)が翻訳せる此等講 ラ・ロイ氏(babu satish chandra 余の友人、バブ・サティシュ・チャンド であろう。そして余は、此処彼処に、 ray)とバブ・アジト・クマル・チャク バルティ氏(babu ajit くま

親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。 親切に感謝を捧げるものである。

るものである。 を持つ最初の a に決定的に置かれし加えれば、アクセントは広い字音ー言 sadhama の発音に就いて申ー言

以上

第一章 個人と宇宙との関係

持っている。全て、煉瓦と漆喰とで出来た揺籃をなかで育まれた。実際、近代文明は古代ギリシャ文明は、歳の城壁の

燃料、並びに小屋建ての材料を提供あった。その新参者は急速にそれをあった。その新参者は急速にそれをあった。その新参者は急速にそれをあった。その新参者は急速にそれを、以、の惨害を避けしむる場を提供し、又、家畜の惨害を避けしむる場を提供し、又、家畜の惨害を避けしむる場を提供し、又、家畜の惨害を避けしむる場を提供し、又、家畜の惨害を避けしむる場がの寒風雨の惨害を避けしむる場がの寒風雨の惨害を避けしむる場がの寒風雨の惨害を避けしむる場がの寒風雨の惨害を避けしむる場がの寒風雨の惨害を避けしむる場がの寒間が

食物や水が多量にあった。た。そこは、自然の保護の利があり、ンの氏族が方々の森林地帯に定住しした。族長を戴いて、様々なアリア

恒久的な交渉をしたのである。 し、そして、この起源と環境との いて取り囲まれ、養われ、又、着衣競い、独特の性格を帯びたのである。 る自然の様相と最も厳格な、最も る自然の様相と最も厳格な、最も る自然の様相と最も厳格な、 である。 である。 での世格を帯びたのである。

は全てを包含するものであると思 げることであった。印度人は真理と になる事によって、自分の意識を拡 と共に成長し、成長して環境の一部 っきりと了解すること、即ち、環境 の目的は、獲得するのでなくて、は 煩わされなかったのである。 印度人 っては、自分の領土を拡げる願望に 分の獲得物の周りに境壁を築いて行 触していたので、印度人の頭は、 のである。自然の成長物と絶えず接 を与えたのみだと言うことがわかる 弱くもせず、唯、精神に特殊の歩行 せなかったし、また、人間の活力を 生活の事情は、人間の精神をにぶら い。然し、古代印度に於いては、森林 きがあると考えられるかも知れな することによって、人間の知恵を鈍 くし、且つ、進歩への刺激を弱める傾 かかる生活は、生活標準をてい 存在には絶対的孤立は無く、真 自

賢の努力であった。

「関の努力であった。

「関を見ての事物に貫徹しむることに

「はを見ての事物に貫徹しむることに

のいますが、古代印度の森に棲める聖

にとが、古代印度の森に棲める聖

にさいる」唯一の道は、自己の本

のである。 と世にになって、此等の原生林は耕後世にになって、此等の原生林は耕食世になった強力な王国がが建設された。 は、その物質的繁栄の全盛時代とあった強力な王国がが建設された。 世界の強国の全てと交渉の生した。世界の強国の全てと交渉の生した。世界の強国の全てと交渉のは、その物質的繁栄の全盛時代とがして、富有な都市が、あちこちに発して、高有な都市が、あちこちに発性も印度の精神は、常に、根気のいいない。

その胸に人間が抱かれ、いつくしま らぬ敵対的世界に住んでいるかの如 縁な万物の配列から奪取せねばな らである。 間に人為的な分離を生ぜしめるか から向け、そして、そうすることが、 習慣と、精神の都市城郭的鍛錬との れている天地万物と人間自身との の生活と、自分自身の作物とに自ず 精神の眼の集中した光を、自分自身 所産である。都市生活では、人間は くである。この感情は、都市城壁的 の欲する一方の物を非好意的で、 て誇っている様にみえる。 西洋は、自然を制しつつあると考へ 恰も、自分

る。 このことが、人間と自然との間に尤 っていた。印度は、そうすることが一 の物とすることは出来ないからであ 関係ある物の他は、何物だって自分 である。 もな関係があることを示しているお 日々、成功を収めつつある。そして、 ぬと言うことである。 する不平は、自分の必要物の大半多 得ぬと思っていた。人間の自然に対 物が我々に全然無縁な物ならば、 めて力説した。印度は、自然界の事 宇宙との間に存する調和を口を極 破ししたのである。印度は、個人と と一緒に宇宙をも全体の一部と看 つの偉大な真理であるとして、 われわれは、其等の物と交渉を持ち し其の努力は無駄ではない。人間は くを自ら努力して獲得せねばなら 然し、印度に於いては、見地が異な 何故かならば、我々に真に 誠に然り。然 人間

ある。 ふものとして見れば、道は目的地の 破することである。そして、そう言 目的地へ我々を連れて行くものと看 に達せられる或物と看倣するので 合には、我々は、道の上の己が旅 ものと看倣するものである。その場 望の目的物から我々を分かっている ら眺め得る。 一部になる。それは、既に、我々の 一歩一歩を、障害物をおかして無理 我々は、道を二つの異なった見地 今一つの見地は、道を我々に 一つの見地は、道を願 か の

> 然界を一貫して働いている目的と決 宇宙的な力と調和いているからであ 思想が事実と調和しているからであ ものをかくとくすることが出来るの は、道がそれだけで我々に提供する 上を旅することに依ってのみ、我々 到達の第一歩である。そして、道の り、そして、結局、人間の目的は、 の力を使用し得るのは、 考えることの出来る所以は、人間の していると言うことであり、 する印度の見地である。 である。この後の見地が、 して衝突しないと言うことである。 て偉大な事実は、 人間が自分の目的のために自然 我々が自然と調和 人間の力が 印度にとつ 自然に関 人間が 自

度の精神は、決して僅かの躊躇も無 は、何でも人性なのである。それは 自然に過ぎなく、 級に於いて低位の凡ゆる物は、 途切れが在るというのが、 性の始まる所では、突然説明し難い く、その自然との血族関係、 するがごときものである。然し、 った、しかも相反する本源の功に帰 かで完全といふ極限を持っている物 情である。それに依れば、万物の階 生物や獣類に属するものであり。 の断絶せざる関係を認める。 分けて、其等の優美さを二つの異な 丁度、芽と花とを二つの別々の類に 西洋に於いては、自然は、専ら、 智的とか道徳的と 一般の感 単に

万物が根本的に一つであることは、

必要な如く、 物質的現象ではなかった。其等は、 光・実・花は、 識を養成したしたのである。土・水・ 意義をもっているのだと言う風に意 凡ての物は印度人にとって、精神的 想や勤行により、其の生活を調節し 印度人の終生のの目的であった。 を、感情や行為に実現することが、 のみでなかった。この偉大なる調和 印度人にとって、単に、哲学的瞑想 必要な物である。 んぜんの理想を到達する際に、 丁度、交響曲の完成に一つの調子が 利用され、後はうち捨てられる 印度人にとっては、 印度人にとっては、単

世の根本的事実は、我々にとって、非常に重要な意味を持っていると言うことを印度人は直感的にかんじたのである。即ち、我々は、此の世の根本的事実に対しては敏感で無だいて、歓喜と平和との豊かなかんじょうを持って此の世の根本的事実に対しては敏感で無たいってのみでなく、共鳴の精神にがいて、歓喜と平和との豊かなからじょうを持って此の世の根本的事に、科学的興味、おり関係を確立せねばならないと言うことである。

我々に示される力の活動であるこものではないと言うことを知っていは我々の感覚に対して映ずる如き科学者は、或る見方では、此の世

ものであろう。土は生ける存在であ るのみならず、人間の心をも喜ばす。 与へてくれる。その歓喜は、 識が力を与へて呉れるが如くに、我 や水に就いての究極の真理は、歳月 れを了解し得ないかを知っている。 ふ時には、自我から釈放される。こ 間は、牢屋に住み、壁が彼に敵対s を、はっきりと了解せぬ時には、 るからだ。人間と宇宙との血族関係 これ、土の接触は物理的接触以外の ある。土は、単に、人間の体を支え ならず、人間の心をも清める。これ は、単に、人間の四肢を清めるのみ 力で、自然現象の中に見出すものが 宇宙に就いて、科学が教ふる程度の 霊の直感なのである。この事は、 とは、科学が単なる知識に過ぎぬ如 とだと言うことを知っている。このこ 実現する永久の意志を了解するこ れ、その時に、 凡ゆる事物に於いて、永遠の霊に逢 することになるのである。人間が、 水の霊が人間の霊に触れるからで 何であるか了解しないであらう。水 知識しか持たぬ人は、人間が霊の眼 係に在るものの結合の新産である。 々に力を与へてくれないで、歓喜を くに、単なる知識でなく、霊による のもとに我々が了解する力の中に のなかに働き、且つ、土や水の外観 同様に、霊の目を開いている人は、土 れて来た世界の十分な意義を発見 しかも、如何に部分的にしかそ 人間は、自分が産ま 血族関

ある。 絶えず繋がって動き且つ存する意識 土、空、星を創造し、同時に、外界と ある。この一つの永遠の霊の力は、 た混一を直感することを覚えるのだ つの永遠の霊によって結びあわされ 混一を悟らんと努める。即ち、この一 世界と意識在る人間の霊との根本的 ある」。其の助けを借りて我々には、 れている一篇の詩句ガーヤ「トリ「で 吠陀(ブェーダ) の摘要なりと考えらして呉れる文・句は、印度の古聖典、 胸に抱いている神の意識の表現とし 様に命ぜられ、朝日や流水や豊穣な ると言う事実を十分に意識している 周囲の万物と密接な関係を保ってい 度に於いては、人々は、肉体的にも、 調和が確立されるからである。 の先で、我々の精神をば照らすので かくて、我々の日々の瞑想を手引き 土地に対しては、此等のものをその 挨拶する様に命ぜられている。 完全な真理を了解し、万物との

ない。然し、印度人は、真に、人間のない。然し、印度人の頭から去った事はおに、真実ではない。万物の階梯にある人間の優越と言う観念は、未だある人間の優越と言う観念は、未だある人間の優越と言うが、印度は、違を無視して来たと言うが、印度は、違なる事物の価値のの相印度は、異なる事物の価値のの相

うために、肉食を止めた所以であり 得んがために、何か特別の雄大、 yのでなくて、結合の力にある。 それ 優越の存する点は、獲得の力にあり 独自の観念を持っている。真に、この 優越の存する点については、印度人 なき事柄なのである。 に対する洩れなき同情の感情を養 と選んだ。これ、印度に於いて、全人 に於ける其の位置を判然と了解し に満ちた世界から出て来て、 故に、印度は、その心が、狭い、必要 民が、嘗ては肉食していたが、生命 は美が自然に在る所をば、巡礼の智 しかして、この事は、 人類史上比 、無限界 又

問題を次々とこしらえる。そして、 時に、我々は、自分を当惑せしめる が宇宙人でなくて単に人間となる りの墜落かを意味する。 りする時、それは人間にとって、 時、即ち、 限の面倒と言う収穫をもたらすも 試みるが、その方法の一々は自ら無 無理矢理に切り離す時に、即ち我々 毎に平均を保つために一々の神経を のだと印度人は知っている。人間が、 断って、凡ゆる種類の人為的方法を われわれは、その問題の解決の源を 々が自分を自然のつきせぬ生命~ 天地万物に於ける安息所を棄てる 物的並びに心的障碍に依って、 人間の言う1本綱を綱渡 人間は一歩

秘かな誇りと満足とを感ずる。によって不当に取扱はれたと考えて、神を責め、しかも、物の全体の組織ているからに、疲労の合間合間に、ければならない。そんなことを為し筋肉とを絶えず緊張させて置かな

はそれだけで目的となり、 囲を守って生命に貢献しない。 なる。人間の食欲は、その目的の範 でなくなる。それは、徒らに贅沢に 純朴を失うと見苦しくなり、恥ずか の貧は、貧の一つの大きい特性たる 全体と言う背景に奪われると、人間 だと言うことを知らねばならない にせしめ、自らを引き裂いて断片に の時には、人間は自らを駆って狂気 癒とのために己れ自身に頼る時、そ する接触から遮り、精神の栄養と治 が自らを無限界の活力を附け、純化 あな壁の外に在るからである。人間 ない。何故かなれば、人間の霊的生 り得ぬと言うことを知らねばなら 巣の窠の中では、生命を養う蜜を作 命に努めようとも、人間は己の蜂の 悟らねばならない。如何に人間が懸 即ち無限界に於ける人間の位置を ない。人間は自らの存在の全体性を しげになる。人間の富は最早や大度 命の糧を永久に供給するものは、 し、そして自分自身の物質を食うの 然し、 かかることは永久に続き得 人間の生

そして健全な力に代えるに一頻りの い。人間の霊は、常に餓死に瀕する。 っていく土壌を見出すことが出来な 近い所に限られている時には、 示されているので、心理学的問題と が激しく強い人工的光の眩光の中に 美術に於いては、斬新のみを得んと る。。我々が自己表現に際して、人を 命に火を放ち、そしてこの大火のも はこの時である。 裡の落ち着きによって批判しない 煌めく空の裡に在る落ち着き、即ち 偉大さを大きさによって量り、無限 刺激を以って辛うじて生きて行く。 に、強い欲望の権化として見える。 見失うのである。その代わりに人間 るも偉大なる人間の全体の観察を を見失う。文学に於いては、単純な 努め、古いが然し永久に新しい真理 引きつけることをしないで、吃駕させ 万物の絶えず動ける律動的踊りの 完全さに付随する休息―あの星の 又、その活動を運動によって批判 界との重要な接合点によって量らず の本質の深い方の根は永久に根を張 ようと試みるのはこの時である。 の凄い炎の中で提琴を奏でるのであ 人間が精神の遠近法を失って、その 人間の意識が、 して見える。即ち、変態的なるが故 人間的な自我の最も 人間

アリアン族による印度の一次侵略

感を与えもした。 獲得しなかったのである。 として、人間の心中に神聖な連想を が宇宙の霊と交はる霊的調和の場 らし、且つ、 此等自然の生ける大伽藍は、 所となったが、アメリカにおいては、 住居であった森林は、聖賢達の隠遁 なかった。 最後迄続いた。彼等は決して折合は 間との争闘、人間と自然との争闘は 闘に直面 等も亦、 略と寸分違わぬ類似物である。 の享受に資し、亦、孤独の詩人に霊 た。それらは富と力とを人間にもた とり印度より深い意味を有しなかつ ヨーロッパ移民によるアメリカ侵 原生林や土民との激しい争 印度に於いては、未開人の した。然し、この人間と人 恐らく、時々人間の美 森林は、人間の霊 人間に

だったと一瞬時だも暗示したくはな 事情に遭遇したと言うことである。 与えた一組の、特別の組み合わせの 補い、必要な産物である。私が言わ ある。その産物の各々が互いに他を の霊の商売にとって最も良いことで たらすと言うことは、霊界有無相通 その異なれる産物を人性の市場へも う。異なる土地に暮らせる人々が ば、それは機会の全くの浪費であろ 全く同じ事を繰り返すものであれ い。若し、歴史があらゆる場所で、 歴史の初、印度に大なれる影響を んとすることの凡ては、印度はその 私は、物事がそうでなくあるべき 度は 機会ある毎に、 思考し、 思慮

たらされねばならぬ所以である。に耕作され、異なれる出所からもにがたのである。人間は自己の完全は成長のためには、自己の複合的生な成長のためには、自己の複合的生体がある。これ食物が異なれる畑とする。これ食物が異なれる畑にからは、発力し、歴史上全く存在の奥底を探求し、歴史上全くを廻らし、努力し、苦しみ、万物のを廻らし、努力し、苦しみ、万物の

る。 織は、 服 度、立法部、意識的、無意識的教へ、 されている型なのである。その諸制 るのである。そして、国民は自らが に於いて、完全な人間を作り出さん 献 b んする。西洋の近代文明は、そ にしたがって男女を形造るのに忙殺 なりつつある。 練し、軍備は、 然や他の人種と戦うために常に訓 訓練しているのである。彼等は、 打ち克つのに凡ゆる能力を結合し、 所有し、利用すべく、 手を附けることの出来る凡ての物を 配する力を拡げることに費やされ 大な精力は、人間が、その四囲を支 と努めている。そこでは、国家の草 肉体的能力、知的能力、意志的能力 の全努力を組織することによって、 賞罰の標準等は凡て、この目的に貢 民が自らのために、その最上の理想 文明とは、一種の型である。 の途上に於ける凡ゆる障碍物 これは、 驚くべき割合で増加しつつあ 疑いもなく、 彼等の機械 設備 組 毎日驚くべきものと 即ち、その征 素晴らしい 各 国 自

の優越だけを持っているのである。て、他の凡ての物に対する人間自身等の障碍も知らず、又その目的としの不思議な表現である。それは、何功績であり、人間の我意を通すこと

為に、 代表者たる様に選んだか。 此等の類の中の誰を仰ぎ見、 印度には、 かようなことも崇高な功績であった。 損害を与えたのである。けれども、 的成功の範囲内では、印度に多大の 印度が人類の為に得た宝は、俗世間 議を徹底的に探求することによって 連れて行った。そして、実在の不思 も優れた人を瞑想的生活の孤独に 印度が実現せんと試みた理想は、 に、人間を組織することを無視した 目的の為に、冨の獲得の為の協同の することを無視した」。また、攻守の 力を獲得する能力を極度に迄養成 ることはなかった。 努力を傾注した。その目的は力を得 の理想を持ち、その理想に向かって れ、神の実現のみをその目的とせる 人間 - それは、 涯てしを知らぬ人間の憧 印度の古代文明は完全と言う独自 の憧れの最高の表現であった。 王、皇帝がいた。然し、 又、軍事的、政治的優越の為 有徳者、 賢者、勇者、 しかも、それは 印度は 人間の

彼等は聖人(リーシー) 『であった。

である。」 った人達、宇宙の生活に入った人達 出した人達、あらゆるものと一にな 神に到達したので、永久の平和を見 た人達であり、又、自分の霊と一 に到達したので、知恵にに満ちてい 聖人とは何か。「知識の方面で神々 になっている最高の霊を見出したの 平和に到達していた人達である。 の活動の方面では神を経験したので で、利己的欲望に煩わされなかっ であり、心の方面で神を実現したの で真我と完全に調和していた人達で 人とは、あらゆる方面から崇高な 人達であり、そして、世の中の凡て 体

ら、 ある。 げ廻すことは、 よって万物に入って行くこの状態は、 う死せる殻の中に包むことは、 間の霊が、凡てを包含し得るからで 来るが、人間の偉大なる所以は、 を儲けることも、蓄積することも、 壊することも、略奪することも、 完成なりと考えられた。人間は、 するこの状態、即ち、神との結合に い破壊である。これはまことに、 仕事の盲目的狂乱が視界を遮り乍 発明することも、発見することも出 印度では、人類の究極の目的だあり かく、万物と我々との関係を実現 渦巻く埃の嵐の如く、 人間の霊を無情な習慣と言 人間にとって恐ろし 人間を抛 文 破

より、 ざかるのである。優波尼沙土(ウパ いうことである。 ている故に神と平和に調和している 々は、人間と自然とに完全に調和 はここに在る。その意味は、この 「神と一になれる」人々となす所以 た人々を、「平和な」人々となし、又 ニシャッド)が、人性の目的を到達し 達せんと試みる場合には、神から遠 とろりも上に位すると誇る卓越を みる場合には、 ての人間を押したり、肘で突いたり と結合するのである。 これは、又人間の霊の気でもある霊 の人間の存在を浸透せしめることに に存する。この包含の力により、こ 完全なる包含のの別名に過ぎぬ愛 である。人間の自由と自己実現とは 隷ではなくて、自由なる、神の愛人 自分自身の、又は、世間の火との奴 のを殺すのである。本来、人間は、 含の霊なる人間の存在の霊なるも して、自分自身を優越に髙めんと試 人間は万物に浸透せる霊、 即ち、他の凡ゆる火 人間が他の凡

と、我々の所有物は、我々を制限すも、我々を他のものから分離するこは、自分の為に貯えるものは、何でし。」と言うキリストの教えのなかにもがいるの針の孔を通る方反って易駱駝のの針の孔を通る方反って易い。「富める者の神の国に入るよりは、「富める者の神の国に入るよりは、

壁の中に閉じ込められるのである。その人は己の限りある獲得物の狭いの包括の門をくぐることが出来ないの包括の門をくぐることが出来ないに全な調和の世界である霊の世界にの大はことにかまけている人名もので在ることを意味している。

と言うことで在る。 完全なる神に到達する道には非ず」は、まことに、凡てを捨つるも、そは求するに当たり、小利を得んとて汝凡てを抱擁せざるべからず。富を追とする所は、「神を見出さん為にはとする所は、「神を見出さん為には

この故にウバニシャドの教えの精神

哲学者は②、 は、万物に、これまで絶えず印度人 そうでなくて、いんどの精神の傾向 に負う所ある欧州の幾人かの近代 に霊感を与えてゐ神の宿れることを 度の精神の一般傾向と一致しない。 いるかも知れない。然し、これは印 はいたかも知れないし、 的観念に過ぎない。世界に在る凡て 婆羅吸摩(ブラフマ)』は、単なる抽象 解する所か、印度の一切衆生の父 かかる教えは同国人の一部の人に 外の何処にも見出し得ぬと主張する。 の物の否定に過ぎないと主張する。 一言以て言えば、神は形而上学以 直接に、又は、間接にウパニシャド 彼等が受けた恩義を了 尚普及して

返し挨拶す。」
「世にあるものは何でも神我々は、「世にあるものは何でも神我々は、「世にあるものは何でも神我々は、「世にあるものは何でも神我々は、「世にあるものは何でも神我なは、「世にあるものは何でも神

了解し強調することの練習だった。

シャドの神を意識せる人間の宇宙に 拶することを意味している。ラパニ 世界のあらゆるものの中で神に挨 物の中に神を見ることのみならず、 獣に呼び掛ける。「吾に聴け、汝不滅 聖人は突然、歓喜極まって、草木禽 神に挨拶することは、聖人(リーシ 挨拶する。しかも、繰り返し、繰り 我々は万物に現れる霊に到る所で 拝の真理である。「ナモーナマフ」ー 単に知識の真理たるのみならず、 つの生きた真理である。この真理は なく、本当に存在せるものとする一 実在物を単に、名のみ、外観のみで にでもある。崇拝することは凡この 度である。彼の崇拝の対象物は何処 対する態度は、深い崇拝の感情の態 り得るや。そうでなくて、これは万 返し挨拶する。印度人が到る所で ー)の叫びの中に認められる。その こ神が世界から引き放された神た の子等よ、天ツ国に住める汝等

を此処に見出さないが。経験の押さえることの出来ぬ喜びずかの痕跡も無い、直接的・積極的る。」漠然たる所、又は、変動性のわそが神の光、闇を破りて輝き出ずよ、吾は御身等により神を知れり。

る。 ある」と言える時、上述の預言者の ブラフマ、の霊の中で生きることであ ことは、婆羅吸摩精舎(ブラフマブィ なれる時も、かかる意識の中に住む 時も、歩ける時も、座せる時も、横に 望も無しに、凡ゆるものと無限の愛 汝は何等の敵意も無しに、殺害の欲 近くに在ろうと、見えようと見えまいと、 うと、下にあろうと、遠くに在ろうと 宣言と同じ使命を説いているのであ り、動くことであり、喜びを持つことで を発展せしめた仏陀『は、「上に在ろ ハラー)・。」である。即ち言い換えれば、 の関係を保持すべし。眠る迄立てる ウパニシャドの教えの実際的方面

にブラフマの意識に浸っている。太陽フマの精神である。我々は、身心共う。万物を意識していることが、ブラマの物を意識していることが、一き高い、生命である存在、世界の意ドは「その本質に於いて万物の光りブラフマの霊とは何か。ラパニシャブラフマの霊とは何か。ラパニシャ

一五頁

伝えられるのもそうである。を通じてであり、光波が星から星へが地球を引くのも、ブラフマの意識

於いて一切のものを意識している。於いて一切ののものを意識し、しかだいて一切ののものを意識し、しか空間に於いて、即ち、外延の世界には我々の霊の中にもある。」それは光りや生命、この凡てを感ずるもの光に空間に在るのみならず、「この単に空間に在るのみならず、「この

性は、 唯一の真の進歩は、この感情の範囲 のである。 は人間が本当の人間である範囲に を獲得するのでなくて、正しい状態 て、又外的行動によって正しい状態 域を拡げることに貢献しつつある。 層高い、一層広い範囲に、意識の領 哲学、科学、芸術、宗教の全ては、 を拡めることと一致する。我々の詩 万物に浸透せる無限の感情を結合 ならば、我々は自分の感情を、この しか及ばない。そして、人間の真実 人間は、一層広い空間の占有によっ しなければならない。実際、人間の かくて、我々が宇宙意識を得んと 人間の意識の広さで測られる

真に、唯々、霊自身を否定することを抛棄することである。我々の霊はぬ。その代価とは何か。それは自己この意識の自由を獲得せねばなら然し乍ら、我々は代償を払っても、

るべからず。」。と。く「汝捨つることによって得べし汝貪出来るのである。ウバニシャドに日によってのみ自らを実現することが

で説かれているのだ」と。然し、そのとれるで説かれている。即ち、「世界を何か定を下している。即ち、「世界を何かで説かれている。即ち、「世界を何かで説かれているのがえから次の如き断ので説がれているのだ」と。然し、そのが望の全てを捨てて、無私無欲に働いが真なのである。

を漸次拡めることは人類の為すべき を達せんとの凡ゆる努力は、人に を共にするためには、我々は此の訓 尽くすためには、我々の同胞の重荷 ねばならない。我々の社会的意義を 間は個人的欲望の枷から釈放され **厳存を存分に意識するためには、** う)なるものである。かくて、万物の 努力である。 くして、万物と人間との一体の意識 「捨てることによって得ることを、そ 練を経ねばならない。より広い生活 分と比べれば、爾余の世界は空(く いがいの凡ゆるものを見くびる。 して貪欲でないことを」要求する。 自己自身の拡大を望む人は、自分

欠く厚味のない非実在物ではない。印度に於ける神は、一切の内容を

だけ、 とは 撃することでもなかった。それとは反 規模に演ぜられる人類の芝居を目 ふ光と影との自然の るにんげんを見ることでもなく、 た映像となって、到る所に映されてい なかった。それは、奇怪にも誇張され 性質を有するものと看倣す幻覚では に挨拶することは、それを人間と同じ 私を満たして呉れる。この森羅万象 私を大なる歓びで満たし、又、人間 下に立ち、血族関係を悦ばしく認め びとが、印度の空の降り注ぐ日光の を悟り得ぬと我々は破壊に直面する せるもの」を悟ることの多ければ良い も、一切のものに宿れる「世界を意識 ても、社会においても、 然においてのみならず、家庭に於い で神を悟ることによって。 張した。然らば如何にして神を知る あ 知ることは、本当の人間になる事で 印度の聖人は「この世に於いて神を の将来にもかかる時があるだろうと 去にあったと判断と了解することは 印度の詩人にして予言者たりしひと て、森羅万象に会釈した時が遙か過 人間の将来にたいしての高い希望で り、この世に於いて神を知らぬこ 「個々の事物及び一切の物の 死の荒涼である。」、ことを強く主 我々にとっていいのである。 の闘技場で、 国家において 。」*36単に自 中

対に、 た。 ている。 共に死せり。」いる。彼等予言者達は じていた。 学なる想像のはたらきでなくて、じ 生と死との間に何等根本的対立あり 自体と雖も、実在の領域に於ける裂 に何等の間隙もなかった。決して死 彼等が、完全を明晰に直観すること 々内的 がの欺瞞と誇張との凡てから意識を 滅少も知らぬと言うことを知ってい とは海の上の波の如く、 来るものも又生命の流れの裡に隠れ 流れの裡に隠れている。又将来生じ 於ける生」とに、同じ静かな歓びを以 と認めなかった。そして絶対に確信し け目を造り出すものとは認めなかっ 言者は心の静穏なる深底に於いて感 間隙がないと言うことを此等古の予 解放することであった。泳動し無限 人間以上のものとなること、 のみであるが、 て挨拶した。 の方面に於ける生と出発の方面に て、「死は生なり。」。と言った。「出現 現れていること、及び混一には何等 の世界の形となるのと同じ力が我 になることを意味した。 彼等は言う「神の映像は不滅と 個人を制限する障壁を超えて 存在に於いては、意識として 」彼等は、学なる出現と消滅 此等予言者達にとっては、 - 「過ぎしものは生命の 永久の生命は衰微も 表面に在る それは、 万物と

(11) 41

じたものであり、 ている。生命は無辺なればなり。」 「凡ゆるものは不滅の生命から生 生命と共に波打つ

た。

辺である」と言うことが優波尼沙土 善の本質である。 が包まれていることを了解することは 物によ浸せる神の中に人間の自我 ある。」、と言ふている。知識に於い れ故に、神は万物にある生得の善で ドに「神は万物に行き渡っている。そ に移されねばならない。ウバニシャ 礎を持っている。そして、それは行動 学びに、哲学的、若しくは詩的とか 祖先からの尊い遺産である。それは は、これ我々によって我々のものと 凡ての存在と真に結合し、かくして万 いうのみでない。それは、道徳的基 (ウバニシャド)の教えの主旨である。 ても、愛に於いても、勤行に於いても してようきゅうされるを待っている 意識の無上の自由と言うこの理想 そして、「生命は無

(11)

識

即ち、 によ 意識の領域を全宇宙に拡げること する神」の中に生き、 喜ぶことが、 0 「全てを意識し、 婆羅吸摩 古代印度人 且つ働き、 (ブラフマ)、 全てに浸透 の熱望

とる後度そ張し。に大れが ず もの 12 出 知 横洋は れ 、にな 近んとするがを柄杓で 向 れ ŋ を主 る過 \mathcal{O} 如きものかことで ک 達 ことで、 程 張 \mathcal{O} される。 7 了解せん ので、丁 、ばの丁、拡

は分類法を採用することによっては分類法を採用することが出来ることを知っている。重荷が余りにとを知っている。重荷が余りにとを知っている。重荷が余りにとを知っている。重荷が余りにとを知っている。重荷が余りによってとを知っている。重荷が余りによってとを平均に分、取り扱い難きさを平均に分、 に全おて 質る 求 は々 ことに 故 すること ことな 実際 を 特 7 はの であ って さを外 る。 終 を 11 調部 出 こ和の とを すのせ材 り うこと ん料 0 って、 そと求とのこはに企異 人間 い張

に知り来るのである。この分類法の探求は、若し、我々が、こん一をの探求は、若し、我々が、こん一をとなるコン一の法則に基づいている。この分類法を探求することの生ける源は真理の裡に在る力である。この真理とは多種多様を包含まを知る。人間の頭は真理を了解度に負わし続けることは出来る、する力を持つ。林檎は木から落ち、有は大地に降る一かかる事実を包含をして涯てしがない。然し、一度をして涯でしがない。然し、一度をいる。事実を蒐集する要なしの済ましし

は、 は、 の の の 発見は、 人間な で ある。 一人間な で ある。 一人間な で ある。 一人間な で ある。 一人間な の で ある。 一人間な の で ある。 る単純な がなを無に え迄プ恰そ らて放がもの 真理はな つそ 真理 対 人如の象 は、人間にとって純な歓喜。一人間を記憶の重荷からるのである。単なる事実はるのでももので唯それだけでな方の世界を持たない。然知き人が生物学に止まらずして、な一般的真理を発見した時、如く、その初めの目的を視界に拡げ、その初めの目的を超れて、その初めの目的を超れて、その初めの目的を超れて、その初めの目的を超れた方が、単なる事実はれた方が、単なる事実の総計 にた 実 を支配 \mathcal{O} 2 だ 真

であ 実在 越 えなく る。 を目指 す 万 方 と言うことを 物 を包え 含 カン せる無 5 事実を 知 限 \mathcal{O}

だけ広 こん一と言う一大原 えて言えば、 そしてこ と言う時に眼 「汝自身の霊を知れ」即 科学の \mathcal{O} である。 と了解しなけ かの中で思想を のことは 領 域を見 12 各 自 中に 於 H 置 \mathcal{O} れ 晴 る 理を 霊 優 ば 5 11 */*\ لح 波 5 7 な \mathcal{O} ツ 同 尼 言 5 得 中 丰 様 葉 沙 る な に IJ を換 せよ あ 土 様 1 が 判 的 な

見する。 りも 意識 る 5 全 らであ ては、 内部 な せる。これ 々 \mathcal{O} 万 且 す い 狭 利己的 る時、 \mathcal{O} 物 つ他 自 る。 存 11 自 لح 在 己 衝 我 我 我 \bigcirc 霊 深 合 それ 々 々 \mathcal{O} 動 が ちい は 微 せ \mathcal{O} Þ 真 親 め 己 候 5 真 利 が 狭 自 は \mathcal{O} に \mathcal{O} 己 我 己 過 直 的 他 ぎなな 係 自 を 覚 لح \mathcal{O} 超 を 霊 我 融 望 越 発あ をい ょ 合 曇の

字 子供 あ 真 喜 文字を習 \mathcal{O} びも Þ 見 目的 らが 文字自身 え文 我 感 源となる。 る 実際 々 を見落 文字 ことに を疲労させ り \Diamond に 文字 7 が \Diamond 結合 要 لح る ア 求 従 が そ ベ 3 る 我 は 7 す 0 7 ツ れの る そ 7 々 間 孤 が る 7 \mathcal{O} <u>\frac{1}{2}</u> 関 は 注 深 思 との、的意な山文とを 的 意 5 業 何 でののの

> を見出 なる理性 が のみ 発見 めることに 界をを敵 恐怖 本質 したこ は 霊 で と自然は 得る。 唯 は \mathcal{O}) 状態 視 に こん では 霊 々 於 \mathcal{O} ょ \mathcal{O} 霊 \mathcal{O} 界 法 歓 そ た け で 9 自 何 生き 喜 則 る \mathcal{O} 体 \mathcal{O} 働 であ を持 は は を あ 7 \mathcal{O} 引 きとの問 唯 他 律 る 7 る。 を悩 \bigcirc そ か る 9 法 き、 さ 間 の人 則 真 ま 合

を見出 を見出 を失う 言う 言う でも に 在 れる そ な 霊 間 自然 され の眞 を発見するま ある。自然界 に 拡 は \mathcal{O} 7 0 V そ 結 住 関 我 歓 ることを了 が 己 了 が す時、 す 々自身 喜を覚える 合 解すると言 \mathcal{L} める自然界 9 の絆 れ ことであ 7 は、 完 いる調 間 全 在る の も 自分 的 で あ 的 あ を で 解 依 る。 لح 完 あ る。 我 する 自身 لح あ 抹 うこと 界 で り \mathcal{O} 和 \mathcal{O} 9 殺され ある を超 全な る であ である 々自 \mathcal{O} 7 \mathcal{O} そし が が 関 知 1身を発 る 係 覚 形 愛 は 故 間 て覚んに \mathcal{O} 環 了 て、 何 に 境 がこ 付 . 過ぎ 解 間 物 そ け 何 \mathcal{O} 間 لح 見 裡 れ 5 が そ カン 事 無 \mathcal{O}

彼等は 誹謗 る。 明ら に自 人を れの \mathcal{O} 偉 関 治 ハ々と呼ぶ。 生活 国策、 る 大なる啓示者とは、 係を確立する 7 真理を我々に身を以生活を送り、かくて なることを知るが がその \mathcal{O} Þ かならしめる人を言うの 我を棄却 ハトマー 彼等はそ ·迫害、 我(が) である。 宗教を通じ、 の 愛 剥 で \mathcal{O} 1 カュ わ 生活 奪や 即 のである。 \mathcal{O} ちれ \mathcal{O} 霊 奉仕 死 の真 偉 わ でなくて に 大なる霊の で 大なる霊の で 兵 遠 く に直 人類愛 且. に於 の意 つ万 面 印 「する。 いて、 味を為の 社会 度 広 霊

7 \mathcal{O} 即 我 身の 々 けし ればなり」*45 ち「最高の霊」は 点 哀の 々 中 が 何 き為ならで、 優波尼沙土の に最高 に存する。 の子に対する歓 の生ジョン 霊を見ると言うことである。 りと言うことは全 人を愛しよう の意味の於 کی である。 余にも存する。そし パラマ ても の究極 教え 汝 自 ر 余 いって我々の愛人のでは、この真 とも \mathcal{O} \mathcal{O} らの の一霊っ 子 ートマー*、この真理はこ ける我 意 トマー に存する がに欲日 そ 々自 \mathcal{O} 人 我 しく

> を包含 中に が偉 「する 0 た為 だだ 大 な 7 何 真 であ け そ 理に カュ \mathcal{O} り そ れ 全宇宙 だ 見 \mathcal{O} け 霊 が 我 \mathcal{O}

である。

し、此等の制限が屈伸性を力や洞察や微を与えて呉れいして、愛は我々に新しい我々が愛の周囲に置く制限が存することを教えてくれる の性質を示して呉ねの全てはこの第一歩歩であり、明察には 作ら、 愛も、 人に対するな を 阻 結 融 _ \mathcal{O} に 進 自 の愛は、 領域を拡げ に の 時 合することに も自由な拡 \mathcal{O} 々が愛の周囲に置く制限 んで自ら 止 の 子 此 洞察や微を与えて呉れる。 こ の 疑 すること屡 を与え 侵 いなく、 小して呉れる。ここの愛は我々の 愛は 利己的 我 神と戦う 張を るけ の霊 限 的 々 友 が 我 り 7 コ \mathcal{O} 人 1) に新しい 我を捨て 制限 愛は、 ン れども < 歩そのも 付 を Þ わ Þ の最高 明察 対 な 的 随 _ 客 伸性を失 n ならば を知る する。 する とな わ あ な する不思議 る。の一個 すること の霊 確 \mathcal{O} り、 なる。 精に カン \mathcal{O} 意識 の意 他 が Þ 神 う 悪く 歓 他 に、 第 \mathcal{L} が \mathcal{O} 11 S \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 家 真 此 のれ 中 __ \mathcal{O} 識 更

を知る第 て呉れた。 \mathcal{L} 且 一つ、 盲 5 目 U りと る る 先 空虚 喜びを知 高事びを知 の高。。然 を消 すま

まで自分を包んでいた固い殻は、とにより、又、物質的損失や肉体とにより、又、物質的損失や肉体とにより、又、物質的損失や肉体の強大さ~何物も取り去り得ぬとるのである。ひよこは卵の自己中心的孤立から破り出る時に、我々の霊の真理や我々の霊の傲慢、貪欲、心配に超越することで自分を包んでいた固い殻は、 在る。自我から離り即ち神意識の鍵はよ 見をも 本当 あ 我 以な 優 言うことを知る。 かう第一歩であ 知ることは、 我を支配することより以て知らねばならない 方 りと言うことを絶 波尼沙土に は自分の生命 与え 世界に就 成長もせず、 完かの る。 高 11 で そ 7 \mathcal{O} \mathcal{O} りい。 対的 ら撃 は殻 \mathcal{O} 我 解 部でないと いた。 どんなのない でなってい なっていない なっていないと 々 宇 即ち自治の は死物 確 実さを りの自 我

梵語(サンスクリット)で、鳥とは「二度産まれたもの」と呼ばれる。と高尚な思索との訓練の儀式を経来りし人、即ち欲望が単純になり、不りし人、即ち欲望が単純になり、本りし人、即ち欲望が単純になり、を取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取ろうと覚悟して、難行苦行のを取る。

活の自由への再生したのだと考えられている。即ち、周囲との生きれているのである。

中度の指導者達は、否定の生きであった。

中度の指導者達は、否定の空漠たる空(くう)に到るのみなる世界であった。即ち換言すれば、否定の変視にして今一度報告せねばならない。の真理に浸って世界を売得ることであった。キリストが「幸福(さいの人は地を嗣がん」と言ったいもは、一定の事であった。キリストが「幸福(さいの人は地を嗣がん」と言っれば、完全の人は地を嗣がん」と言ったいることを私が、人間が重なのである。そうなる世界を公言たのである。そうなる世界を公言たのである。そうなると言う真理は世界に於ける自分のである。そうなると言う真理ない。位置に握捉として入って行く要は位置は人間の不滅の霊の権

まこ 説 活 P 活 教 仏陀 滅 傲 思想 動を E は 慢 動 < は 説 \mathcal{O} と余は絶滅を説 \mathcal{O} かぬ 煩悩 で みを非難する。 や行に於ける悪を将来す 非難する。 いて「シム人よ・まこと余 善人・シム人*に対 のだ。 寛 怒 • 悪意• · 慈悲 • 然り乍ら、 と言う < 無明の絶 シム人よ 真理 T いる。 する 言 の絶 滅 乍 を

無明 そ 裡 自 き 私 我 命 7 きる 私利 に 眠 我 \mathcal{O} 的 カ ア 貪 々 仏 陀 5 様 閉 る あ 自 \mathcal{O} ブ \mathcal{O} と肉 我 そ 間 頑 る 意識を暗く \mathcal{O} 1 \mathcal{O} Þ デ 説 古 の境界 残 釈放であ いき イアー 意識 知を く解 8 な分離を生 分自 ゆう 囲 5 内 脱 1 る。 命 とな うことである。 身 知 対 制 に に った。 \mathcal{O} 教えは 意 を 閉じ込める傾 る 間 す 限 付 \mathcal{O} 自 5 \mathcal{O} 奴隷 な 帯 る 己 そ 且つそれを で 無 \mathcal{O} する傲慢 明とは \exists はこ たるこ 無明 間 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O}

「然し、 ら河 た。 或宗派 が皆。 た。 自身 「彼等は来るに違い 実際左様ですか。 の教えを説かないのか」と私 7 霊なる者を見出 ません。そして、 えた。今一人は「い だすことは難しいことです。 て 達する時 静かに微笑み、 った時に、自分の つ々ありますか。 が は単純なことです。宗教上の ンガル川の一村において、私 \mathcal{O} の気色はなくも の霊を真っ先に知らせ の指導を受けて、 し逡巡し か」と私は尋ねてみた。一人は ます。」と答えた。 る特徴はどこか分かって 「あなた方の宗教 菩 「渇を感ずる人は誰でも自 へ走るでしょう。 何故に世界全人類にあ 」と言った。 の二人の禁欲主義者に逢 左様に仰言るには から覚めて意識 \mathcal{O} (ボドヒイ) 実体を 仏陀、 て後、「それに定義をく 0 それ そして し得る 高 」するとその 即ち、 りに裡 な 即ち覚者となる 我々がそれを \$ あ らぬ 我には自 実体 りませ 」と答えた の他と異な もことにそ 確信を以 のだと考え 「それな に最高 彼等 迎言る ねば \mathcal{O} なた方 慮や は 完 」と答 全を 尋 な ち自 自 分 11 b 自 師 ね 知 り \mathcal{O}

とを経、 霊を求め を経、 史なの 学説 が 成 間が 進し の歴史は カュ をそれを経て、 場にもどることを経、まことす 何 思議を開 如くに捨て去ることを経、 それを過去に帰した幼年期の玩具の えるシンボルの多くの群れ れを無残に埃 自身を見 は巨 間 向上 たかも妨 か 9 な禁欲主義 て行く この ょ 就せる功績よ て人間は時代 新 \mathcal{O} 積む物よりも偉大であ 大なる である。 一の途は 人間 りも偉大な霊な 巨大な富 幾時代か りと失 で気 即ち て未知 い形を造り上げるために工 げ \mathcal{O} \mathcal{O} 間 人間 苦 廃 \mathcal{O} 5 である。 り の夢想と憧れ 敗 霊 の鍵を鍛えることをことを経、造化の不 \mathcal{O} \mathcal{O} 帝 の世 \mathcal{O} 死即ち分解 7 らりも、 からじだ とは決 を人 る物 ぬ霊 上に投げ 国 の労働を捨てゝ、 山を築き上げ の完全な実現に向 出 ? 滅 そ へとの旅 間 正 \mathcal{O} 7 巨 に の 自 の霊は 大 道 り、 に あ 間 11 を創造し に形を与 る 間 な な で 棄てるこ 7 る。 が築く へと行 る あ 子 べて 振 興亡 0 即ち \mathcal{O} そ そ そ 1)

間は 今も尚 々 の方法 或る実現 度は 9 ゝある。 で、 の序曲 そ 人間 殉難を経 の苦 そ が であ 々 て、 3°

> 即ち世界 ろう。 喜を感 つある。 霊 の 苦 証 そ 意味であ 始 彼等巡礼は、 の自己放棄に に益々近づきつつある。 「全てのものを包含せる」一 人間 明 の歓喜が自己放棄をせしめる。 の神々し しみ、 間 が じな その最深 て呉れる が の真の所有に り、 彼等は常にその 自 殉難、 か 己 皆が ょ 力を試 我 9 慢 の歓 \mathcal{O} 9 たならば *皆、 であ て霊 って の出来ぬも 犠牲等は絶 喜は苦に る。 て呉れ . 向 か 来 \mathcal{O} 無尽 の最深 意識を拡 つつ そうだ、 中 若 0 全く此等 ある。 て来つ の富を る。 対に無 ょ のであ 心 真 0 \mathcal{O} そ 又 7

人間にとってなは終わりがない 知れな であ 宙 福を引き出 適当な位 分 即ち絶えず変転 うに 間にとって絶えず 中 周 の霊を悟 人間が真に自分の る 明 確 囲 心 なる迄は、 いものであ 5 を見出 った 7 11 調 0 且. \mathcal{O} \mathcal{O} 12 その り、 あ 和 他 0 人 態 流 霊を意 る とっ 間 せ 楽 \mathcal{O} 動 時迄 る る \mathcal{O} そ 貧乏 在 間 \mathcal{O} 7 が は る。 状態 世界 識 \mathcal{O} そ る 中 す 又 願 \mathcal{O} 宇 自 \mathcal{O}

離 \mathcal{O} 過ぎな 分子 لح て散 が 確 Ż あ 5 か 熱 る 目 ば 的 到 0 \mathcal{O} 達 ŧ 過 膨 9 ぎ 時 な 7 な な 行 < 代 力 未 雲 だ だ 2 熱 又 そ \mathcal{O} 7 لح \mathcal{O}

支が 緑 球 < である。 玉 され 遊玉の は らさ 水 蒸 序 の 間 垂下 7 気 々 にダイ と 縮 適 8 Y な な 七 カ \mathcal{O} 7 様 統 に 位 0 2 ド た 時 置 る <u>ー</u> ょ を占 \bigcirc 9 太飾にれ 質 7 り た系の地円球

何等尊か ね 盲 我 中 力 れ戦 ないるそれる要素を調が 心を見出 ての の つ瞬 の にてよい ば 々 我 す \mathcal{O} 自制 思 々 6つて、 そ 孤立 受けるかれるのか \mathcal{O} 間 知 恵 的 の 力 になる せる印象も絡 に のを与え とき、 ことも は によ 5 - A の - S ませい - A の - A を - A の 細目 々 \mathcal{O} Þ 9 まこと そ \mathcal{O} \mathcal{O} 7 は無 ŧ そう て のいて 調での生て我らいる目活完々れし我的の成ので

在に*到る橋なり」と。を、即ち霊を知れ。*そは不滅の存を、即ち霊を知れ。*そは不滅の存をが見る。

これが人間の究極の目的でも

れが自らの永久のっかけるコンー、 愛に於けるコンーを求め でしたけるコンー、 ではない。 かけるコンー、 かある。 即れる。 然し、 生命を持た 此 りれの 事 物 りて神に達する時である。れが自らの永久のコン一のの一なるものの最高の歓喜 ならば 処に由来する。 を _*55 と言う! そ のみ して 解する ち、 的 く歓喜を達 の多種多様 5 が 欲望は 常にコンーな満足を覚える 追求 いる あ 欲望は世界 生活 ことに 優 ただその \mathcal{O} にコの \mathcal{L} \emptyset 波 神 即 を己 意於ン志い一 於 尼 2 \mathcal{O} \mathcal{O} 7 に 物 間 中 9 の 専 高 は 、 の 目 的 て っ な れ る か ら 裡 何 る。 が に の 様 「心静に 玉 土 9 \mathcal{O} \mathcal{O} せみ 言 てのつ 々 はで中のれがか在そそに でに故な

て界 \mathcal{O} 我 々 て進 に宿 の裡に在 て の多種 口 す る で行 多様性 見め る る \mathcal{O} <_ 。 なる 道 歓 9 _ 喜 に な $\sum_{}$ Ł う で る \mathcal{O} あ れ を 間 る ょ t 9 る。 た 9 が 了 を縫 \mathcal{O} て な ŧ 霊 解 は然のせっ世

割 のに 浸 高 集 基 直体 体 \Diamond か 直 直 2 7 一礎を置 として る と て、 な 感 感 到 である。と とな 我 は \mathcal{O} 11 の場合にとってもそうである。場合にとってもそうである。物を部分に細かくいで、全ての部分を一所に 我々の眼は自然的に物をして見るのである。霊が最となるものの中に合一してとなるものの中に合して がも は、何等推論若しくは照明は、何等推論若しくは照明 ろ \mathcal{O} خ ق

的ては 人々 直 は言う。 は不滅れる \mathcal{O} を達する」* 7 てこの 中 そ最高れ 神 を了 کے 心の 波 解 霊 尼す即 沙る 刻

状 る々 \mathcal{O} ブ の的にが 態 け であ \mathcal{O} 自 アカ 多種多様 1然界に現 るこの る。 ル \mathcal{O} 7 れにて神 いの しの れ で る外的示いある。即 るも 首 け 形や 内 る 的 羯 我 析 磨 真 の示 力 々 が然と 理 現 \mathcal{O} で \mathcal{O} あは霊 を 中 現 追 る 学 は自 学 のに · — 在 究 裡 \mathcal{O} るの斬す我のにる然神

れごう す で あ のは ごう 何 たる し故 高 奏でる音楽に 震え かかの 要求で喧 Ė な 9 る 部 5, を を 未 . 5 調 分 悩 カン か最高 過 る 5 子 し対 去 出来て にる 取 わい 炆 不安る 息、 た 7 と泉々い

息をつまらせる如き記よう…の誇り、この心の傲慢なる阻害は、飽くことを知らぬ貪欲、この所有能くことを知らぬ貪欲、この所有に由来する。この自己満足、このに由来する。 ある。「魯達羅神よ*」おゝ息をつまらせる如き屍体 飽に みで永久に救っ つに引き裂け、 しむるものよ、 しむるも が 「魯達羅神よ*」お . \ 以为 この暗 そして汝 示 \mathcal{O} 々 恵み 0 汝畏敬 \bigcirc 霊 こを の 恵み いを

測るべからざる隙は、自己を示現 りをどう言う風にして聞き届けて をいるのであるからだ。然しこの 無限であり、死と不死との間の距離は 無限であり、死と不死との間の距離は がは、真理と虚偽との間の距離は がは、真理と虚偽との間の距離は であり、死と不死との間の距離は するも 導き給え。自我の闇って実在せざるものよ 有 現す 自我の な んる地点 が死から霊の目我の闇か そこ の不滅の不滅 な 7 \mathcal{O} 中に自己を され の光明

を汚すものである。罪に を汚すものである。罪に を汚すものである。罪に を汚すものである。罪に を汚すものである。罪に を汚すものである。罪に 賭ける、一部を得 るも 敵対する **賭ける、危険にも実に由々し一部を得んがために人間の全霊の破壊である。それは、人は、人間の我(が)による人** にい値々 勝負である。 比例 \mathcal{O} であ り気を乱さ の誤魔化 分離 り、 味方 準調を 々 我々の意識の気罪は真理を暗く 自 \mathcal{O} \mathcal{O} 失を 関 7 苦 に事物を渇望す 、て、我々の貪 、て、我々の貪 破る。 ましい。 「痛を を完全に る 心の 我々 S 神 る \mathcal{O} よ、 か と見せる 一歩毎 の熱望 の全部 人間 ŧ いて、潔 の々 \mathcal{O} \emptyset لح \mathcal{O}

る。 する。 Ł 者と 聖 渇 あ 进 送らしめず、 て を得る如く、 の成長を助けざるも れ、善に於 立な食物 サ ŋ 々の霊 する汝に挨拶する。 人を満たさず、 < まれて居り、 り大なる生命と統合させて栄養 宮に於いて子はその生命を母 のみ養われる。 の人のも 。」と言われるのは此処に由来すくもの。その人は飽くことを得サイワヒ)なるかな、義に餓えり、交通の水路である。「幸福との霊の内的血族関係の認識で 「我々は我々の人 善なるも 11 何故かなれば、 我々は善であ ては自己自身に閉じ込め であり、 の徳が生来する汝 になる善を。 V のとな ては釈放され、且 永久なるも 天 我々の霊は徳によ 0 養われている。その徳は との状況 結合する。 無限者の記 って 正義は 生の享 \mathcal{O} 態に いる。 我々 であ いる無いな我々い \mathcal{O} に挨拶 る 生活を 霊 楽 は は楽るへ又がかの \mathcal{O} 何 <u>つ</u> 何の物神 限が のの凡ら 9

人間の要求は、自らを完全無

達する。 一瞬時に る。 己 は 自 ŧ 裡に在ることを了 現であるアー 人間 求は自己 ることを な人間となり、 \mathcal{O} は は自 霊 己 $\sum_{}$ 外物では 一の示現に \mathcal{O} 知る 裡な 心眼 らな \mathcal{O} て、 の霊 現 裡なる神 ブイ る神自 が V が 対 開 な 最も十分な表 非 而 人 · フ*67なる. 解する 間 ざる か < 人 その て、 身 間を示現 れ てなされ \mathcal{O} \mathcal{O} 示 最 \mathcal{O} るときには 高 時に 無限 本質は 現た 表現 心眼 を 人間 の示現 を は 現を全 る自 であ する 者 であ 自 \mathcal{O} 7

は自分一個 欲望 殺さ の偉 全に 分を感じることは 人間 大 は出 の真 間 間 なる自我、 それ故に「示現 て来な の直 は \mathcal{O} \mathcal{O} 人間 真 全本領 の環境 \mathcal{O} 12 いることであ 汝 中 肉 の眞姿は了 の 完 を示 幸は 1 に から発 出来な こと、 即ち眞 隠 \mathcal{O} 全 現 れ せよ」*68 な 方 て 自 \mathcal{O} い。人間に在る自 1分自身 解され 我 霊なる る 11 自分を見 は、 て 7 人間 11 あ 汝 る な 抹

ら ŧ であ永(ア か高 自 思 美 る そ な イン からである。 、目的を獲る 、目的を変る れいのの れい \mathcal{O} 目放中に る 中の 有限 る久 は ·に そ で れ 示現 のブ で はなるも は 全 表 \mathcal{O} は 7 故は る由 星 表か 完 のののの 万 全のの 様の 現 創 霊 間 な を 煌 にの 造の \mathcal{O} む 求ばの 状め中の 止な 向 中 於 霊 態 む き かに < \mathcal{O} 原 け 底 天 な 意思 で 無 動 る つ 4 \mathcal{O} 督 思中見なる 一見なる で見れの 意見れの 意見れの て行の日 く最は

る。 そ 入 \mathcal{O} 配 織自 由 間 神 間 支 を承 に然 にの威 王 承認せたと関係 自 我 配 を以 لح 権 \mathcal{O} 自我 を否認 て置 我 を勝 々 引 であ 7 に於ば ち得 す 自 Ś 護宇 る た すること ね いな 肉 \mathcal{O} し宙 間 客 ば 於 5 なの 7 で لح な 1 はな は的 あ彼 か偉 でか迄 5 は る 7 V は 0 大 そ 自 な は 0 7 な 自間 然 王 7) のる 来 神 。 神 で は あ 王 ね る しの的間をは王、支組が自人が 間 め何そば

虚偽と不正との不調和な音楽が勢 虚偽と不正との不調和な音楽が勢 は然たる放恣は神いませば決して 優勢たりえざるべし」と苦痛の余り 順ぶ破目に迄事態は来たり得る。 言に神は我々の自我から離れて外 に立っている。そこでは、神の分のなる自我は、神の力の強制によってでなく、愛によって霊である がならぬし、かくして神と自由に ばならぬし、かくして神と自由に ばならぬし、かくして神と自由に 活合せねばならないからである。 純然たる放窓は神に於いてのみである。この領域に於いてのみである。 のて人何にそ 高 霊 \mathcal{O} が神と一にな 7 言う人 の領 か 間 花 自 ・マのは ・で示現さ ・で示現さ لح **原域に、** 府状態が許 なれば、そう言う人にそのの真の姿を見出すのである。う人に於いて人間は、実際として人間の前に現れる。 がいての がいての がいての がいての がいての の結合を見るからでの意思、我々の愛し も完全な った人は 入 <u>\f</u> 場 を る *70 示 であは 人 い類の「 ***が 人 と 意 る あ永の間し

る。

た 間 で る そ 燃え 現され る人 を通 自 最た を見 尊 \mathcal{O} 身 て 間 U \mathcal{O} る 間 いる \mathcal{O} て 7 全世 神 々 \mathcal{O} 示 \mathcal{O} 取 現 5 き質 を を 喜 除 12 望 \mathcal{O} 西 見がか対 見 がけ を る 樸 る す 実 る 思 れ で覆 類 現 た る さ我 る そ 12 障 のわの十を碍れ々るて愛れ人分見中たは程は

過ぎて 劇 ま 合の る 霊 味 我 奏 神我々て人 を燦 らぬ 間 時 が り ボ で で を り 永ル 々 々 々 \mathcal{O} 0 満 生活 春 に に 形 \mathcal{O} 7 \mathcal{O} 生い、一点は我にある。 める。 き愛 作 あ 我 ル 5 کے ŧ 我 生 溢 って言 活 言語 即 と言う重 \mathcal{O} \mathcal{O} る 々 や見 5 様 がの げ \mathcal{O} そ に 7 来 に 無 思 や尽 間 葉 慣 苦 11 限 \mathcal{O} な (D) 4 5 わる 星 < 表 交 たの 我 7 \mathcal{O} 1 で れ \mathcal{O} \mathcal{O} 霊 幕 言 た 間 示 経 に々 神 人 れ 神 P 神 5 圳 難 思 と 間 を る t 秘 7 \mathcal{O} 々 い。阿 験 の面 面 周 目 そ わ \mathcal{O} \mathcal{O} を通 る。 霊 接 向 が する 触 \mathcal{O} 7 き りは

1 まの形をなして現った。そ、 か我々にとって ちものが父とし、 がう。そ、 あ ち \mathcal{O} 且 のる され は 活 人間 なる 活 合 間 和 9 全体 さの な は 隙 そ 7 ほ 我々が未ず 対等 る。 習 れ戦 は 直 た性を得る 愛 慰 る 慣 11 で、 となる。 自 の生 で 快 B 未だ 満 苦 知 生 たされ、 て は美と言 لح 活 活 12 警 ょ め --- 恵 な \mathcal{O} 見の限内 なる L 間 戒 得 て我れ花 己 に於 り \mathcal{O} る る。 る。 放棄 ゆ 々を 愛、 矛盾 さ 儘 部 る な 全 我 の 形 が 於 統 り t 分 定形 る て々 永 御 はのも のる 限 で 7 人とは善 遠 と無限 う点 され Ł 愛 のは 行為 ベ 調 全て る我和の。々やみ 霊 なる で溢 必 \mathcal{O} で で で で で の 存 の 存 で と もれ で即のに

第三章 悪の問題

悪は何故存在しているかと言う問

とは真実と仮定せねばならない。と言うこと、即ち創造は不完全ではなりと言うこと、且つ何故にはならぬと言うこと、且つ何故にはならぬと言うこと、即ち創造は不完全でと言うこと、即ち創造は不完全でとなる。創造が別な風にあり得ぬ 曳綱 な 却の岸 全の あ カン は 然 限界、即ち可つし、 、この不完全は究極的の* 、この不完全は究極の真型、 、この不完全は究極の真型がし、我々が尋ねるべき真っ 体 限る 造 0 7 が岸 泂 は 岸 同 に 上であるか。換言すり即ち河の限界を持へ 時 と言う言う する究極 カン と言う を 前趣 前 極の事実である 極的のもので 大極的のもので かる。河は河 換言すれば、 ク で の 事を持つが河 で が河 意 進等事 に 進めあ と 同 動を与える。 なる いの のか このにれでぬ題

とは 運 うで 世 で さ 動 は 善 は れ 、な な \mathcal{O} \mathcal{O} それを لح ず け 流 間 \mathcal{L} 裡 に示され 考え が れ 世に障 て、 そ ば て を抱 抑 そ \mathcal{O} 完全に 本質 止 る 法 世 \mathcal{O} と秩 碍 . る。 す 世 界 限 \mathcal{O} る にが B 界 \mathcal{O} 苦 不向限の を 序 神 流 不 を宿 が 思 か界 流 れ 持 思 は つのれ 9 存 目在そ

> である。 性 あにれ人の 傾け 者が 丁度 6 完全を了 から蝉 間は一大矛 り、 幽 閉 は 制限され 7 されな 実際 いる 音 カュ くし 楽を 脱 は 解 に かするが. いでも 盾事 唯 奥底 聞 完 7 9 調 つ毎 き を見が如 あ 瞬時 \mathcal{O} 子 分 かな る 常 は け \mathcal{O} \mathcal{O} 5 と言う そ 出 < 12 連 る 12 そ \mathcal{O} した。 続 動 能 で そ ある。 きつ 限 に 力 完 \mathcal{O} 7 耳を 有 有 \mathcal{O} そ 歌

実際、不完全と言うことは 不存在ではなく、有限は無限 の中に現された完全であり の中に現された完全であり は人生の固定物ではない。 者限性に由来する感じであ は人生の固定物ではない。 が如くに、ただそれのみで目的 が如くに、ただそれのみで目的 かる。苦痛の此世にあるば、苦痛 かる。苦痛の此世にあるは 科学 発 知 的生活 が 科学 迷路を辿 不完全と言うことは 水続性に与らないこと 苦痛にあえば、苦痛にたれのみで目的でにだそれのみで目的での 固定物ではない。 芋 \mathcal{O} に於ける 発 辿り代 展 い方 びう 史を辿ることは 法 12 行 を普 流 如きも 真 で くことであ である苦れ · · · 布 るは とは完全の 理 -白痛は創せ がで目的である。 ه د 及 り、 る らは せ しめ 苦痛 \mathcal{O} で 誤 部 す る た あ謬わ造 でる は 痛

時、科学は我々の頭に「噛んだり、いる自然」の図を掲げる。然し、に果敢なき形や色に固定性を与える。それは、恰も我々の肉体の一平方インチ当たりの空気の重量をがあり、我々を押し潰す様に重いにもものである。それは、恰も我々の肉体の一本方のである。子供や僚友に対するのがあり、愛から発する自己犠牲がある。そしてこの愛は人生に対する愛があり、愛から発する自己犠牲がある。そしてこの愛は人生に於けるな埋骨新の如く見ゆるである。若し我々がある。それは死が少しも左右し得となからでなく、生の消極を知る。それは死が少しもに対ける変がある。それは死が少しも左右し得に見えぬからでなく、生の消極を知る。それは死が少しもに対ける変があり。それは死が少しも左右し得のに見えぬからでなく、生の消極を知る。それは死が少しもに対ける。 方面 重 であ る る と 同 眼 事実 から 5 をが で な開 あくは いるに 毎の少 でい拘 っだす

特殊の事実を分離して始めて死の空漠を知り、愕然となる。我々は死がその一部分である生の全体性死がその一部分である生の全体性死がその一部分である。我々は大きなは網の様にみえる。我々は大きなっのが真理である。安が青く見える如く、死は黒く見ゆる。然し、空がそのシミを鳥の翼に残さぬ如く死は存在を黒くしない。
我々が歩かんと試みている子を見我々が歩かんと試みている子を見れる。ないというのが真理である。空が青く見えるのが真理である。空が青く見えるがようながある。

我々が歩かんと試みている子を見守る時、我々はその数知れぬ失敗を見る。その成功は多くない。もし、我々が己の観察を狭い時間に限らねばならなかったならば、その反復せる失敗に対ったろう。然し、その反復せる失敗に拘わらずとは、その一見不可能な技に力をには、その一見不可能な技に力をまんとする企であったろう。然し、お々は、子供はよし一刻(イットまんとする企でに於ける此等の事まんとする企でに於ける此等の事まんとする企でに於ける此等の事まんとする企びに於ける此等の事まんとする企びに於ける此等の事まんとする企びに於ける此等の方。その苦しみが我々の知識や使用を得る力や意思を実際に適用することとに於ける不完全さを表すのである。その方が我々の知識や使用を得えるが自分の活動の狭い範囲を観察のために選ぶ時、我々の個々の個々の方の活動の狭い範囲を観察のために選ぶ時、我々の個々の個々の方の活動の狭い範囲を観察のために選ぶ時、我々の個々の個々の

きくぼーっと浮き出て見える。然きくぼーっと浮き出て見える。然れて行く完全の生活は我々をして本能の現在の能力上の制限が彼方に連れて行く完全の理想を与えて呉れる。我々の裡に持っている。その希望はそれ自身の現在の狭い経験の制限を置かない。その希望はそれ自身の範囲に何等その希望はそれ自身の範囲に何等をも永久の事実と認めないだろう。その希望はそれ自身の範囲に何等の無鉄砲な夢想は、日に日に実現されている。

我々が心を無限者に向ける時真理をみる。真理と言う理想は有限の現現在我々が持っている者の裡、将来もつべきものの試味を与える全体の命にこの真理の意識はその外観より常に大である。これ、我々の生命は無限者に向かって運動をむけて居り、それに向かって運動をむけて居り、それに向かって運動に大である。そして生命が進むにつの生命を終局という不毛の曠野にうごかなくなる儘にはしておかないで、彼

ことは 神的 を真面 方が 得る に調なわれい う。 ならず 観論 現実の矛盾より完全となる可能性 であ 12 止ま 有ることを数学的には証 に大なること、 調和の漠然率は調和 9 々 食 て過ぎ去らねば、 \mathcal{O} な調子 悪 を要求する。 る。尤も、 ざと造られたと信じ得 強 は は 優 進 す 一人に対し 所が実は人間は、 い込んで、 って道を塞ぎ、 存在は絶対悪 丁度、 を大道 あ 出来ぬ 知的 でも 飲 目にとり得ぬ って けに過ぎぬ を渇き求める することは 乃至 的 7) 悪は の非常な苦痛を 何処かに漠然と立ち止ま にならね る 然 ブ \mathcal{O} からであ ŧ 奏し得ぬ 過ぎ去 統計 ブア ア は 切り込むことであろ \mathcal{O} イオリン 感情 である。 \mathcal{O} であると主 信じ得ぬい それ ばな のそれ イオリンを奏し 全体を攻撃 真に そ 間は 2 る。 * 来 は存在 る。 生命 な、 らず な は \mathcal{O} 明 7 7 人は数千と \mathcal{O} ぬと同じ作るため の弦は不 悪を信 人々 そ 非 健 疑 ょ Ň, 得る。 り遙か 学なる 張 若 \mathcal{O} か ŧ 人しもな し最 \mathcal{O} 立 \mathcal{O} 根 5 悲 U \mathcal{O}

到達せねばならないえず打ち勝つことに 体の材料を欠 を知って居った用は進行 すべき燃 る。 る悪、 意思、 となる。 ならぬ。 自殺 ると信 我 ず焼却することに過ぎな光りを釈放するために、 えざる完全の 理想として完全を持 と言うことを証 なる実例 **了解することが** 全然不完全と言うの 々 5 在自身は慈に於 そし できな あは は て前 したと判 性格は自己 若しくは両者にに そして知識とは真理と言う -を毎瞬 を持 料を て我 かくて亦真 そ \mathcal{O} り \mathcal{O} \mathcal{O} つことによ 可能性 持 方 火を維 ゆ 々 9 0 時焼き尽 つある。 の道徳的 明 向 感じ す 9 7 一の内或 る様な て すべきである。 は V) 我 11 反 0 理を経 対 悪か て いる。 持 .哲学者: 々 て悪であ の実現を経 つ不完全は ではなく するため の智力 我 2 が \mathcal{O} ** \ ある悪に絶るいは外に在 ら善へ る。 生命も くし て、 いは外の る ぐら ŧ 個 我 Þ に 誤謬を絶え ば \sum_{i} \mathcal{O} て真 す ゆ Þ 々 そしての生活 肉体 完全に り得 \mathcal{O} であ 9 職 理を す つあ 12 々 前 中 肉的 \mathcal{O}

三三頁

恵を表してきたのである。 何であるかを示した人々に最高の敬善を愛し、そしてその生活に於いてているからである。我々は善を知り、

の道徳的性質を発 その時に、人間は その時に、人間は だ経験して居ない をなるのであるこ となるのであるこ となるのであるい に取って変わるの の心願*であるい の当達範囲外に、 は 大部 の到達範囲外に、 は 大部 段偉大であると了解な人間が自分は現在見る て拡 あ た経験して居ない状態でいないものを知る様での時に、人間は自べい道徳的性質を意識し げられた観察を す 意 我 な 達範囲外に在り、その目的物 活とは、大部分は我々の現在 のであることを知る様になり、未 ないものを知る様になり、未 ないものを知る様になり、未 るのであることを知る様にな しが変わって来、意思が物窓 しが変わって来、意思が物窓 しが変わるのである。これ意 一層広い生活を得んとの最高 一層広い生活を得んとの最高 が変わるのである。」 発せら と。 「人間が自己 質とは何を意味す 何 カン 私の答え 見え そもそも る そ 刻 であろう。 し始める。 する時 は次 我 のな ゆる姿よ の通 所 Þ る 自 り 0 渞 己一

- 対 る生活に 未だ現のであ も考慮 ざる ら 間する 自れ対 す ざ 偉 分故して 言 下めた 生 よう で は真理を実現する。この犠牲にな め る す は 人となる れ \mathcal{O} ね ば 成 敏存 にすら 現 在 衝 ずに ば 12 な る つと能くない 彼は 感 動 5 11 である。現なていない自己 先見の明ある。 を抑な れず \bigcirc 恐 \mathcal{O} 我に 未実現 道 ŧ 5 嗜好を喜ん 的 力 々 0 い 。 間 効 徳 制 成 لح 的 を < 且 現 \mathcal{O} 敏感 £ りも つ存 於 念 あ ŧ 的 せ ることに 決 前 \mathcal{O} 7 道 に 考慮 る \mathcal{O} 察 は に そ は \ \ \mathcal{O} \mathcal{O} ر 利 であ に 己 な ば 7 未 る て 関 自 そ 来 \mathcal{O} 己的 営 \mathcal{O} あ な そ 7 で るのんで生 なそ犠るの牲 自分 真理 の為 見 能力 間 り 地 時 で は れ得 をあか人にと そにいに るな \mathcal{O} カ

人間が現在の意識の外の自我に対しても敏感である様にせぬ人、何等かの相にせる方在ではない。たんは一人もいない。たんは一人もいない。たんは一人もいない。たんは一人もいない。たんは一人もいない。たんは一人もいない。たがために自分の利己的たがために自分の利己的なががある。人間が現在の意識の人 める時に、コのことな利己主義と雖も、悪な解する時偉大となる。 5 を す あ \mathcal{L} う 得 け 在 に人間は 真 程 を 又 身 め る 理を 求 故 であ \Diamond 隊は一る為 無視 が知り る 知の りそ の志 的 7 。いびかの 悪を為る。最 とを 7 O V S を他損飲 と言う うに 干成わ 人 様 隊 人 あ る 含 間人感 利 認 層 にに な る \mathcal{O} 己 ŧ 識 で 主 力を求 真 t あ 義 理 強 にめかよな合らはのき

は不完全にかける何い ・ とは自己抑制とで 人ての £ 生活 る を **つ** の \Diamond であ の 正 大 言 に は喜 は 対な 故 先 痛 を 間 不道非の が々 で利 で 透 あ難 見 難 道現 道 り辛 儀 々 < 地 苦 逆 大 のか を人 で 的の あ と言うこと 得真徳的 4 る。 り得 え である。こととあってあり、ことともあった。 係 利の 徳 る知動 ある 己 節動 己み謬 不のとすそ 0

証々史明のに ち、 自 重 対いもれはは 高 た か幸 は 体 \mathcal{O} る 知ず、の 5 意 自 みに 価 見 避 £ 福 が の生活 水 体 己 な 1 1 苦痛 とに 利 カ いる 差 生 於 値 地 のけ 価 味 す \mathcal{O} を \mathcal{O} 9 __ 活 持 7 を失う。 かな死 代 5 値 لح 個 杯 V) 品を送る らい。 を与え ば 見 関 見 を 7 わ れ は \mathcal{O} は は 照 全人 於 る ゆ 自 り ゆ \mathcal{O} そ 。い明 Ś る。 を かも 快 0 れ £ 12 我 るも 間 楽は $\sum_{}$ 活 る 殉ば 求 類 面 Þ る 汲 我 7 \mathcal{O} カュ 7 \mathcal{O} Ł 5, 教 時 む \Diamond 知 そ た と を 度 な 々 々 \mathcal{O} NO 5 送る 幸福 لح 者快生 歓 異 る だ 大る は 5 そ \mathcal{O} 12 لح が小我 れ \mathcal{O} れ \Diamond で き 迎さ あ さき 活 が き は 苦 め と ほ な \mathcal{O} 頭 は 海 々 れ \mathcal{O} 人生によ う \sum_{i} る L ど 善 と永 V は れ £ る 重 カン は \mathcal{O} 重 5 異 殉 れ て快 渞 数 れ そ る と 要 そ 日 此 々 カン \mathcal{O} \mathcal{O} 等 る 苦 な 意 れ水教 を ŧ 見 々 \mathcal{O} 感ふ杯海は差で我歴絶高か知痛楽りつ味地のあ楽全な

> る る 潰 々 迫 超 試 t 練 到 人 的 せ 下 ざ に \mathcal{O} 見 る 忍 た 耐 忍 え 耐 る た 悪意 \mathcal{O} \mathcal{O} 点 で あ で

えも言 ら釈放 なり を達 我 即 こ々に仏広々 性 完 自 養陀成の ちキ لح 々 が と \ \ 5 ら \mathcal{O} \mathcal{O} 12 せ 態 9 を 狭 生 5 固 で え 場 され時 道 命 リス 来 る 教 有 で 知い L 所 は 徳 え \$ 5 自 \mathcal{O} 7 \mathcal{O} す 1 霊 歓 は 的 我 我 は 観 力 限 欲 霊 喜 渞 あ \mathcal{O} 無 自 我 生 \sum 察 t 態 で \mathcal{O} 々 \mathcal{O} \mathcal{O} 善 な 活 活 で 限 我 活 天 で 面 \mathcal{O} \mathcal{O} ょ 徳 れ 々 で 口 \mathcal{O} \mathcal{O} が 道 力 動 動 満 な 玉 あに 活 あ ŋ 生 \mathcal{O} \mathcal{O} は 的 は \mathcal{O} る普 束 徳 為 き ての力た 愛 去 快 る 動 る 目 性 動 \mathcal{O} 中 さ 目 0 縛 的 れ は カ 苦 0 2 \mathcal{O} 生 7 5 却 れ これれ 即 動 遍 堵 範 そ 実 力 日 7 \mathcal{O} 行 る 発 空虚 井 を最 言 東 的 であ る 力 9 \mathcal{O} す 縛 生 7 う 全体 使 活 は 7 はな は す こる にか活 る い我高 願

の 真理 到 ŧ 達 が 類 しな を たと 不 瞑 幸 即想の ちし 把 た 握 人時か 間 6 が次釈

*79

特殊の たと。 私に嵐 凶暴に些か て言うのに しよう。 である。 の点を一 いたと感 のごとくに 彼 は学に 人格者だと言 他人と異 \mathcal{O} 更 中 余 其 \mathcal{O} 響も 冒 _ 険 え 対 4 与えな を話 子が 考え うこ を る 間 か 没 \mathcal{O} \mathcal{O} 此 \mathcal{T} 塵 5 却 思を持 する する کے 悩 でも 振る舞っ ることに \mathcal{O} は嵐 まされ 大騒援 れ 嘗て ある ると。 翻 0 0

えた。 私は 最も苦し ら曲がらせることが の側での考慮 「若し む者は Þ 個 がの 自 人 だ 出 然 ろう をその道か 来たならば、 対 」と答 す 自

感情があ 関係を求めると言う 「自我」 問を固執 の出来ぬ 我 答えた。 であ ばならぬ。 々 教え は両者に共通 る 事実 いなけれる はそ した。 ります」 「自我」 何物 「自我 の自我 は かと そし 我 に と言 Þ 存 対 7 な に は 同 で \mathcal{O} \mathcal{O} 在 媒 あ 個 う 我 関 さるること である。 9 らに在る 介物を持 係は である る。 的 てそ すと言 7 々は共通 であ そ「私 \mathcal{O} る う

個性は、その性質上、普遍的なもの要のあることである。我々は自己のこのことは更に繰り返して言う必

置し得るのみで、思は事物を唯、 うと試みるならば、 と言うことを記憶せね を求めることを余儀 出来ぬなら、 測られる 深さは湖 さによ 丁屡皮 さは であ 作っ 対し これ個性 て拡が が個性にとり明ら るままに事物 云うことが真実ならば、 そこで人間 見出す如くに、 は却って架空的でなく 味に在るからである。 るのではなく、 己の個性 って真理と調和することを我 想像力が強くなれ 々 個性 る。 てであり、 我々を災 た奇怪な宇宙 肉体はそれ自身の って行くと云うことを知る。 って測られるのと同じだる。 眼が 「が力強け」 この真実 のでなくて、 は普遍的なも なく、普遍的なるそのの偉大さは其れ自体に の窪みの大きさによ みであ の本性 の意思 眼 眼自身し つさが 古を を扱 の本分 そ その様 人間 れば に り、 の法 の憧れ \mathcal{O} ひ 得 で満足出来ぬ カ ばなる程 時 頑 \mathcal{O} 9 か の意義を失ふ を 強 め に従 丁度、 強 なる 倒 個 湖 \mathcal{O} \mathcal{O} Þ 個性は自 視 死 物 さ 逆ら なる 善 と云う方 は真実に へ向 我々も自 の水の深 ることが め 質 のこと 、それ の欲 間 って ば 子を 確実 る。 9 湖 如 7 \mathcal{O} カン カン 食 在 意 5 て 中 \mathcal{O} 0 自

の一つに挟まった。若し一瞬時である。これの をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 を利用し、櫓の助けを借りて遡り を利用し、櫓の助けを借りて過り を初用し、櫓の助けを借りて過り を初用し、やの外なる物を知ることは我々 にである。この物を知ることは我々 ならない。事物を知ることは我々 ならない。事物を知ることは我々 ならない。事物を知ることは我々 ならない。事物を知ることは我々 ない。これ死に於いて始めて我々自身の がっものを考慮に入れねばならな い。これ死に於いて始めて我々は の一つに挟まった。若し一瞬時で をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあげるか、河が凹むだならば、 をあり、カウに表の は我々の外なる物を現るが儘の ものとすることである。即ちそ ものとすることである。即ちそ は、自己の個人的観念を凡ての人間に である。 である。 が、これなばならな が、これなばならな が、これなばならな が、これの限界を拡げることである。 これるがあである。 のものを考慮に入れねばならな が、これなばならな が、これるがある。 の人間に である。 ものとすることである。 の人間に である。 ものとすることである。 の人間に

則 こしな凡眞愉自孤い外 れをのむかての 快 己 \mathcal{O} るっの詩 な 5 者 なし らば、これの のである。 せることがは 彼な れそ は媒 V) 若 出 を で万介 で我々は 詩人は、 おを持んがにに あろう。 で我々は う す

> ・、これ、人間の最深全体と合って融合する。 益々大となることである益々大となることである。 一である。 一である。 一である。 一では、我々い。 である。 像に世 に な そ に れ ての見 そに 自 苦 の世界に 痛 る 世界は、世界は、 出 を な則我の しは々 間 的 々を我 了々そ た一 が な \mathcal{O} はれ能た法 効 突 なの 自 らば 要素 果す 偉に 己 々す \mathcal{O} なると
> なる
> に 従 でくが る がる のる大 のが た あ万な S لح カン 自 るかった。 いあった。 いるかった。 いるがった。 いるがった。 の時も な \mathcal{L} 我る とに ŋ う。融た がの り、

るは求我い々遍之普べ我め々。は的に遍 我則て則を々はいはす 遍 しべ我め々 る程 自 我 る 排 今 きを 々た 的 身々が斥 自 日 の力 力はをか故するは我支らにる 馬 で 期 鹿は待 向 の我々配離強 こと で 便 即 7 L は我 宜 た K 自 すれ < るたなのな々時 れが身 我別 \mathcal{O} に小の法或つ出いは代 た た 来 な 則 物 そが めが 力 ぬ我ん 5 لح る あ でで あはこを々な 2 中 るなく、法の法 た 、で \mathcal{L} 止 法 々に即あ っ法と

法

な

Þ

努

権

関係と云う原理を己れ自身のな なき関 て を 以 一 なき関係と云う原理が宇宙を一貫その通りに用ひ得る中絶することせる身体と呼び、そして全宇宙をて以て我々が全宇宙を我々の延長を一貫して存すると同様に、依っ 力で十の 力 に圧な 要 苦 を己自身 わた 宙 7 < 7 身 存 今日 倒いの何 真 求 て 我 我 官 自 の宇宙我に対する自己の要求学日の科学時代に於いては、任すると云うことを知る。そ 分に確 れる あ 々 **を得る様に る。 々は依 の 全 移動 腱とな \mathcal{O} t ŧ 器 理ももがのの のとな <u>\(\frac{1}{2} \)</u> 則 や欠乏を 官 は 々 することが 2 \mathcal{O} り、 な る は 我 と 我 کے 7 なる 呼び得、 ک 体力 学 遍 我 Þ 々 々 り と えば は を 自 筋 は 征 々 的 々 \mathcal{O} \mathcal{O} 7 0 々に身用 知 己 肉 蒸 は 此 力 我 となる。 体 気や電 ひ得る を増 出 我 々が 2 \mathcal{O} 々 温々るや外温がて来正欠々要的は道死に的ないぬ当点の求 組 全身 そ貫 つ織 全 で 態 け 的 得 我 自 を て 突 個 子 0 \mathcal{O}

そ

せ

気

覚

宇

0

三九 頁

でお態 絶 ても同様 為 な ぬ々 ら一 調 普 々 生 でれ \mathcal{O} 特 では \mathcal{O} の活は ば ŧ 対 は 層貧 ŋ 苦 時 が \sum 遍 乏 ならな 権 如た とは あ の的 に我 家 しま 宇 防 の欠乏であることを知 性 を 享 受 せ ん と 自 庭 \Diamond 弱 我 我 宙 幸 なもの Þ ね を生 間 我 我 な が は 利 間 々 で 々 対 はぬめ ば あ \mathcal{O} 的 真 己 \mathcal{O} は 々 正当な る。 道 他別人の 成功 なら 対 あ 々 の的 願 の精神的 ぜ \mathcal{O} とするなが、 を き λ 徳 する 家 凡 到 る む な に 7 的 んと欲すれる共にいれる。利得をお な 取 庭 文 防 か戦 的 我 る 事 7 む 苦 方 \mathcal{O} 充足 る る を 実 り 明 塞 1 に 々 個 かいの で で 面 生活 諸 0 支配に の裡な 云 0 な る を続 物は一 する。 井 のは 如 如 \mathcal{O} 渇我はのか うく き 本質 内乱 する とな 的 報 W る。 玉 \mathcal{O} 我々な失る 自 後 け 望 に 突 我 何 で 7 で 我 7 もろ状な般然 を っ楯 る K K

された る 目に物事を到らし 制 \emptyset 度*を我慢 られるヾ 形態を作 人為 を引 引き起 \mathcal{O} 的 生活 9 S 強 ねばな 我 り \Diamond 々 制 は ŋ P \mathcal{O} 毎 秩 8 返 序 瞬 虐 る 5 只 を 時 政 め 維 様 \bigcirc なやが 組織 持 す

5 な 且 をを計るべき竿尺となる。 痛自身は貴重なる る 普遍的意思の主権 なる為には、 ことを知った。 なることを如実に 五つ又その法則はない力の法則に従はな なる。 る らぬ 有限と無限 々 は力強 ば 状態 々自身 苦痛は に達する \mathcal{O} 且つ又そ くなるた 我 そ 々 我 我 \mathcal{O} 悟 我 財 時 調 に は \mathcal{O} 々 々 なるこ 様 らね ば 従 産 が \mathcal{O} \Diamond \mathcal{O} 和 個 々 自身 歓 中そ が 我 普 は に に 完全 的意 \mathcal{O} は 喜 \mathcal{O} 々 遍 の裡な 的 \Diamond 幸福 時 \bigcirc \mathcal{O} 意ねばをに 5 真 科 に 3 苦 め 目 価

人間が を歓 分価 要なる教訓は ると云うことで であると云うこと、 値あ その 間 に替え るも 人生から学ぶ 利 \mathcal{O} る とする 此 訓を感 んいで。 < と云うこと \mathcal{O} て、 世 そ に べき最 \mathcal{O} 間 ぜぬ 苦痛 は 苦痛 は 7 で苦間 をが

な意思が 不高 々 ある \mathcal{O} \mathcal{O} ŧ \mathcal{O} 困 訴え 要素とすることの自 が 宜 لح が自己 ため 自由 はなか 裡に の自身 出 難 試 女 5 死の と云うこと \bigcirc 分 ってもその権 意味 を歓 であ で みる をそ 来ぬ は た れの \mathcal{O} る 即ち る に は は あ 困難 困難を救 ったから の も 愛 母た \bigcirc ことに で \mathcal{O} 決 却 周 が った 個 困 富 と云 な \mathcal{O} \mathcal{O} 9 井 を取 権利に < るも さめ \mathcal{O} \Diamond 反 我 困 て 難 \mathcal{O} 死 7 \mathcal{O} 難 利 る う P 長 苦 は な 彼 かな 面 7 如 で 或 を人間 ること ک 自己 を あ 5 親 了 苦痛 れ 男 ざ に 7 歓 لح < で \mathcal{O} 女 \mathcal{O} り 9 何 とを ても あ 放な り、 喜 自 由 て、 ょ 母 12 救 ま 類 は \mathcal{O} \mathcal{O} 暗 で を恐 である った。 命 手放 た 々 せ 己 \mathcal{O} 棄する積も 0 衝 \mathcal{O} $\sum_{}$ \bigcirc 1, 2 見 令 る 家 存在 の歓喜 の自由 彼女は る 要 らふこと 裡 は 自分自身 て母たる すこと を与え 素 裡 12 \mathcal{O} P 送 うう 宇宙 ずに 人間 した 親 完 は す \mathcal{O} \mathcal{O} は最 で 便 我 \mathcal{O} 切

ことに 沈 限 知ね恵 貧乏と堕 徴 ば λ \mathcal{O} • 2 で さ な 我 即 可 7 7 対 能 いら 々 \mathcal{O} 性 する る 7 82 は 苦 愛 で と云うこ \mathcal{O} 硬 لتح 喜 る いを 苦 得 λ 喜痛 $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ Þ を 底 償 る \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 全 に 苦 永 裡 で た カ 世 然 痛 あ 久に を \Diamond

で 投痛 ある を 奉 が悪と 苦痛 占 り 仕 のは が故 現として傍) を 投 これ 献 \mathcal{O} である。 のげ で な 助我 たられ 痛 Ś け *82 祭 侮 り、 を に、 壇 が 観者 懇 のた は 自 に且 そ 前 7 る不願 己対 0 ドのに 純 滅 満 す す 我 黒 本 潔 のる る 足 々 を 復 の完 高 い当 時 \mathcal{O} の面の処全のた 習 不 歓紗位女へみめ と幸

第四章 自我の問題

私の存在の一極に於いては、私は

を押し出 るも 個 列な で 7 げんか 宇宙の 異 列い 物 す は 性 恐 て ては と が を突き破 を維 ろ いる。 る 性 偉 \bigcirc 然 は 測 と かって来ても、子宙の全重量がる。私は絶対 性 諸 を 大は、ない 包 そ 方 の仲 は出来ない。私に、一でいる。 こで れ括 なき造 は力 奪 立 を自務 自成にいた。 定 見掛 は 間 7 型 凡存 関係 であ め つは 'n を る 私 物 け え 基 \mathcal{O} 塵 7 て在 与 な <u></u> 는 こはれ小 が り対 と云う 上 は る 礎 主 個 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} لح さ 中 え 自 0 的 + 全宇宙 部 人 亚 \mathcal{O} 他 物 構 個 3 等 لح 等 無 かな 7 ŧ, は \mathcal{O} کے 分 分余に \mathcal{O} 中 そ さと 拘 凡に私の 無 と云う 同一 な点 0 V O は はが 類 て 個 てせの上比 極 7 で わ な · つ を あ めそ らのし個に類 個 性 孤 でにに わ ず物む性のなの立環は 実 0

えば全世界にとり損失となるものしかも左様な訳だから、それを失己が物と呼び得る唯一の物であるは絶対的に無一物となる。個性は である。 がて に は 特異性を意識 に個性を通じてのなは普遍的ならざるが 物とない いる場合よ 性 を剥 7 し得る。 個 奪され 性が最も り が せずに宇宙 み我 層 が る \mathcal{O} 真 故 価 な 特 喜 大となるもの 成である。故 である。故 は自分の は自分の らば 質 如 び である。 個性は 即 無 5

る。 真に 普 が す ŧ 全 E \mathcal{O} 温的な る 中に 裡 \mathcal{O} が \mathcal{O} 自 儘 喜 無 に \mathcal{O} 1びを我 比 在 己 に その完成を求 £ い の な 裡 る と云うことをそ のは、 裡に働け て置こうと云う のであ 限 に与える 者 常 \mathcal{O} る。 る普遍 めに 喜 び べい 無 自己に対 自己に対 るものは日 比 2 あ 願 < な $\hat{\mathsf{z}}_{\mathsf{o}}$ É いりは、完 \mathcal{O}

離と云 と分離 ことに 気 は 恥 た 間 めに 層 財産だと考えることは 来する.分離 • がこ 然 罪 何 何なる楽園よりも人間にとり、安心してまどろみ臥していいると云う意識は人間がいった。然し、それの子宮裡に自我が全く無邪いの子宮裡に自我が全く無がは、分離という意識は、分間がいると云う意識は、分によって証明される。然し他によって証明される。然し他 切なも は苦痛を嘗 \mathcal{O} 自 のな 我 \mathcal{O} \mathcal{O} 分 \Diamond である。 離 罪をも を最 も貴重 自 犯す 我 \mathcal{O}

> んと云うことは少れ人類の最高目的は気めないであろう。 をしめしていれている。 は 決 と犠牲 ど な 居 とである。 自 値も持ち得 9 たな 値 我 ないであろう。 Ŕ りし \mathcal{O} り らば、 以 価 かを示し 値 を < の犠牲 苦 め \mathcal{O} 1 、 る。 んで であ て居 の も 我 何 物 4 Þ 面 者し自我が苦宮のが獲られしなる。その獲得は ろう。 自 かか に をも意味 7 は で で 実 ŧ . と つ 損 ヾる場 我 1, 計 は 11 る る 失が 犠 疑 \mathcal{O} る \mathcal{L} 絶 犠 また 牲 7 11 \mathcal{O} しな 多面 如 何 牲 何 が 示 な 滅 で 自 た をなな きこら 我 あ \mathcal{O} 々 価か痛かはで

自我の苦しみや様ならその時に、 を貴重なもの <u>ئ</u> が むことなく犠 に対する責任を引き受け って、まことに 意義を明らか らかである。 である。 あるなら、 に終わらずし 若し のたらしめることはみや犠牲は却って自 犠牲 に悟 自我 若 牲を嘗め 自我 然 り、 の自 12 りと て充実に終 自 の 消 相 我 当する た 我 熱 が 極的性質、 小 人 って自 7 \mathcal{O} に自 空 々 積極 さ わ に 獲 S 我的明 我 る

考えな は自我 上述の序論を る。 それに かった かった減 答え のかを以一ど人て どう 類 るこ す がかのれ 私に云と云 最 ば 高 は 容 質 う 目印 易問 こと 的 度 لح

家に そ 思 惹き起こす所以 せ を生活に実現することに 大な予言者の教えが ろうとする人々は て 言葉は生活 が 5 説 想を んと試みる時 \mathcal{O} 重要なれば 少 辞書を引 到達するだけ 漁 言葉を辿ることに である。 玄関 明されね 憶 自 7 々は 表さな 言葉 る頭と云う才 (すな) へ の と云う前に の手真似 言葉は 成る程 絶えず ば ならない どり り口を見 7 ょ である。 限 人 そ \mathcal{O} 2 を怠 後関係 間 網 能 であ 我 唯 って止まらさ くな 我 Þ そ の意味を知 心る不幸なに忙殺され 。これ 形式的に き論 って理解 ぎな る 出 間 され し得ぬ って来 によ 人間 言文 も偉 9 7

死れ らず、 の理想 いうと云 が リスト教に於 用された。 \mathcal{O} 諸宗教 極 めて熱 眞ならざる生命 に於いても、 う観念を表 \mathcal{O} 心に説 \mathcal{O}

ん滅のシンボルと同様である。槃(ニルバーナ)紫即ちランプのじ

る時、 について、かかる誤れる考え方をす我々の無明なのである。我々が自我 ことにきまっ 達せんとする人 るのである。その時、 目的とするが ことで在 止め置く何等 | 度道の埃に 我々の自我がそのままで真なるれは眼にとって何等損失ではな み眼瞼があげられるのであ 物が取り去られる時、その時にることである。この無明なる妨 る っていることを考えしむるも 如何なるものをも破壊すること いる。 尤もこれは不可能なる故 を通 自我はそれだけで完全な意味を これ自我 *からの救済であると主張され の自我がそのままで真なるこ の目堵を妨げるものを破壊 我々は る 消極的なるも 積極的であり、 て自我享受の 度特有の思想では のである。 らだ。 ょ け 7 如き方法で生活を試 \mathcal{O} への如く、 びがみつい 自我を生涯 本性は過ぎ去 いる。 方法も持ち合わ 無明 つある自我 そして、 我々の な 自我は我 て目的 的 我 失望と云う ビイ 真実であ の究極 Þ り、 り行 運命は 我 12 人生 せな 地 のは デ 間 Þ そ

次第にきえる。 を持たないので で行 で、 るが 1く不自 丁度自分 火は燃え 然な \mathcal{O} 子を食 上 獣 る が \mathcal{O} り 如

げたことであろう。そうでなくて、ってのみ一掃されると云えば馬鹿の国語の無知は、言葉の破壊によ 束縛 き所に停まり、我々をただ言葉に完全に覚えと凡ての言葉は在るべ イア) これ即ち解脱である。 自由を見出すであろう。 \Diamond 時 のこの足枷 が何も我 \sim 未知 する に我 から逃れ 内的思想に導 の言葉 のみでなく 々 々に言 頭は内 . ら 救 ね 無明*8 ばならな って 葉]的思想 々 言 れる \mathcal{O} 1葉を超え で な 足 にその し我々 いど た あ イデに

汝 無 自 \mathcal{O} 我は 4 か くて、 で目的なりと思わし で ら逃れ を知 るてふ我々の考えを妨げる その限界を超える思想を包 って自我を足枷 唯々無明 我々をして自我はそれ 来 す 自 Ź た むみょう) 由 たら り云 自 汝 \Diamond 12 は自身を せよ。 又 う \mathcal{O} L 理把 む

我々は自己の最も真なる本

こと たる人 教 なる刺激 ることから脱 を達 の本分は 芸 から脱 自 家 て我 は 的 Z 却 骨 自 自 \mathcal{O} 由 芸 する Ļ 折 由 充 の本性を破壊す を見 術 実するこ を 9 て模 \bigcirc \mathcal{O} である。宗 般 理 倣 す の賞賛 芸術 を企 を見 とで そ る 7 \mathcal{O}

ると云う。その意味は、我々の本性れる時には、我々はダルマが侵され目的である。何でも悪いことが為さ て 我 我々の自我の裡に働きつヾ た本当のものなのである。 に背いたと云うことだ。 本性であり、 いる。ダルマは、なの国語では **は普通、 梵語 (1の最奥で通、宗教と英訳されて(サンスクー 精神であ ŋ, 我々の本性 ダルマ 含蓄され あ る最高 は \mathcal{O} 0

の特別の恩籠によりてのみ、本性と考えられて来た。そし見えないから罪深いことが人ダルマは内在せるが故に明ら 来た。これは り、これ る特別 中に包まれ し我々の裡 たままで 種 本 木 か性 子 の本当の 11 に の本性 ょ 成 長 0 ラネ へ · · ĺ 7 ること 得 はそ t 種 のみ 。て 子 る 5 \mathcal{O} で は \mathcal{O} れ 特 あ で 殻 別 7

我々は自信のなかの生きた種子が我々は自信のなかの偉大なる目的が印度自己のなかの偉大なる目的が印度の最も偉大なる人々の生活に具体のあがらぬ様に思われる多くの個人的生活があるが、なほ実を結ばないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその本性ないままでいることがその生活に具体のあがらぬ様に思われる多くの個人的生活があるが、なほ実を結ばないません。 る。 に以 7 に 的 自らの殻を破って自らを力強(ダルマ)でなく、個人的生 言 地 り出さねばならぬ 本質と運命とに はそ てそ 伸 \mathcal{O} 5 中 \mathcal{O} 種子の自 \mathcal{O} 得る。 れ真 その種子にとり牢獄 木と云 びて行き、 若枝に変へ、空気と光 で無駄 \mathcal{O} 木 マを見る様になり、その時に 到達、 のダル 非実現である。 \mathcal{O} て来たことを疑ひ の充実を達する犠 本性 にされ を取る時 由 では 類 即ち木となる種 の実現と云う点 マと云う点 はそ え 到達するこ 四方八方に枝を 白 な のだと確 は 歴史に於 \mathcal{O} 抛 見 腐らされた種 ょ 本 性 棄 うが 出 附 であ で、 そ ŧ さな とに 信 لح 1 て、 \mathcal{O} た。 張中 在の

間の本性(ダルマ)、人間の本質う最高の理想を知る時、我々は人我々が人間の持つ自由と云

ある。 そ 自らに 犠牲 を得 て自 壇に運ぶべき器である。 もこの犠牲をそれ自身 牲にすることを要求するが 人間に るのである。これが人間 理である 確証され (ダルマ) であり、人間 の 何 物 の天啓を説く の生活を送 勝り、 於ける高尚 人間の自我はこ 何物 かは高尚な性質 と いな かを求めて < 9 事 いことである な た 性質は 々 7 る \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} Þ 歴 んを凡 史によ 常 犠 0 報 最 \bigcirc で 酬とす 牲を 宗教 であ 深 あ に自 常に った。 う 7 \mathcal{O} 犠 真 る。 己 印 n

すために自我は大ならんと自我とである。自らを見せれによって自らの意味を改 ある。 る光 物を捨 祭らさん 財産蓄積 らかす自我と、 る方面より見得る。自らを見 るために自我 我々は巳が自我を二つ てのも の台上に立た 芳香 そ 自らを超越し て \mathcal{O} を注 蕾 を自 な り、 自ら ょ 持 ぎ W 7 5 を啓示 啓示 出 る凡 せ の異 そ 咲 \mathcal{O} と き出 所 試 試 $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ みる。 美 4 5 す せ な 7 \mathcal{O} £ す る そ での カン

ちこたえ、 ラン る。 油を 些 か 0 か ŧ り 把 洩 れ λ 7 め あ 様 安全 に 守 ラ 0

は 高 る 態 説 それ点 時はか 愛 ので我にし

真義

答えでするをすった。 理由 質 間 い。愛は唯々それだりと理由を問うご 目 ある。 と言う \Diamond る。 時 頭 そ \mathcal{O} 何 だべ 故 我 7 き余 け お 我 々 何 前が 々 故他 最 地 は はかの 愛 そ 後は 余 す は のは \mathcal{O}

プ

は 物

う

た惜

自

ラは

 \mathcal{O}

لح

さ

れ

ラ

味

を見

頁星こ絶えず惹からる。我々の財産の見気もなく譲与するが 皮膚としてひとができない 人間は強いることを強 成る程 たも 我 とは ぎ取 ŧ それ す せ 丁 れ膚 る 々 度 \mathcal{O} り、 は未熟 我 人間 は はそれ等を容易 で之を引き放 人間 である。 熟 々 べの財産の凡で 譲与するが知る こことり歓 する様に 枝を傷 利 が 5 愛 我 1 \mathcal{O} 11 己 , ° 失ど 果実 る 汝 心 々 る に は 癒 9 は 取 \emptyset 7 で \mathcal{O} 見 \mathcal{O} 喜時 着 癒着 を 財 < り す ね 木 放 t 反 え財 に放 そ کے 対 憑 کے 7 如 木の 5 ば カン 棄 7 人 がき も Ш. る産 は らそ ぎる す で 重 癒 方 カン 重 が \mathcal{L} な 間 L 放 棄 4 着 向れ て は と 棄 らぬ 等 自 が 何 利 に れ己的 のであ ** \ のである。 第我 を放 分で す する 己的 充 が 放 れ 光々のこのこ をも る。 る。 如 棄 こ然

る。

で 仕 由 ある。 なされる 事をするに無視無欲たれ で 為 た < 自 < ある。 に働 \Diamond 苦 由 7 を見 \mathcal{O} に 痛を惹き 。これがギーター*の説くことは行動に於ける なされ で 々 は 出 \mathcal{O} である。 完 す 起 ること \mathcal{O} 2 な で そうとも あ 愛 それ \mathcal{O} る \mathcal{O} みが の教 故 自 自 何 えく 自愛由愛程我

する。 達 完全 け 於 せ 親 れは 現 すい な はる せら る ざることに在 け ギ ける自由に はその子 て仕 我 7 我かの 自由は 々 で れ 故に我 み我 れ得るの ば 事をする時曇 が は 々 らであると。 行動が自 の奉仕 在る。 は 云 \mathcal{O} である。 仕事に らず 自 う。 0 の真 1 実際 ک Ξ は らされ ک に \mathcal{O} 恐 由 \mathcal{O} 自 自 怖 おの 7 我 で 本 い行 由 分 に 々 を示 る を示 は 強 \mathcal{O} 行 \mathcal{L} 行 制 動 本 限 \mathcal{O} み於に動現母 性 り示 現 さ

ヹ 造は ŧ 等 力 ウ $\overline{}$ \mathcal{O} 行は神 に の 示 ニシャ ない。 のは神 あ る。 は自らを実現する。 現 の本性に属す」*96 で れはその 故に神か ッド) そして優波尼沙 創造 ら課 に 日 そし の業 \mathcal{O} せられ < 7 (ワザ کُ 智 \mathcal{O} 同 土わ 創 た此

> であ らう 等 向 現があると云うことを指 である。 行 は \mathcal{O} か る。 ま って 必要に迫られ れる。 V *97 کے ٥ 故に創 進み そは神 行 創造 これ 万 り 造 き、 維 物 する \mathcal{O} 7 持 は 神 別 造 に神 され 歓 歓 歓 の言 \mathcal{O} 5 喜 喜 \bigcirc 喜 創 れたも 自身 葉 は \mathcal{O} 造物 \mathcal{O} 完 中 で 神 ŋ 歓 全 産 \mathcal{O} は 喜 NO る示 かの何 愛 ま わ

この分 を切放と 芸術的 素を持 嫌悪は る。 こと 7 によ 芸術家は てそれを遠くに 9 カン \mathcal{O} 分離 要素 とするため って 愛 我々自身を 離 観 唯 要素 つに \mathcal{O} のは 本 の要素と究 とを持 分離 念 それ . 過 歓 愛 す 即 \mathcal{O} __ \mathcal{O} ぎな は ち嫌 喜な 層完 充 要素 即 \mathcal{O} こと ち単 置 を具体 実 < な 創 _ 9 極 全 き に 時 11 け 造 層完 逆 父 悪 \mathcal{O} 親 物 で に 即 に 歓 \mathcal{O} \mathcal{O} れ 自 \mathcal{O} で 5 あ 全 我 眺 が 真 لح 分 喜 分 ば る。 う 理た 観 分 なら 離 に自 を そ L か る が \Diamond らそれ 12 に 離 で て 物 感 \mathcal{O} 上 子 る 具体 分 لح 見 過ぎ な 故 こと ず 愛 X カン \mathcal{O} え は す 同 < 12 \mathcal{O}

神 其 他 \bigcirc 我 ŧ 々 は \mathcal{O} か 5 自 \mathcal{O} 我 分 \mathcal{O} 離 意 に 味 見は

れつつある側に見出されるべきであると云うことを知らねばならぬ。 これ小我の自我の分離が印度の幻覚と看破された所以である。何知覚と看破された所以である。何知覚と看破された所以である。何知覚と看破された所以である。何知覚と看破された所以である。何時間の欲望を満足せしむる。それは反逆的で、破壊的な突然の分離の景在性は時間の欲望を満足せしむるために、時間の欲望を満足せしむるために、時間の欲望を満足せしむるために、時間の欲望を満足せしむるために、 そ な鳥 を包 と順即の 醜 さ さを飾る ざる実現 羽毛 にま 離 1) 、即 せ ろうと る自 ために美と云 以上 印さ, 覚 $\overline{\mathcal{O}}$ てを 7 ことは れは う云うて 7 容赦 え 7 う な

黒湮である。はない。それは愛の火を予示する

終に根負けして、紙幣は絶対に無価値な物であり、火中に投ずるに のみ適していると云う結論に悲し くも到達する。然し、賢人は銀行 くも到達する。然し、賢人は銀行 に」、それだけで貴重なものなの に」、それだけで貴重なものなの に」、それだけで貴重なものなの に」、それだけで貴重なものなの により我々の自我は無価値なもの とされる。この自我が測り知れぬ。 価値な物であり、お類の馬鹿げた方法で 喜 を 重 変 幣 立ねたり、 させる魔・ を想像され であると 力 が 隠したり、 価 7 が が欲 で処理 有る ょ 無智 値 ^{*101} 不 の て 測 か 死 み 来 り はが死 た りるのい

す。
*そして此等の形の眞姿を見出め。
*そして此等の形の眞姿を見出此等の形を現金に換えることにな

滅 滅 結 れ 捨 る。 なも 果 7 的 事 \mathcal{O} 時 5 であ 性質を与える。 要 別 性 を 間 \mathcal{O} へ素を持 質を帯 \mathcal{O} れ \mathcal{O} 間 が る時 必 に 壊され 合わ 要が起きる 間 人間 **つ**。 。 そ 人れ る \mathcal{O} せ た儘 仕 \mathcal{O} \mathcal{O} 間 が 仕 手 そ 事 に於 とる 事 放 時 配 に 自 が に とな 9 時 け 歓 て そ れ そ 単 5 のるは喜置れれる不不のかは る。 な

と云 喜 お 於 る 我 \mathcal{O} は ŧ 5 だ ŧ, 限 於 と 굿 は 自 11 11 々 裡 不 \mathcal{O} 々 を は、 な は 滅 我 7 7 \mathcal{O} う真理 実と 生死 は は 7 死 つ事ミ・ さる これ 有 て死に疑 の事実が の矛盾を調 我 の歓喜の形とし の二元 無限 限 のを実現す であ 事裡に とを有 々 で あ い疑 り 9 \mathcal{O} を抱 る 在 そ す で は 5 中 和 る。 霊 る。 ある る 生命 るこ ね に 調 せん ば *102 で あ 神 \mathcal{O} かぬ 7 ならぬ 途 上 生命 和 と \mathcal{O} 一元 \mathcal{O} 表 は 根現にして、 我 自 む でるの我もか歓々 たは、 的 々 我 る

> ず自我 こで、 と看倣 を 密 が 太に令 令 我 する と思 同時 々 湯のシ でなく、真にでなく、 で 5 願 な本 に 絶 である。 ょ 9 性 何 死 え 願望を意識的 1 除 プ ざる を快諾するを拒 か ているのである。 行われる 11 の奥底に持 法ではな の光を消 固定的 永久の生命は と云 ر 生きん のこと な無 7 2 不 に実 ついて。 すこ 断 7 変化を与 ょ は \mathcal{O} 換言す 命令は と 朝 12 絶なれ て自 み、 ろし 行 である。 死 11 したとれ 動 る最 動 後 で 対 す \mathcal{O} る 光 する を感 我を 自 す \mathcal{O} \sim Ź ŧ ŧ \mathcal{O} と 我 我 \mathcal{O} \sim 断 V) そ 脱んの我の 命の ののぜ

性 7 望を有ってお 我 々 は自己 々は努力する。 と安楽 では の存在 b, 我 本 لح と 望 それ 位 を 望 が Þ \mathcal{O} あ 中 で 切 む が 我 ある。 望 る を 調 0 常 に を寄せる 々 する。 我 に \mathcal{O} 我 意 和 々 組 此 は 々 識 質

々相反 \mathcal{O} 願 望は 胃が許すも \mathcal{D}

方に行 命 心 る 衡 善 命を過去と未来とで繋ぎ、且つ \mathcal{O} を寄 を恢 々 は \mathcal{O} に新 た 健康 部分間の統一を維持する。 \mathcal{O} であ で ある。 せな 刻下 って 復せしめ 組 \mathcal{O} 1 の肉体的 願望である。 る。 、調節を ※望を持 で、 乍ら仕事をし 現在を超えた彼いのでは、不良微候の間をなし、且つ均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の均のでは、日の、不良微候の 意 それは我 と 9 7 且つ生 は 改

体 賢 的願望をこれと調和せしむ 明なる人はこれを知り、 他の る。 肉

別 7 々 対 あ 体 なくして、**なくして、**なくして、**なは他の誰よりも払うこれないる。我は自らの快楽と放窓とを欲する。我は自らの快楽と放窓とを欲する。我は自らの快楽と放窓とをおする。我はない。 を持 き起こされる。 のことから奪 我 ?は生べつ の存在の® 々は社会体なる一層大なる肉 つ。社会は有機的組織体 い合い し社会の 奥底 · と 争 に働くいとが で

る そ それは の味方であ る。 目下 福祉 そ に対 の利 己的 は す 無 る なも ŧ 限 \mathcal{O} \mathcal{O} なので 8

明なる人は、 自己 満足を求

> 願望は る ことである。 しそ る自己増大に導 持とうと企 自 て凡 そ \mathcal{O} 5 自 自 無限なる相に 己 とす 社会善を 我を完全に導き て 他 な 13 人よ を意 る る 尚 無慈 相 かざる調和 り 識 自 か 悲 於 以 我 7 である。 実 て自我 \mathcal{O} 7 る。 優越を 、現する。 4 をえる 単 Ź 自 望 \mathcal{O} 然 そ

 \mathcal{E} 立は 意思 到 この 最後 自我 Þ と云う光に 即ち正覚の り、それ して を得ることであ たる。 達 愛な 的 て 我 の中に示し \mathcal{O} 我 利己心 一と反 な霊 いる自 さ 々 到 々 \mathcal{O} \mathcal{O} の願望は善をえることであ の自我 ŧ 即ち利己が \mathcal{O} 願望は愛を得ることであ これ菩提 のは は 到 ょ とを通 我 到達である。 闇に の絶滅 質的 強 極 我の自己本位を経て我の移り行きは、 … 達 って 仏仏 制 て呉れることである。 自 ば 長 そ 到 り、 性 に に らず、明るみに (ボ が愛の 陀 ょ 至 無限の歓喜を我 質 由 な 9 \mathcal{O} 心 る が絶滅 を達 過程 の絶滅 社会的 て、 様 9 \mathcal{O} 消 な 7 \mathcal{O} ドヒイ) 明るみに する それは愛 極 は決 である 本 分であ であ とな 存 孤 立 7 々 L る。 調 す

自我ら々 ことは 出所 在 て て 我一ら止あ 々 そ と愛とは無限 を実行せんがためで 一致は本来目的であり得めらない。これ悪は無限でな止め、不一致の経歴を止めあるからだ。我々は自己の であ 我意思は らだ。 で幻覚 始 \mathcal{O} لح ら自 け 自 何 れ 意味を失うから めて からだ。消極的側 向に の真の道は善と愛との意思が自由なるは 時迄もそ \mathcal{O} は 的 出来な に向 さうす 何たる 本当 らを 向 る ることを発見 か 自 それ 由 側 の道から強 或程度ま かを知り であ 面 NO これ 完全に実 に於 方向 善と愛とに か 7 すことは り、 眞 であ 自 7 0 で 々 あ Ļ ŋ で 自 1 に 我 で は の意 進み続い る。 得るが る 意思 自 自由をも 由 1 て外れる ける然 々 自 5

> らだ。 足 をすることは べきだとは云 る 自 1 に 得 無 由 を な 限 ほ NO 0 自 ろ ぼ 由 を

果なる事を実証する 有限である。言葉が単 のである。言葉が単 をれが思想であり、 それが思想であり、 とれが思想であり、 普我絶遍は対 云 時、 自 姿である。 である。 外観に過ぎず、 我 企ては不幸を招 から切り離そうと試 的マの即 外観と真実**との二元 ち我 ラ ŧ -ヤーであり、そのと看破す時、 我々 々マ 由 の様 前 々 我々がこの - であり、その精神の看破す時、我々の自我がその分離 の自 ヤムであ 自 することに り吾 愛が自由 在 7 無限なも 我 *110 で が単に音であり、との二元を持つ(マーヤー) 真姿 マーヤー 1我意識 る自 き、 ア ン 12 は 無 で \mathcal{O} K 結局 みる 外観 る。 中 あ ラ 限である時 あ我 は る る。個人の口を借 は に浸 の 本 る を る ハ 意 なる。 也 我 であ は 時 を眞 自 と同 思 々 無 2 個 る 効 \mathcal{O} そ \mathcal{O}

イ)はその時である。即ち摩耶イ)はその時である。即ち摩耶(マーヤー)、換言すれば無明側の奴隷たることから個我が救われるのである。その時に、真実の中に於ける完全な活動[™]、夢の中に於ける完全な融合に於いて個我が救わる完全な融合に於いて個我が解放される。

又 単 12 が将 ぬ動 引 かか き な力の終わる る

のの棋 客 歓 法 喜則 Rの制しているである。 さが存するからである。 が る。これその法則は、これを離れる。此等の した よの 9 の外 7 自 客 身 7

法則の制限によって自然が神から分離される如く、その様に自我 を神から分離される如く、その様に自我 自らの意思に喜んで制限を加える。 そして我々自身の小さい世界に対 する支配を我々に委した。これは、 目身の財産の一部のままである。 がらである。尤もその小遣いを子に がある父の意志は他の自由なるが、 を結合して始めて歓喜を持ち得る に奴隷から意志を押潰し出すもの に奴隷から意志を押潰し出すもの に奴隷から意志を押潰し出すもの にの私利心は他人の最小の自由も この私利心は他人の最小の自由も るが、暴君自身の必要の意識である。 な場 君は奴隷を自己の目的のため は、暴君自身の必要の意識である。 は、暴君自身の必要の意識である。 さればなら は、暴君自身の必要の意識である。 ないまたねばなら は、暴君自身の必要の意識である。 ないまたねばなら は、暴君自身の必要の意識である。 ないまたればなら は、暴君自身の必要の意識である。 ないまたればなら は、暴君自身の必要の意識である。 ない。これ自 ためることは出来ない。これ自 をが自由ならざる故である。 暴君

を れ終のせ却棄 る限な。のの す々 < はこ歴 \mathcal{O} よをの 調 は と死れるた の自とのに我は儘 始 個 \mathcal{O} 自 神 自 持 愛 7 ば ね り 調 何故ならば、更新を経ねば 普 を であ ŧ な 的 ば 自 我 再 か由 た で 和 がながれる とないない かとなら から から かた 邪が出 遍 生 では自 5 な 実 で 調和を確った。 魔無限な る。これが 形を与え 5 現 を ぬ的 自 で *¹¹⁵を 常 り る よっな えが ない U から な なるも つける 実際 り抜 のい我 てそ。それを ばな だ。 に かは ら永 源 自 め た 我 た \$ 遠 恢 自そ 有へら永 自 <u>\</u> \mathcal{O} そ で久 我ら々の 復我の再のの限度 しそ と自 \mathcal{L} す 7 のて 毎 に 神

しなければならぬ。

大に 古きことを知 地を腕 古 で蔽 々 見 した極く古い日 1 訪 \mathcal{O} であ \mathcal{O} \mathcal{O} る。そ 遊戯 って < 花 を。 を我 1 \mathcal{O} る。 古き \mathcal{O} \mathcal{O} 様 は は 日々 12 はは 新 新 朝 到 送 き生非そ 鮮 のる 毎 り外の常のに

はし新も ぎ宇宙 てでなれ初れ 朝 宇不消れ護 な で符を持って がれば、全て え失せる。 があま があまれば、全て 毎 我 いし 82 行 工 音楽 □ たり □ は、光 で □ はまいる。その間の巡礼 □ 持っている。その間の巡礼 一 は老いることなき永久 一 持っている。その眼は 一 全ての皺は万物 一 る。世界の、 □ がある。 日 に 鮮 残 進 々 さな 繰 換 \mathcal{O} で若 言 $\sim \mathcal{O}$ り地 限帰最返球 々 間 る 足 初 \mathcal{O} \mathcal{O} の再こいそれ それ ば 直のの再 的 7 び 姿を にのの形を 繰 込 で 万物のない。 す 古 で眞 若 あュ '日 り \mathcal{O} る。古い出め ウ 句 行進 る 返 0 な 日 な 涯 そいてる 跡げ微核 が で 若(再 な 9 生 底 あ リれ日いもを てと心かに久霞 る き知 はは 過 ま 日フ の少 0

絶え間なき痛みを拡げるであろう。絶え間なき痛みを拡げるであるう。

広大なものなりとのおなじ伝言を再 とであり、 でた花の為 汚点なく て再生する。 然し、 永遠の生命は着物に一点 おなじ保証で再 額に 夜の〇幕は 老齢 \mathcal{O} 海 *118 は ! は の皺な び新たに 測 引き寄せら り知 じに の埃 出 れ ぬこ ての

こ声ではない** る古い る。 ま < ことを知る す神は今日も同じである。と云らゆる物に存する以前より在 宇宙 はない*―万物の朦朧たる初空から空へ反響する単なる 声 から刻々に新たに出 宇宙は家なき放浪者の これを最 山声ではな 創造 ら吐き から出て来る の歌 後 ださ て残され として歌 ての

つつあることが、丁度思想が詩にそして神が刻々に宇宙を創造し

於けるが如くその様に最後に於いて酷似物を持たない。最しかもその個体の一々は創造 る迄、 そこか 古く では てし 証 明 いして、常に新しはない。して見ない。して見ない。して見ない。 なき行列も其処に由 し得ぬことの 由 「来する。 しい き変異 れば世 到 済 して終わるも 来 む所 する 0 来 個体 人智 と云う驚 する。 は 最 造物 初 の果 では が

る凡ての迷想を自我は押し破その外皮の中に自我をかこっ ねばならぬ。自我に死を背負わされねばならぬと云うことを知 出なければならな 自我を老齢に見えしむるた 自我はその生命の毎 VI 0 瞬 時 8 に に、 7 再 9 せ てい

命に伴うて来るものであるが。生命はその運動を妨げんと試みる生命はその運動を妨げんと試みるのではな際には生命に属しているのではない。生命はその運動を妨げんと試みるとがある。

でなくて、海に向かってそれが涯込められていることを見出すため打つ。これは単に生命が岸に閉じ我々の生命は河の様にその岸を

た は \mathcal{O} らされ \Diamond 佳 律 で 調 \mathcal{O} 如 ある。 きも \mathcal{O} る 釜 的 \mathcal{O} 自 覚 え 則 る。 な る る \mathcal{O} と云 ょ 律 現を与え \mathcal{O} \Diamond うこ 0 を打 であ そ を 7 詩 \mathcal{O} 打 9 ろ 詩が \mathcal{O}

に向かす 尚 を 力 時 大 は ŧ 盾 る 等 に 全体 る。 失た投 王 止ま は であ 時 於 で は 人 \mathcal{O} 7 我 自 類 が ŧ 8 12 部 何 に 限 々 限 個 11 る。 を招 始 界を無 分に激 げ込ま 5 9 力 時 分 の歴史に て 個 7 せ、 8) でも、 個 \mathcal{O} て導 分走路 部 < 7 方 性 絶 そ を自 流 分が れ 対 我 不 \mathcal{O} \mathcal{O} 幸を 優る え 於ける大革 であ る 8 全体 限 正 L 々 な uを走らん. ٥ ず 急捻を与え 7 な を は 5 己 7 全体を足 る。 そし 途方も 粉 ょ 渾 場 堰 流 \mathcal{O} لح 招 7 \mathcal{O} \mathcal{O} 偉 ウ 所 は 旗 時 止 \Diamond 壁 れ 々 大 12 ر て で \mathcal{O} 7 我 Þ な牽引 不幸 いなら とす 蹴 命 翻 \mathcal{O} لح 自 試 る にの る に原みに矛 力 な 世 閉 分 穾

はド

さを達 なも ならな 中に と欲 死滅 所詮 若 深 に会う 我 するなら、 下 々 \mathcal{O} が り は 1 普 の偉大 な か -*₁₂₇ら 遍的 切

のは唯永我をみ唯一久々放 誇 の許 ら てっ け て偉 く 垂 愛と 自 遊戯 放棄 り で てれ 7 我 $\sum_{}$ へ帰ることが出来なければ は あ 棄 獲得 大 従 棄 ば \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} ならな 中 ろう。 は子供 順 目 ŧ 意 若 に 7 合を ŧ しなけ るも ょ \mathcal{O} 的 と Þ 子供 が な 2 会う所 宿 て 心 あ 求 我 そ に け ば \mathcal{O} 0 ŧ, 取 ればな 持 る。 向 且 7 々 が めることは ちでそ 遊 上 自 る無 幸 て我 無 が 9 ば 9 知 我々の個性って恐ろしい 愛 戱 我 我 限 \mathcal{O} L に 5 種 な 5 は 居
 A
 \mathcal{O} L 5 々 け 者 中にそれ Ď 損失に を Ď \mathcal{O} 新 であ て 母 る \mathcal{O} \mathcal{O} 自 自 お れ 128 ごろう。 を 親ば 示 そ 我 \Diamond そ 我 \mathcal{O} そ L ょ \mathcal{O} のな

我々は決して此の問題を避けて行くことは出来ない。これ我々は決してこの問題の外に立ち、何等かとその軽重を比較衡量することは出来ぬからである。然しこの問題は理屈の上で存在しているだけである。実際に於いては、この問題は全く我々に何等かのある。然しこの問題は全く我々に何等かの困難をもに分かち得るからである。然しこの問題に過ぎぬと云う。実在せず、それは幻覚(マーヤー)の或る者は、有限なんてものは存をはず、それは幻覚(マーヤー)に過ぎぬと云う。実在せるものは存のする者は、有限なんてものは存のする者は、有限なんてものは存のする者は、有限なんてものは存のする者は、有限なんてものは存のする。それは幻覚(マーヤー)に過ぎぬと云う。実在せるものは存のする。 摩にの ぬ観 なき矛 亦原 す 因 [となる。 何一 の盾 する ぎ も有 つの久のの はぬの限 。は な 何々けて根に はな然幻 等はてい底

> な 我 い。 存 在 どう とを 対 0 真てる 様 にのる観 な外のが る観み存 と共 と です か はがあ る と云うこ 了全る。 真実 出同然 来時

のものも〇単なる名称 何等説明ではない。此 る力の調和せるものなる力の調和せるもの方法に をの力は創造者の方法たるに過 しているのである。 しているのである。 しているのである。 しているのである。 しているのである。 と寒、光と闇、運動と と寒、光と闇、運動と のものも を引と反 を は陽極 ち でド 創造に対 ド 於 とをは バ語 け 124 と 云 わ 4 (サ る 持 つ求 組 方し手過な組此等 れス 称 て心の にい力 反 る ク 対物、、リット る。遠 か作左なをのは過 例 即

たに ぬ反打 ろう。 ぎ の破 とうと これ此ばることは、運動し たらさず であ 5 然を し想努め ばる。 ず等のと間て間しし反出休のピにて して我若 息 はない々して対 来 如ア存働 勝けるは宇調物なとく、ク在手机ニお宙和がいの。 カン せ にばつ互がを宇継間熱低るる

ば のば美 波 点 高 を な いることなき競なおらない。後にならない。各々の力にない。 迄 さに で な しが 描いの な 破 ある。 らぬ海 道 全 で 出 9 て関 あ 登 各 来 を 7 る。 って 々る 無 のを 係 りの如 限れ 偉な か 行 何 12 廻 < 争はいは なる 進 大 7 り う 4 居 て の外の な で \mathcal{O} にが状観状反力 帰 支 る り 続 或 ぞも 態 態 平 2 上 対 け る てで 心にに 7 唯 7 て 切 復 見いそ < さ 出 曲 るね変は るのらね線 さ

源の動動い制昇 は なき、 なはでは的る 降 実は際 5 は出なの 渾 ない 根本は 踊で な鱈 ŋ であ 目 は 11 放 のな 逸 的 な 藻 のいな に此 9 律 で 。 る 異 な あ 此 捩 の 掻 て動 き \mathcal{O} 反基かる 等 れ れ波 対 礎 5 る \mathcal{O} 生 戦 でと も原 あな ず いの因 る つる のはしの振 て根も律律て統動

こにる終々々の 渾 よ根わ は であ \mathcal{O} と云う り そ 頭 つ源 て の に の 段 段 る。 二根元源 決 問 本に々 関係が唯 を起 に関が あ 我於 のは ないて見います。 ここす そ 存 全 < _ 。ベの 者 在 < き 時真は出つ は 12 不 一しの求そ 矛に理 直 思 に で あ 独 5 議 \otimes そ立る 7 つは達るれせ 我

> 且 と 굸 実 は う 実 ベ凡不 き矛 ゆ 可の ゆ 分反る る 対 矛 離 盾 に盾 的 で あ に \mathcal{O} 関 る い中 てで 係が 述 朌 7 \Diamond

のな詩物此組偉我々えそ始はこのるれの難 継らな と処かが如な続他い 々のるのめそ の大 の全の法無存み則 中 な もよのか 離 下 いである。とれてのである。という。 我如々に る詩 貫 よが 限者 在 \$ 則 12 れ 之を 意識 訴る々い我そ暫か求々 \mathcal{O} \mathcal{O} マのにそうでないかなのにそうでないかなり おってしまった。 なののにそうでないかなり なののにそうでないかない。 なのにそうでないかない。 なのにそうでないかない。 なのにそうでないかる。 なのにそうでないかる。 なのにそうでないかる。 を 音 出 進 \sim 0 恰 こと そ 努し力 繋 分析 と云う た t 末 す をな لح 化 存 不 そうり 説が 弱い 思 在 から 議 力 に < 内 す 万の 5 す す 物 な が 恰なるの種 ぎ ば る しれ 階 ては め 程の \mathcal{O} 則あそか困のか 我 与 う 々

由を求. 詩 これ語法は文学でなく、散文はいては、我々は目的を達しない 玉 葉 る \Diamond لح から う点に 語 た 国語 12 ではないからである。 頭 間 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 法 は M気紛れであるそのEのである。然し、若L を学ぶ時、 構成 \Diamond 語法に達すれば 則 専 因 乍 \mathcal{O} 事実 み止ま , , \mathcal{O} 不思議 制 或る り、 制 我 屈 る ŋ を達しない*!30のみ捉はれて 国語 々 を か して終う。 での隠れた理若し我々がは非常に利益 そして或る 5 が 散文法は 免 単なる言 の諸法と れるた

て 縛いら を事 法 精 詩 え は 法 あ 歓 縛られているが、それらを超越し法並びに韻文法の八釜しい規則にあることを知る。詩の美しさは文歓喜の物であり、自由そのもので 9 向 神 詩 法 の我 る。 け あ則 は 由 規則に従ってはいるが矢張々が文学を見る時、それは か の翼である.それ へ運ん ては 則 制 う 美 は 文法、 \mathcal{O} 置 則 で行く。 かな \mathcal{O} である。 中 韻 在 る。 **\ 文法と云うも に在るが <u>\frac{\frac{1}{1}}{1}</u> 0 在 調 は らは詩を押さ Eるが、詩の換言すれば、 るも 和 法則 。そして美 それらは詩 は自由 のとを、 ので り文 \mathcal{O}

> えは如 私を 真 あ は 車場 るこ 理 な である 画像を提供する ることを知れ プラットホ むる。 して人間 に達した とは 何 \mathcal{O} い。全世界は歓喜 あっては、自然は全然異技々の心にあっては、即は唯一の外観を持てるのむる。活動の外界に於いいに不思議なものなのか 如きも 智力が 出 \mathcal{O} 来な 本当に成れ し我々 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} る者 である。 を探究 心と自然と である。 ムは我々 のである。 にとろう。このである。 それ はそこに止ま 測 のみが究極 する \bigcirc し遂げたも \mathcal{L} の家庭 創 かを考 異 即 OV. \mathcal{O} 造物 そ なれ内 み。 ては 事 度停 \sum はの で で

儀な ざれ とも が す る れは どんなに繊細に美しく見えよう一例を植物の花にとろう。それ ぐされ る で は実を結 全てその仕事に適 偉大なる奉仕をなす様に余 ろう。 到 植 ろう。 来す 7 いる。 ば 的 \mathcal{O} 生命 大 ね ŋ り 受精 た 花 地 ば 落 8 な そし 否 は \mathcal{O} \mathcal{O} らぬ。な や花し に 色香 継続 Þ てその色、 あ が る は は は \emptyset 7 5 砂絶漢た る。 それ 酷 そ 然ら \mathcal{O}

急ぎで ず ッテ ざせ で は 洒 部 自然と云う大きな役 直 そ \mathcal{O} 攪 \mathcal{O} 新に < . [落者 進行して ちに、 なく する け 事 < がある。そこで見る美 \mathcal{O} 弁解 乱又は妨害が起きるとも ね 鎖 \emptyset ええる 、労働 て楽 ば \mathcal{O} 運動を妨げられ に 花 於 ルを貼られる。 は ならぬ が決 死 に、 は実に 絶ゆることな ハ の 様 も受け付 لح 者 捨てられ いう 寧ろ る ツキ 7 自 12 唯 \mathcal{O} 1 い目を見 リした 派手 る仕 如きも て人 消え け な た に は 目 面 る に 事 ま 発 そし るも 装 達 白 計 日 に の所け た不幸な物 < 種 於 因 \mathcal{O} 1 働 ŧ 見 わ な 算 で あ れ 続 す 12 き 休 お に 11 必 て必ず え ば る L る は て蕾 る 憩 か \mathcal{O} カ 1 多く との の提出の る < 時 7 何く。 絶 間 日 ま 匂 大 ま 7 は V

が 間 \mathcal{O} 心 入 ならぬ。 る い活はなのく。動又花如 え は、

そ し と 7 なき活 全な 実用 象徴 性 表 が 我 動 現 Þ \mathcal{O} に物 と 内の 外 な 具 警 部 な 観 体 告 る ので は である。 化 消 す 物で 外部 え、

> 想的 と芳 0 対 た t の も 香 \mathcal{O} であ であると。 て 関 Ó 係は 1 て る と考え 我 7 7 我 根 Þ 々 が る 拠 自 花 な 7 き 5 が 的 11 が る 我 造 美 K B

人間の心の中にあるのでは花は奴隷のでは花は奴隷を持って来るの あろうか。花がEじ、次の資格証品 実は 書を持 どう ŧ 保存 域 違 実*である。 9 ることなき鎖 \mathcal{O} うことである。 力を持 に て来たことは \mathcal{O} 0 のを持っていると#Fと云う必要な仕事 それは 於 とし の心の中にあっては自ては花は奴隷としてや 7 我 って て 、ては、 は生まれ 々 てや 外延 の心は我 々は最 や中っに 明書となる。 \ \ る。 と答える。 \mathcal{O} が . 延 の 花は種 明 のだ。 歓喜 確 中 因 7 全 る [果関係 一く異な 来る。 然 と推 世界 書を疑う かに 初 \mathcal{O} そ 事をな の 証 し 花 に 々 か 界 である」 美は花 真 薦 ら真に \mathcal{O} は 自由なる 自 実 った。 す 自 明 然 が 少 た紹介 た紹介 書を信 在を絶 べきで け で らば 我 す を保 る真 あ す る 々 証 る

自 つ人 それ故 間 処分をは 2 て ていそ 持 果 る \mathcal{O} ってすの 唯 いべ での き今一 なく 職 分を

宮殿 誘 直 口 かマ 眞なるを確信した。 使者に逢った。 とにな 悪な な精 \mathcal{O} ちに安堵 れていず、 タ 使者を寄越したのだと知り、になっている最愛の人が実際 ドラ*自身の指輪を持ち来れ で自分の不幸な運命を嘆 ・は使者 る繁栄と云う の王ラーバナュの黄金作 制的に仲を割 人から来る花 7*にシーター級如くやって かる使者は 彼女の最愛の人ラー ばならぬ の花嫁と主 しごとは一定 間もなく自分を救う のもたらせる便 その指輪を見 玉 عَ 市 って来る。 張 かれて、 ら島流 に譬え 傲 彼女は自分を \mathcal{O} - 133が彼女の-する 自然 囲ま 慢 々を愛す な精 5 限 ラ て マチ VID セ

9 生きて 参りまし セの 言をも あ 耳 々を傲 れる 7 神 閑

> とされ うであ ぬで 迷 忘れ 所 しよう。 は汝を永久に束縛 て居られ るでしょう。 引き寄せ、 りましょう。 な ま 汝を自 喜 物 今 質 分 汝 の身内 汝を救 対 を自 は す 汝 分

夫

ての

輪を持 う。 う。「ご覧なさい。神か の魅力の何と愛らしいことでし ことを知り得るか。」と。 て汝がまことに神から来たと云 ر چ د 使者に尋ねる。 我々が偶 っています。 々目が醒 「我々 その色合、 らのこの指 使者は は \emptyset どう 7 11 う 云

てのも ものであ の快き永遠 ゝ、まが のは 深 指 忘却 る黄 無 \mathcal{O} ** \ まこと、 ŧ 愛 憧 であ 1 こと、 在 金 な \mathcal{O} る 接触 る で満 くてこれ 宮 それ 一殿が たす。 Ź の象徴 即 を知 ち我 我 は 我 \mathcal{O}

* * 134 133 * 82

は であ 自 蜜蜂 ŋ 香り \sim \mathcal{O} 1 正 で 7 道 あ 蜜 を示 るに過ぎ 蜂 す لح 印 ŋ 単 め Þ

室を人間 目的 部 11 間 は に こでは自然の工場 ŧ れ 音楽とききなされ と云うことを語 変え 手紙 わ 外 で それ のは ざる \mathcal{O} ば 心中ではその の自然界で重た ₽ 如 られ、 故に、多彩 な 美の歓喜 竪琴の黄 何 の心中に に 自然 自由 2 金 り くとも 純 る。 らす 持 活 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 2 粋 < 作 絵 出 動 9 9 は 業 あ の な 朝 喜 的 書 る 響 因 要 7 \mathcal{O} いるのだれりする私 った。 自然 < 果 場 全く何 であろう。 が、人が、が鉄鎖は びが は に そ \mathcal{O} X

を、 は 自 と云うことは つ 自由状態 かも非常に 然が全く同時にこの二 であ 要 静 同 即ち一は 反対 それ 0 で辛苦を持ち 不思議 奴隷状 正反対な二 であ 部 子 の も り、 り では が 色 な様 を持 態 聞 自然 こえ 平 内 味 \mathcal{O} 2 部 は に に ŧ 0 9 思わ は忙 歓 る。 お \mathcal{O} 7 方面 方面 面 喜 1 自 れ る \mathcal{O} 7

> 見る なき美である。 部 て で そ は は 自然 自 \mathcal{O} 奴隷 を \mathcal{O} 状 態を見 は 限 1)

喜の中に入り行く。*」と。され、歓喜に向かい進み行き、歓喜から」生まれ、歓喜により維持事から」生まれ、歓喜により維持事の予言者は云う。「万物は歓

めを果たす。 て神を怖れて風、 える。神を怖れて陽は輝く。 めている。 予言者は頑固な自 に耽ることによっ て (即ち) 神 ら生まれたと云う 喜についての考察が抽象的 予言者は 又予言者のこの無 そして云う、「神を怖 法を無視すると云 の法により 雲、 然 わけ て生じた の法を十 でもな 死はそ) 火は な考え 酩 限 そし 分認 う \mathcal{O} 酊 \mathcal{O} 11 れ カン

る。 せんと構えている鉄 と。それはかす些か り維持され、歓喜に向 「万物は歓喜から生まれ、 歓喜の中に入り行く。 然し詩人は悦ば しき歌 則 の違 か \mathcal{O} 歓喜に 反 ے 140 کے い進み 支配であ を歌う。 をも 行

様に思われる。

ならな とがこの充満 ある形をとって自らを実現 神の歓喜の充実からであ 「不滅の存在は歓喜の形 」*創造物に於ける神 ない。歓喜を形に現形なき歓喜は形を創 せる歓喜 \mathcal{O} る。 本 造 の顕現 で顕現 するこ であ 法 は で

せる歓喜から出て来る。 し続ける。そして形は人間の充満割に於いて人間は絶えず形を創造形で表現される。創造者と云う役に表現される。詩人の歓喜は詩のならない。歌い手の歓喜は歌の形

し続ける。そして形は人間の充満 せる歓喜から出て来る。 その別名は愛なるこの歓喜は自 らを実現するために、その性質上、 らを実現するために、その性質上、 こ元性を持たねばならない。歌い手が霊感を感じる時には、二つに分かれる。歌い手は己が歌に聴き手としての分身を表出さない。愛する人はその愛人の中に自分の分身を求める。そして外の中に自分の分身を求める。そして外がれる。歌い手は己が歌に聴き手を経て結合を実現するために、この分離を創造するのは歓喜である。 我々は決して虚偽から真実に到らないであろう。その場合には凡ての反対者反対者反対者反対者のままでいる。 その不和が永久に反対者反対者のままでいる。 その不和が永久に会う様になり得るがを見出さないであろう。

物の個性は常に変化してお互いに逢って、お互いに逢って、お互い物質はその限界を失いの生命の定義は一層不分別を命の定義は一層不分別と 動状態に対之に反して 、心と心との かを失いつつないなりのつない。お互いの内に変化しつつないの内に変化しつつない。 て、 在ることを Þ 融合も 我い 何 々 であ つつひのああに中 は ある。学個 ろ 物 ら。 生に りつ \mathcal{O}

きうだ、我々の個々の霊は至上 の霊から分かたれた。然しこのこ とは疎隔のためでなくて、愛の充 とは疎隔のためでなくて、愛の充 とは疎隔のためでなくて、愛の充 を転じて新しい力と美とに成し 等を転じて新しい力と美とに成し 等を転じて新しい力と美とに成し 得る。

は完全になる。無限の歓から歌い手と聴き手との喜に還元しなければなら 顕現する。 束縛を自 える、己 歌 い手は己が歌な 結 帰 我 形 戻 L を びる々てあ時は様 に 歌 らぬ。 歓 \mathcal{O} 変える」 うことに 喜 間 形 々 人我し有かのは交通の での無な歓での通れ \mathcal{O}

を通じ プラッジででである。仏陀はそれを婆ュッことてある。仏陀はそれを婆 フマ) が 他 懐くべからず、そして怒りの余りべからず、誰に対しても憎しみを仏陀の言葉を借りれば「誰をも欺く \mathcal{L} 法 きることの歓喜と名付けている。 之即ち婆羅吸摩(ブラフマ) 獲得する。 9 得な 界も \mathcal{O} 5 敵 知れ 命を懸けて守る一 を傷けんと願うべからず。 て我 練 \mathcal{O} 7 のと全く同じに、 対 階程に達せんと欲する人は、 わ 束 を *に、 ス々は法 にも、 縛は ねばならない ることである。 て現れる無限 自 0 愛を持たね 己 実行 其れは婆羅吸摩(ブラ 法に通暁 即ち法と云ふ有限の形 それだけで目的であ なき愛を及ぼ 周囲にも、 の彼方に出る方法を と道 面 立ち、 人は することによ 法を完全に 万 人子に対 の愛に帰ると 凡ての な に対し その さね 。 し 上 測 に生 母親 し持

> て来る白光の清い意識であるは意識の絶頂、即ち愛に到達れでこの我々の裡なる霊にかのみならず、外なる空にもあのみならず、外なる空にもあるがでいる。 れは人間のだ。愛は単 息し、 ある。 即ち愛で満たされずば ければならない。 喜である。 高めて愛となし、それを 通を達し得るには、 摩精舎*即ちこの無限 うこと を ではない、 ではない、 ではない、 ではない、 で 愛は単なる感傷 に及ぼすことに それ (T) 動き得ん。 それは婆羅吸究 中にあ 究極 の意 「若し 分からぬ る \mathcal{O} 5 我 我 では 本 周 £ 味 の歓喜との で 空が歓喜 当 井 が 々の意識 々が婆羅 である。 9 に於ける 摩 [に在る凡 な 誰 9 せる存 達しな から出 かよ ある ある t るか \mathcal{O} 我 る \mathcal{O} る そ 歓 Z _ そ

若しそれ 自らを与え 愛は 自 る ŗ 的 0 7 然 我 L 限 け 此 れ々 \mathcal{O} ばが 等 賜 与 \mathcal{O} え 賜 \mathcal{O} の完者 物 形 Ŕ

れ別 لح 我 \mathcal{O} な効触るなるの用有し そ 愛る用する 願い。 もは用公 \mathcal{O} な々 \mathcal{O} そ 全 れ 存 0 用 る 12 望 効 の一性用 有 S で が が 形 は 我 で 我 .. 尚も کے そ 印 で 時 12 は で あ あ ŧ 9 的応 て 我 る 固 つで りの あ 永々 執 欲所 々 7 ガるらん が之する 望 ほ久が \mathcal{O} 部 \mathcal{O} 評 が於 全 分 で り 7 \mathcal{O} に反な 的 満 存 あ 評 的いの 価 NO す 物 らたては さ我我 を唯 値 愛 在 る 愛 L \mathcal{O} り 価 では、 はない。 はな。 はない。 はな。 はない。 はない。 はない。 はない。 はない。 はない。 はない。 はない。 は、 は、 は、 は す \mathcal{O} を

を受 は自 は狂ん 大 は 自気が 事 け 然のた 12 と 得る する 問題は の如め 不死の を 倉かり くに 汲宇宙 か」と云うこと 簒奪 Po は いら身を養い 激 な賜 との 我 で しカ々 物 き競 値 λ 有 お 5 を を有 小く 権 は な な い利一 方 層力 る用 す $\sum_{}$ 衣 あ \mathcal{O} せ て 服 し、 我と 得 そ と宇 れ を にな宙

きちぎり、 我を得 を持 れはを 単が他 る れ恐し尚故国 度のて願食本死望 て市時な食のがにらくなかでい場々る人種たもくな価なは と云 で には文明は決してなれば、そこでなっているからなっているからなると、 ために遠くへにも劣らず恐ろしために遠くへにも劣らず恐ろしても劣らず恐ろしても劣らず恐ろしても劣らず恐ろして あ る つ彼 い場 な価なは人 当ぬに るで、掛体 う 国 国類めに は 欲た人 る 迄 ょ \mathcal{O} <u>ڪ</u> ک ŧ 望め が 食 子 我 値 9 けと を 械 り も 高 利 自 そ唯 人飲がの々 て と 貴重書 は世界 食物行 かし る。 看做 安 引 貪 用 分 々 々 5 肉 き す \mathcal{O} さ 7 0 る た れ唯時のそ さいあ行 7 لح そ な人な L でら ま で わ ぽ こと人える。こと幾 しれ国 安楽 。 か に る。 る。 くを 自 げ 代 くはで 逃に 我 < _ 々 に な あ とす る 償 7 7 が を 己 \mathcal{O} 寄 々 サの いるに、そいが、 ° V 有用売 頁 そい於文 要そいが す 価 のるい明 してに かるる カン ک 劣 眞 値 。か国がをと 、然いの · を 得 買人人てのなを で買人人ある間間 な間 度い見そしや高何る 如引 で

六五頁

 \mathcal{O}

人

間

を

利

用

せ

方法 る に 治 富 作 そ 迄 ょ \Diamond \mathcal{O} ŋ \mathcal{O} 意 やを生ぜしむる。 訓 識 0 は 斬 他 刑 あ 7 国 \mathcal{O} ば文 的 を搾 永 自 5 明 方 家 \mathcal{O} 法 取す に 手 体 で 害 段 な 娼 とを る 家 す 牢 醜 Ź 組 7 程 織 奪 制 復 腫 5 度 さ 度 ぎ れ 12 や自 れ 心 な 物 的 到 に を

き機 懐 そ てにかに 側 不 場 てそ は \mathcal{O} な 完 12 価 間 肉 器 ŧ \mathcal{O} 0 勿 値を変真 全 体 得 間 間 神 $\overset{\textstyle \succ}{\smile}$ 我於 がら く さ に っ る こ てこ 官である 械 論 て 々 \mathcal{O} であ لح لح る \mathcal{O} であ 7 々 の精神は みなら 実にに知 が か る。 5 ŋ, とが 間 支払 何 カン 0 邑 期待 カュ る Þ は たる ず、 定義 らだ 間 不当 った 頭 こ れ 人間 酷 唯 り得 を な 来 族 ら 得る 0 12 す 間 る 自 る な な 驚 性 لح 知 Þ 精 人に を 上多く 優越 を 知 る 取 た 時 る る 間 لح 11 神 < 秦 仕 我 べき能 愛によ 知 に 時 小が であ 貧 る \mathcal{O} り は 2 識 のた 鷩 我 12 7 いを人をた々、以間他めの 情 々はの々 す対々々々 市がっ な 間 率

行そにい棲いしたわくばなたのつい。り 生そに行 拡れ口 直 んの だば が る 舌 影 の躍 5 7 せ \mathcal{O} で で を我 色 た り 出 か ば 12 に 歓 消 時 爬 幾 ゆ ガ 9 ŋ え ンジ 鳥 できら せ 喜 た 虫 太 哩も 尽かい は か 大きな魚 古 色合 でて 断の群 動 りであ 12 に 小波 \mathcal{O} 々 であ 日 ス る 満 物 は < \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 河 * ~ 荒 ちた 姿に ボ 絶 落 \emptyset ŧ ŧ 踊 そ の時 1 で で 壁をなれている。 挨 涼 り、 < き美と平 疎 5 り \mathcal{O} \mathcal{O} 夕 \mathcal{O} な 真 \mathcal{O} 7 9 (対 を 有) 拶さ < 閃 静 示 全 た。 る日 ると云 空 が 昏 神 帷 \vdash 9 \mathcal{O} \mathcal{O} た。 光 幕 突然 が てを 空の 音 秘 れ 運 カコ \mathcal{O} \mathcal{O} 7 静 横 を な 0 色 せ で 夕 広 動 \mathcal{O} 3 を た な 洲 映 焼 大 和 日 を 棲家 世 つの水かる 穴 静 太 け 河だら 消 な とで 陽 わ水 てがし カン 日 全 のに け は 9 そ 5 え を え 7 表 滑 っ陸い輝 ての水 さ た 引 は \mathcal{O} 9 \mathcal{O} そ を 面 のけて両るかい変 き り \mathcal{O}

または、 得たのみである。そしてかくして 無の存在の全真理を取り逃がしたのである。然し、人間は完全には 動物ではない。人間は完全には 動物ではない。人間は完全には がら分離しておく内奥の障壁とな るものは、我々の自我に憧れる。これは にとり最高の喜びとなる。不和や にとり最高の喜びとなる。不和や でなくて、一つの生活態度なのである。 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、我々の自我実現の範囲 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生 でなくて、一つの生活態度なのである。 でなくて、一つの生活態度なのである。 でなくて、各々自己自身の分 なると云うことを無論のことと仮 定する生活態度なのである。 画

け律力い人我 花々は人間に対 で間について真のと。文明はそれが合計によってで 現して来たかによっては繰り返し云う。即ち はそれが発展せしめた はそれが発展せしめた に対し愛を持たぬ限り、 に対し愛をおためたり、 は繰り返し云う。即ち

> 云うことである。何か古代文明が 表微し、死滅した時は、い一でも 表微し、死滅した時は、い一でも の価値を低下せしめた原因のため であった。それは国家が何か有力 であった。それは国家が何か有力 な国体が国民を彼等の権力の単な る手段として見始めた時であり、 った時であった。文明は如何なる りによって人間が本当であり得るも でもって人間が本当であり得るも でもって人間が本当であり得るも のとする。そしてその十分なら、よっ でせえ、我々の必要を充たすこと は明らかである。然し、我々が世 ないである。然し、我々の世 に仕え、我々の必要を充たすこと は明らかである。然し、我々の世 たいである。然し、我々の世 たいである。然し、我々の世 ことである。何か古代文明が又どの程度迄認識するか。に、精神として認識するかど 最初 いてよりも

絆によ それ れいる。る。 ょ で 終 t 7 わ 0 たなすこと 我々の世 と深い。 はいいの

と考え 界 打ば 5 動 \mathcal{O} 時 7 \mathcal{O} 々 \mathcal{O} 5 る 我 与 我 を は 周 々 眩 試 ょ でこの世界に結 々 は 進むだけ」、 \mathcal{O} え 感 幾 自己 樹 到る。 みる 背負 ら星宿に迄 々 々 りに んだ狂信故に最も恐ろ \mathcal{O} 9 人間は愚 て、人間 て置 が 我 て、全然無視 傲慢を自我 が分離と不和とを生ずべ 分かを失う都度、 てることは 0 立てた凡 本的 2 の絶対的 一つ無く その にされ く権利をば 然し人間 分離 そ 轍 は である。 \mathcal{O} 人間 物質界を人 人性をそ 優越性を実証 実現 優越を示 を 何かなり んで 徽 な 難 て がこの知識 ばな 章 する程 想像 0 £ 11 ば か \mathcal{O} 大 我 て行 想像 奇 穾 の途 は < は 所 け な 5 屈 謂 々 する つ怪 \mathcal{O} する。別により、身のでは、またのでは 周囲のて以衝 分離を が進め 度迄に 間 0 き は いはせ酸眼ん 々人は権 11

> 世界と一である 対に を落 と云うことは 々 度 ま とすも ょ そ 否それ り無限 この 世界は のとな どころ 我 \mathcal{O} 劣 々 霊 我 る に れ \mathcal{O} と る Þ で で で あ 世 質 り ろう。 全然品 同 ろ 我 等 者 Þ 住 が 11 位 ts. 7 反 1)

満たされ そこに だれは の霊 が 我 広 れ時 愛となる。 \mathcal{O} は 死 中 1 11 体性 科学に於ける我々 方 世界の は 12 Þ い歓喜となる。 その時に 7 のその は益 在 の全存が 滅 運 る。この の自我と看作 知的でな 命を授 る。 は って百 \mathcal{O} とされることは 滅なりと云う絶対的 全体性、 一々我 決 我 々 我 々 は 明 在 を啓発し 度 瞭 渾一の の霊 間 霊 い時 7 か 々 々の頭に その認識 も死ぬ は って居 の霊は自我 な意識を得 全宇宙 は全宇宙 に得 す 0 あ 完 \mathcal{O} Þ そし 進 を自 ちこ 全さ 明白 と世 出 ŋ 自 な が て、 V) 来ぬ 全体 \mathcal{L} 1 に は 拡 とな て我 をそ の認 自 且 れ \mathcal{O} 歓 確 全体 \mathcal{O} カン 分 拼 信 が む 9 5 そ る る 7 Z \mathcal{O} 2

時に 密の 意味がわかるのである。 人が「万物は愛から生まれ、愛による。その時に、人間は預言者たる詩ける敬われたるお客なることがわか 在 高 て維持され、 愛に中へ入り行く。 で覆 の参考者だり、永劫の饗宴に於 ` 求愛の中に 即ち花婿と \mathcal{O} と一点の汚点なき白衣を着た 人間はこの華麗なる愛の祭 (パラマ この美 愛に向かって進み行 入るのである。 の間に行きはるる秘 ートマン) 」*と歌える い世界と云 その

ならぬ。 単一と二元とは不和ではない 同時に一であ 存在 し、失はれる。愛に於 の凡ての矛盾は り、 二でなけ 愛 いの中 \mathcal{O} れ に 4 没 ば愛

形 寂 見 あ る。 な る同じ点で相 出す時、 所を絶えず変える。 と止むことなき活力と 愛のみが しこの静止そ \mathcal{O} である。 我 々 々 会う \mathcal{O} \mathcal{O} < ŧ 心 愛を見出 運 活 は 動 \mathcal{O} 静 そし は 動 کے が 全 \mathcal{O} 止 愛に於 す 爇 て愛を す迄そ る。 \mathcal{O} 切 静 な で

と借 進 愛 \mathcal{O} 愛に於 貸借 な が り方 パとは えら いて損 対照表に 大 な儀式 同 つも、愛に於 る。 いて 益 とな 於 は 創造 に 1 調 於 ŋ て、 神 和 され \mathcal{O} \mathcal{O} 1 て愛す 貸 て自ら 自 \mathcal{L} 益 己の金に し方

> を獲得 まことに愛は放 棄 に自 L \mathcal{O} 行 らを放 不 1 可 と変客 分離 棄 的 す

結ぶも

であ

る。

をなし、 ぞや。而 こに在らず」との同程度に強 の も ŧ ては愛は如荷なれば可能ぞや。 をなす。この自我なくして何 「余はここに在り」との積極的 のがあ 愛に のがる。一極に於 他の一極に於いて「余 り、他の一極 7) して又、 てその この自我 __ 極 12 て \mathcal{O} 11 みに 否定 は 断 \mathcal{O} 汝 \mathcal{L} 言

造はな が るも の神秘を装ふて来た。 絶対に自由であるならば、 最も束縛であるからだ。 容れぬも 一にされる。 束縛と解放とは愛に於いて のに於い 愛は最も自由なると同 いであろう。 のではな 7 有限者と無限 無限者は そして 何故 若 かなら 時 何 有 者と 愛な 等 神 に、 限 創

ある。 つも て、 単 対的 7 することが なる言葉の遊 同様に我々 価 制 束 が 値につ 縛 限 自由だけを望 愛程独立 も亦望む を歓 又愛に 愛 迎 が 自 何 的 処に び \mathcal{O} 7 束 に 語 非 高 か な 由 立むため 過ぎな 5 る時 と不 ŧ は自 t 且 1 見え てこ であ 本 0 \mathcal{O} 分 それを超 自由 は な くなる 他 る。 それ でな 程 に ので 同 \mathcal{O} V

六九頁

送 たべは乏 は何 を 自 日 極 後 L えにの点は処 外 す す る の創造我 由 界 < 人 は対 有る る る 拒 何 我々を É う 7 を ま 少 に 々 神 \mathcal{O} 偉 \mathcal{O} 数 は 処で が 飢 Þ 目的 であ 大な栄光は存する。 \mathcal{O} \mathcal{O} え に語 美 あ 究極 言 情 飢駆っ 苦痛 な は 駆っ掛 は 曲 ŧ 大 \mathcal{O} 己 9 何処でも、私の意味ではな 持ち得 自ら た。 な って日 が 命令を慎 \mathcal{O} IJ の意味ではない。一 の意味ではない。一 がと云うことを示す がと云うことを示す がと云うことを示す がと云うことを示す がと云うことを示す 愛を最 ŋ を る 美は ズ . ユヌ) 実彩 で い飢の で 音 それ え あ な 我 め £ 0 る 楽的 \mathcal{O} \mathcal{O} 人 Þ に自 美は到る それ以 要求を毎 を掛 4 間 完 ならず、 元をな美 生活を Þ 他 方、

> ヒ 歓喜は そ 余る 獲得 我 間 え る生 たる れ 大 々 \mathcal{O} どころ き春 我 姿 \mathcal{O} \mathcal{O} 我 体 命 あ 到ん 中 力 Þ が る る ろかて 々 12 \mathcal{O} 完全な 肉 が 7 全行 肉 う 云 体 碧空 な 死 分 悪 到 め う 欲 束 け 愛 在 لح 使 中 不 \mathcal{O} こと る 前 厳 に 必 釣 に 骨 縛 々 \mathcal{O} す 7 \mathcal{O} 要 0 は 必 戦 中 組 草 で に り る 要 で そ 与 合 充 いに 高 2 \mathcal{O} あ れ 溢 中 り 生気 中 7 \mathcal{O} \mathcal{O} 灰 11 る。 得 尊 色 知 措 す は に 中 \mathcal{O} 識中いを ŧ 有 在 め に \mathcal{O} < ŋ る。利 のめ証喜断否 に \mathcal{O} ま

第六章 行動に於る悟り

歓喜は法を経て現れる**を知れる人にして能く法を超越するを覚えるである。 法の束縛がその人に対のである。 自由になった霊は束縛をも避くるを喜び、その如何なるものの一々に於いて自由な霊は創造にある。自由になった霊は東縛をを必ずるを言び、その如何なるものをも避くるを求めない。 これ束縛をを感ずるからだ。

事実、束縛なき所、狂的な放縦の在る所では、霊は自由なるを止める。そこに霊の苦痛があり、無に、応じて、霊が法の束縛から墜落に、応じて、霊がないでも、霊は母親のたってでさい。」「オム、私を汝の法の束縛のするこのでで、、本を持たないで下さい。」がら次の置きで、なの歓喜と一緒に私を力がら汝の固き把握によって守って下さい。」

事実、束縛なき所、狂的な放縦のをこれがあり、無限がらの変がある。誘惑の呼び声に、応じて、霊が法の束縛から墜落に、応じて、霊が法の束縛から墜落に、応じて、霊が法の束縛から墜落に、応じて、霊が法の束縛の中に縛って下さい。 オム、私を内外共にずって下さい。 オム、私を内外共にり上げて下さい。 オースを持ってください。 オースを持っている。 オースを持ったいる。 オースを持っている。 オースを持っている。 オースを持っている。 オースを持ったいる。 オースを持っている。 オースをはいる。 オースをはいるないる。 オースをはいる。 オースをはいるないる。 オースをはいる。 オースをはいるないる。 オースをはいる。 オースをはいる。 オースをはいるないる。 オースをはいる。 オースをはいる。

法は歓喜の堆セキ物であると

仕事を為し得なかったろう。でなかったならば、何等点の霊は常に活動のある。若 だいである。同様に霊が外的 る如く、霊は行動の中に自由を見 はならぬ。歓喜が外部に在る法を はならぬ。歓喜が外部に在る法を はならぬ。歓喜が外部に在る法を はならぬ。歓喜が外部に在る法を がいるである。同様に霊が外れ 動は自由 由を見出し得ぬからである。行動を欲するのは、それ自身 は物質面に在るので、 精神を束縛するも 霊は常に活動して自らの抱持 る。それらの に反する 歓喜が法の中に思りるものと考えてい ったろう。 印度 霊 の 自 活 由 動 る な

人間が行動し、そして人間の 神をそれだけ近くにもたらすの 物をそれだけ近くにもたらすの である。その実現化の中に人間 にしつつあり、国家、社会に於 ける様々な活動の真ん真ん中で、 益々新しい様相の自分自身を明確 さかに見えつつある。この観察 らかに見えつつある。

子が一生懸命になって芽を発し、恐ろしいものは世にはない。種然の中にもない。漠然の未縛程ー自由は暗黒の中にもなく、漠

自由を欲するが故でるに多忙である。何 絶える がた では 漠 入るために には \Diamond \mathcal{L} ず自ら行動 である 必 要では そ 包 同 無 であ 何い 新 \mathcal{O} 様 が放か。霊はが解な分野を 地上生活 し、る。 と難 々 霊 霊 霊 自 は は

美を醜の包囲か 庭園とする時、、 こ 美 の は 社 な人こ 身を実現することを欲する。。霊自身を見ることを欲し、霊自 ることな 間 るとき、 を伐り倒し、自分の人間が毒悪な密林(ご する善 の我が儘の眞只中こ直・トー特ない。人間が法や命令をは美を内部に於いて自由には、外部の自由を与えずしては、 得 は外美部 人間 人間 から解 が カゝ 自 < 悪 で 放する 身の中 L は 自 プのために (ジヤング 障 に霊みかられ善ら 碍

> 人間の自我は自分自身があ の知る 識 \mathcal{O} の野見

て人性の悲哀、行動の未練 しげな語調で語らなかった た立ち何時とはなしに無く たか。その人々はカー杯に に縋り付き、「果実が熟すた に縋り付き、「果実が熟すた たくない。」と云う。一生懸 たくない。」と云う。一生懸 真っ直ぐに立て、彼笠戦いに勝てる英雄の加ってうちひひがれるこってうちひひがれるこ たくない。 こくない。 こくない。 こ 思うべし」*154ド)に曰くこ 嘗 喜 生 自 8 分味わった人間 分に霊を了解した人 たる霊 分自身を見 曰く「唯活動 進する。 の様 は百年生きん に 活 の言 彼且増 \mathcal{O} 一生懸命は一生懸命は 等の生命一つ示しつ とことを、 す輝き 眞只中 で結実に 未練を悲 苦痛 くな 決 ょ な B

である。いちのはかれらいてのみ人は百年生きんとこそいてのみ人は百年生きんとこそ

が問に於い 、間に於い 、間に於い 、る。それは我 は自我実現の がそれを は自我実現の が は自我実現の が で だろう。 ることは 何 えの道に入れ を投げ 無限者 である。 \mathcal{O} 役 12 ŧ \mathcal{O} \mathcal{O} 絶 \mathcal{O} 活動の世界 りて迷 対 生 得 的 ね 想 命 で真の ぬば と云々 り、 で

もし、一方に強制があれて 人間が義務を増やし、点 人間が表務を増やし、点 の一方には喜びがある。 の一方には喜びがある。 るだけの仕事なは人間を1忙 で人こ行が別れ動 ある。 考え 同 な ると思うであろうが で \mathcal{O} どしどし仕事を拵 人間を死 で はでにな 事実、 間 あ は人い人満間。間 ると 人 間 は の文明が進むにつれ、の自らなる遂行に急ぐ。 強 然を増やし、自ら進ん 1 忙しくしておくに足 1 忙しくしておくに足 1 忙しくしておくに足 1 忙しくしておくに足 1 があろうが、さうでは に命ずれ いうは 制 され 休 自 を 真 7 み仕 理 活 て十 事 が n で動 他方 ばは _ す 分と 方 獣 で で

> しい 戦 難 難 難 難 いる。そり、求め、 り、 案出 人り間る 間 は中 人し 造 を積みあげたり、 その現在では完全 間 目 地 処 め た。 。そし はそ は永久 眞 法を廃 せざるを得ぬ 7 せざるを得ぬやうにされて は永久に建てたり、物質の堆積 は永久に建てたり、物質の堆積 は永久に建てたり、物質の堆積 なもがたり、苦しんだりして でその分野に於いて人間は でその分野に於いて人間は でも変得して死を光輝あらい、そして艱難を避けるどこ であたり、古しんだりして 現在 全では の近接 \mathcal{O} 重荷、 と <u>立</u> 壊する を背負 なの つ 一 大 生 環境 層 < 命 7 な 偉又の 分 阻 2 野 であり、 八であり、 八であり、 自 は つ の

がその行動の分野を制限することによって背丈を伸げ あに、即ち人間が未だ達し かに、即ち人間が未だ達し 従 イ 0 フ)*に人間は堪えられなこの破壊(マハティビナ て人間 は己が記 現在に対 こ人間に 限す ば 超 るこ 人労苦労 てすた 越 ス す

を正す。霊が信を正す。霊がたりの力が失われる。 を正す。霊がない。人間を正する地域である。 を正す。霊がためれる。 あ その 巻きを起こす。 は人 意 !味を失ふ! لح 4 る。 間 我 す 出 々 ぎて戦 て此等 霊 中心を1 は には が る Þ 生 の 敵 方此方 る。衝動は沿れぬ限り、 は征停 異 傾きも に にせる恐るべき渦へ突進すること 利己主義 滞 服 可 突進する。それ ある り、 告 分 5 な 物 力 裡 り 7 \mathcal{O} は消散され、何等の恐る。尚、流れ さ 遠 に 働 仕 事が ために これ故 にな の渦巻、 する。 き 5 の附 り

る 気 部れ と外部 ば 色 い生命 と云うことは、 である。 様め な らな い々に کے は 肉 V) \mathcal{O} 交通 にん体 生命 生命 生 け は 生 を命を部在の は で 外 正 は 現を得 真理 保のる た光 全 出 るるねや生はな命でたのば空き内けのは

> ひはかそ 、十ねの らその 脳 は ま そ 肉体はな 9 小止 これだけ は外に向 を体の くもない。 けり組織の は連れてに は事と運動 である。 る。 な る しい て。の行動の向

外物物 を 必要とする \mathcal{O} つである。 る。 常に に れ自 あ

霊の内的意識

成々 ざえな は か をま る Ź ブ ŧ 々 考えの中に住まねばなめが、まことに真理でのが、まことに真理でのが出生さることが出来ものを二つに分かつなる。 ラフ をど 々 自己を当 の 方 ラ フ を 面 見捨 つならば 欺 7 で がき, ならぬ 来ぬ 婆羅 であ 否定 7 と 굸 は る。 7 吸 損 L 失よ な ,

ろう。 我 て々 若 L 中 崇 た 我 拝 Þ \mathcal{O} L \mathcal{O} 部 7 人我い 愛 は す 々 \mathcal{O} 自身 生探 と云う にる 玄 々 奉 が ょ \mathcal{O} 究 反 2 で 没 対 な な \mathcal{O} 7 を云ば 重 旅 ブ < 的 0 ラ す 12 \mathcal{O} 7 7 V , る 献 フ ブ 即 動 な 面 我 す 若 7 ラ 5 カゝ L を る らに 且 々 フ くは、 享の一 於 9 7 い我

と云 な 何す は 承 彼はな大に陸殆内 で 偏野 る 部人 なき進歩を語る。 4人陸の科学は常に世に見えると迄大陸はに見えるとの大陸は 認 等 ど的あ願信意りは がのに霊を拡 る 神 間 欧 Ė لح う ŧ は フれ化 カ \mathcal{O} の州 の科学は常に にめに何処に ない。 充卑 身 見張 であ ことを承 神 全の 毎 な 識 は 霊 大 生 の進化 る。 に示 < 野 する いは が陸 \mathcal{O} 大 存在 であ 成 野を 陸 拡 主と に 質 L は 張 即 於 を語 認 等 5 と れる 9 すと云うことを 顧 充 \mathcal{O} る 1 ŧ そ 世 実 実 制 等 9 は は 4 世 に 7 7 あ な りの界 ○存の 他 7 又 は 神 な の界 欧の 関 霊 は い。存 の終れてな 完全 ると 完成 自 方 プ 神 始形 い野に州行 心 ラ りも め而 が で 対 大 使 常 主 あ 在 上学 わいいは否 彼 た 陸 7 \mathcal{O} ŋ る。様大 る ての広い外 張 等 あ大に す

> 始のい全認霊な体 てはがつ 無 居 直如あ 視 7 接に きであ のいと中。し り V) る う 1 しな 中に 事 唯歌う そし て 歌 ことを いか . あ る。 し完 う n は \mathcal{O} ること に 7 な 事 は 0 全 事疑いの 決 如 歌 な し何のいの 4 同 1 解 を 4 が 歌 な もだ 手 7 と云う るに な 我 は感 進 \mathcal{O} 々歌附一感はいい時附 < 行 意 両 我 者 識 う もい々のつ な 7

はれを 成の人ん _ 洋 を 認 とを欲 力認 位は \mathcal{L} 7 奪 の強め力 11 の美を知らないのだ。 位置を許容するを欲せは物の組織に於いて所 しとを欲しない。即t いる様に思いている様に思いる様に思いる様に思いる様に思います。 調 る するため \mathcal{O} は彼等が常 決して「完成」たる。 い。即ち、西洋のして「完成」たら わべ ょ で < れ 実 々 あ 0 て死に 行と生が西洋 る。 運命 て 凡 る せ 西附け ず 7 此 当 成人 等 \mathcal{O} λ 5 لح 西

全は 詈 は 反 々 す な 瞑をは 内 対印の 様 想 以力 的 側 度 て 排 分 に於 世か 分野 界に 5 て 生ずる。 於 斥 ブ **\ 対 せ て ラ してでする。印度 は てフん いて \mathcal{O} ブ 拡 と 張 見 中 ラ \mathcal{O} 7 する。 危 を唯 え フ 4 \mathcal{O} で あ 度 険 了 分 7 。 我 を そを解その宇せの る のは 偏 小様 正 宙ん完 々 罵 我 願

は自らを石の如くに干乾らびしむる。彼等の心はそれ自身の流として、情緒の恍惚の裡に溺れて気絶する。彼等は描くの如く、法の束縛や外部世界に於ける行法の束縛や外部世界に於ける行法の東縛や外部世界に於ける行って人性が蒙る力や性格やの損をを量る何等かの標準を手の届に教える如く、内と外との相関の中に、力が平静に釣り合っているのである。真理はそのとのおるのである。真理はそのとの相関である。 と空 7 を をその創造 理 ţ 性に くも 仰 何 造物 試 4 な 不 彼 如溺めのび智見ラえ行くれん流し力んフる動

ま 面 従うこと は「万 われ 歌 わ 物 9 につ つあ は っ他は らな \succ 歓 喜 あ る 面 し火理 カュ b

の裡に自由であるからだ。れ、他面に於いては自己の歓喜

実あつい範て眞 なへのて 由 \otimes あ りと締められる の自由を見出しる でに続が音楽の中では でに続がかかる。 を見出しる がでに がでに ががいまする。 がいまする。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 がいまる。 はいまる。 はいる。 はいまる。 はいな。 はい。 での時にのみ音楽は生での時にのみ音楽は生でが真に絃をします。 つ部 我へての々の て 全的 の道絵 型を見出す。 記を見出す。 がかるは がはられて が真でなれて に縛られて に縛られて が完れる。 子を得 真理 えることに 全 と云 はり我のな に 低 カ Þ る迄 音 縛 ていて重はか 束 唯 が 2 とはられるとはられる。 ` か - の の 部 をい限いな 束 子 真 た を 理 及 で あ V 従 ろう。 法 最 いる如 わ る 自

も 世に神の国が実現と 世に神の国が実現と その片隅に その片隅に その片隅に る人類の 聖句 はこ である。即ち霊はその活動をブラフマに献ぜよ」**たるのは、「汝何業をなそうとも この とも 努力 のいす

きも 堂 た 幾 全 隠 か 空 時 のる 代かをかけて類が、日光にかいるか。は 自己 遁 いるか。神と一との合一は出犠牲を愚弄せんとする者類のこの壮大なる自己表示、の片隅に座して、行動に於 享受 、日光と嵐 て苦 身の偉しと 見 出 てか最いさ想大て こ。高るかるのの 心おのかるのの の中で、 。べ何聖

ためく軍旗の行進の前に道を譲る。ためく軍旗の行進の前の霧の如く、物質の に会うや消え失せる。苦痛、病 に会うや消え失せる。苦痛、病 に会うや消え失せる。苦痛、病 に会うや消え失せる。苦痛、病 にって退却しつつある。無智の障碍 は汝の昏睡裡にこの人性の東に追すとかある。 音目の かり ではないかと云はんとするか。 この楽しい群衆から走り去りまり、神を からに応ずるを拒む者誰かある。この楽しい群衆から走り去り、神を からに応ずるを拒む者誰かある。この楽しい群衆から走り去り、神を から と いっこ いっと いっこ いっと に が ないかと は ないか と っと が ではないかと る ではないかと る ではないかと る ではないかと る が ではないかと る ではないから を ではないから を ではないかと る ではないから と は ないから と は ないがら と は は ないがら と はないがら と は ないがら と はないがら と は ないがら と は ないがら と は ないがら と は ないがら と は ないが 轟きをは² んめく軍旗一つに裂け、 天空 聞 は のの前勝や 霊 人外哀 に 勝ち誇 Ŕ が され 求 切 カゝ k 行進する 々も眞 っては

我 る な で ŧ 実 る卑怯者は 大を 力 が た 如 於 \mathcal{O} 飛 れ \mathcal{O} < 々 9 ならぬ。「我 11 \mathcal{O} 処 神 らない。 ある。 程 < 地点で、今こ で神 を は 身に保証 る神を実現 11 $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ に 世 \mathcal{O} て,我 遠く 我々 到 真理 く云える権利 るや。 々の行 我々自身 我々は「私 達 り扱うこと へ跳び込む迄飛 」と。我々は せん て は勇敢にも斯う云は 何処にも 会えると期待 々自身を実現 ん 出 飛び得るや 々は でい り出 障 動 否、 と思う者 る神を信 碍の道 と思 ね \mathcal{O} \mathcal{O} 敢 0 神に、 カン \mathcal{O} る」と云 瞬 を持 によ 中 飛ば ることによ \mathcal{O} つあ 神を見出 か 中に 間に に 事 不 我 7 ると我と 自 ここで ら自 らな 規律 λ する は 9 々 到達 と欲す で飛ん 得る の行動 る者 無そ 充 私 7 9 はね得 ば 11 \mathcal{O} つあ 何 自 2

その長は「その歓喜がブラフマの中フマを知れる人々の長」*とよぶか。ウバニシャドは、誰を「ブラ

慈善をも、 の 歓 の 歓 喜 歓 善 なき 者 め 力の 活 動 喜 運動 全く ることに 所以 ブラフ 12 力 \mathcal{O} 中 \mathcal{O} フ てマ 歓喜 に表 力が 喜 全 現 れ 日 に 7 歓 運動 常 、そ であ 喜 そ の歓 7 、その芸術 現を ブラ 喜を持 事 マを な \mathcal{O} 給 る。 喜が 勇気 中に 12 即 在 \mathcal{O} 0 真理 ち飲 る る 表 真 知 な フ ては 喜 7 生 ラ 理 え そ てる人 れ 現を与え む 形 な \mathcal{O} 7 動 1 \mathcal{O} る人、 ならぬ る を取 き得 その ず 産 に 12 食 フ \mathcal{O} \mathcal{O} 持 そ 美、 在 7 如 其 識 詩 活 ブ 等種 を た 生計 ょ 歓 別 る芸術家 に は ŧ り \mathcal{O} 活 ラ ねばな 在 在 彼 ブラフ う 喜 \mathcal{O} \mathcal{O} |る勇者 る詩 在 樹 か を彼 は 力 \mathcal{O} が 々 \bigcirc か 現 どう 活動 \mathcal{O} る \sum す ラ 5 7 ブ 中 \mathcal{O}

出さ 表 ラ 自 を 5 る を与える。 求 7 満 \mathcal{O} 彼 自 異なれ た は 身 \mathcal{O} 多面 ŧ 7 ラ 同 凡 やる。 フ る U な活動力 マ自身 創造 様 ゆ る方 12 -*₁₆₄物 己 向 に そ \mathcal{O} ょ の固 に 固 有 射 0

あ 造 ラ る。 たる フ 7 喜 かる 自 身 を示 常 7 どう のそ ラ げ う

ダを方 捨面 いの t あ 自 لح が 々 に慈善 信を捧 る。 慈善 る ド لح 存 \mathcal{O} 欲求を満た で満足せずし *に神は「自ってねばなら する 我 事 で 力を与えるも 神は我 これ優波尼 の予言者 の心を げる様に Þ を許 目 許与 が 7 に自身を与える なる最高 与することによ 分 的 Z た沙土 (ウバー) つある-の 自 *₁₆₆身 自 きだ し給 云 由 かく 同様に う 、乏を取 といわれて 陀 の力実不去即を

見え始。 て滲透されると云うことを知る 的模倣たるを止める。流行のかかる活動力は大衆の行動の足によって刺激された行動でつて刺激されたのでなく、霊的にはならない。それは欲求々の活動力は調節されるが、 である。」**い もの始めに すも う すも ス 案 にも従うことを止める。 固有 かり、行と。 け 内で働る。 それ故 であ と云うこ の多面 ウ 又そ り、 のルの 々 と善 ý, 12 欲 同様 求() < o 歓 \mathcal{O} 在 とを、 の 人 た た る 12 時、 我 喜が 終 感である り、 神 我 歓喜とによ 我 わ 々 は、人就 7の様々の目
 A
 本性 りに神 終わ 々 そ が 存 我 そ 自身 自 Þ に具わ 喜を仕 活 で 求 時 の慈善 \mathcal{O} \mathcal{O} 霊 9 盲 あのに 指 動 中 機に る 义 満 ょ 目

を仕は我放事、々 々 \mathcal{O} 前な々の な 爆裂の中に、の仕事に我 に そ であ 11 棄 ま 12 我 の仕 と \mathcal{O} 喜ん っ つ 透微 しな 々が る 我 我 \mathcal{O} て々 々 日 自らを いからである。 で、 が \mathcal{O} \mathcal{O} る。 中に そ 我 カゝ 日 中 々 し は 花 々 か々 き を 放 る休 か 見 \mathcal{O} 休日を見 \mathcal{O} 河 も完 棄 打ち負 出す 日を見 仕 香 はそ 幸 事 な りは せ 日 休 喜 ず 全 日 は \mathcal{O} \bigcirc 大火休気は日 出 か に は 出 で が な 自又ら すの す。 要る 1 へ焰を 我

えよ。 汝 に 愛 喪 花 \emptyset *172 汝を歓喜と直覚して、 に火 見 Ū を 持 で 十 めのよう 芳香 そ 我 \angle な勇気 々を 分 興亡に於 火の如 く燃え 如く汝 に愛する 汝自身を与える く汝 歓喜 上ら < 足 汝 لح 11 \mathcal{O} 悲哀、 注燃え る 力 Z 7 \mathcal{O} 7 力 を我 我 を 働 宇 分 我 すっています。由を十 を充 \Diamond 々 Þ が に足そ て汝 \Diamond 々 \mathcal{O} そ O \$ 足る 満 霊 に 5 ょ 命 \mathcal{O} \mathcal{O} 与を得 をよ 分 しが \mathcal{O} せ 河

> あ序る 薄 5 5 る と平 処で 駆 か せの す 逐 森を排 とな は は せ 何 何 力 \mathcal{O} \Diamond 処 且 処 無 \mathcal{O} 9 でも ょ て迸 き 中 で 除 9 ŧ 自 し 想 に は そ り出 農 像 行 5 支 汝 家 え 石 汝夫 を れ を のが \mathcal{O} 屋 多 我 \mathcal{O} を清 き地 歓 歓 包 古 な 々 喜 間 喜 V O は 掃 を は 土 が 穀 な す かの

広 如 き流 にお をもたらし 生活 祈 > 9 野を突進 それ の香 目覚 来た りた れ を 宇宙 V) 8 ŋ 5 生命 7 0 声 \mathcal{O} あ 多く 来た 労働者よ。 カ \Diamond 汝 ょ 春 の宇宙 を美 を 5 我 5 充 々 \mathcal{O} \mathcal{O} 実 \Diamond 森 刺 7 \mathcal{O} 人 力 干 のめ 間 激 よ。 多く -乾 0 せ 的 の 抗 叫 \mathcal{O} 我 生 南 Z び 命風 々 \Diamond は \mathcal{O}

記者自序 第二章 霊 意 識 ――――17 中見出し〇〇〇〇〇 ―――17 小見出し〇〇〇〇〇 ―――123 小見出し〇〇〇 ―――123 小見出し〇〇〇 ―――123 工ピローグ ―――125

*175*174

口 口 グ

第七章 美 \mathcal{O}

£ 義 己 が な はの 大 が < そ 0 K である。 とが そ 部 は あ な 7 \mathcal{O} 1 \mathcal{O} 7 さく 入 世 る 分 過 関 故 る \mathcal{O} カ 7 手 ぎ去 我 ま かは であ 係 荷 か __ か 0 財 ま 々 我 あ \mathcal{O} 寸 る 如 々 0 我 て 力 る カ は 々 لح \mathcal{O} 己 5 で 終 \mathcal{O} \mathcal{O} 置 あ う 目 と が で 我 0 で 効 力 あ る 7 \mathcal{O} 々 < 7 放 あ 又が 用 無 0 自身 信 浪 る 部 \mathcal{O} \mathcal{O} が لح لح 者 ま 価 カ 分 有 を 高 は 値 る 世 \mathcal{O} 用 せ 自 持 出 我 な 界 如 が 若 な よは我来 々 も き B 我 \mathcal{O}

物 感 協 美 K 感 的 宇 真 は 意 美 醜 を を カ 何 識 紛 な \mathcal{O} 争 通 け < < る 拡 を 本 張 ば る 醸 そ 分 分 \mathcal{O} 0 に 交 う 離 を 道 な な 诵 な ŧ, 5 7 程 る 見 5 \mathcal{O} 9 大道 カ \mathcal{O} 々 せ 又 を る 非 \mathcal{O} 1) 我 を 美 も妥 美 個

> 物 普 進 Ł 査 学 を承 区 は 意 遍 又 間 は は \Diamond 同 \mathcal{O} 分 的 る は 認 的 は 到 我 々 哲 込 嘗 々の 達 4 な 12 絶 \mathcal{O} 口 は 歓 対 可 的 \mathcal{O} 的 あ 専 査 ŧ, 定 で 知 び 9 言 服 کے 間 念 あ 世 を あ 対 な 存 \mathcal{O} 与え 0 記 る る 地 \mathcal{O} 限 全 実 す 物 で لح 0 を絶 さ 地 あ 界 ŧ る 故 9 12 を 故 我 れ る 対 る 义 拘 限 9 能 あ え 置 に る に 々 ず に 凡 7 領 力 \mathcal{O} 日 何 推 美 域 未 こと 等 ず が 7 々 感 〜踏 科 真 \mathcal{O} \mathcal{O}

進 無 が 生 7 初 間 と 行 る \mathcal{O} り 類 間 調 万 \mathcal{O} \mathcal{O} 0 である 命 境 明 愈 史 あ る は は 確 生 々 \mathcal{O} \mathcal{O} る。 そ 線 に あ 対 然 な 学 る 照 れ を 区 9 が 推 科 別 我 は は \mathcal{O} 此 漠 学 を 生 7 Þ 等 然 進 た 物 が \mathcal{O} 解 た 生 \mathcal{O} 理 8 7 る る 明 解 れ 物 が ば 消愈 カ ŧ)

造 さ 波尼 物 維持されるのだ」*と。なは無限の歓喜によって (ウバ ニシ *174 創創

 \Box

*178*177*176

なる時 音 々の 時 ŧ あ ŧ 我 \$ 故 7 た美とであ 々 楽は る。 ならな を原 は 心を のが Þ 羽 に 我 5 \mathcal{O} と美との \mathcal{O} ら分離する。 り 根 我 心を惹き附ける。 美 か を感動させる 目 々 る かきた ら離 飾 充暴を放棄 \mathcal{O} 先ず我々 Þ 的 音楽は 的昏 を達す 明らか の最初 節奏ある協 り 意 る。 $\dot{\phi}$ 調和 して見る。 ん *176 と の で、 てる を了 に る は美を周 然 \bigcirc 不協 美と 雑 5 Þ 否 美 音に 解 を は は 馴 色 呼 Þ で 対 理 音 染 美 あ照 す \mathcal{O} び 加 理 \mathcal{O} 不 格好さで 格好さで 格好さで を みが なる であ 音 る 井 を 服 装 \mathcal{O} ŧ 深 を 余 \mathcal{O} 2 た の々の万のので <

は は の成 長 歴史の或る \mathcal{O} 或る \mathcal{O} 選 段 ば 别 時 \mathcal{O} 宗 期 者 派 に 於 を \mathcal{O} 誇開いて

す が見捨 *そうすると丁 し難 てら くなった印度 間 ` 度高尚な真り削減せんとな 削 迷信 文 が 発 の生 理 試 衰しのみ

が生まれるのである。の如く、信者の中に気取りと誇張微時代の婆羅門(バラモン)素の例

反動の特徴, を恢復する, 理にも非凡 に美を認 大動みたの視的る凡裁 具合故 到 を見 過ぎ きり 美意 反 我 7 ば 来る 又奇妙さ に美を認 動 美学 Þ 明 で 復する する誘 可によ らか 5 普通 る め 識 に 7 分 のはの \mathcal{O} 既 である。 な 微 と云うこと の物を我 \mathcal{O} 平 凡 分野を に 識 識 \mathcal{O} \bigcirc 候 V V 我 を見る。 感感に陥 現代に 快的 す 点 たる にする 物 することが ため 史に 0 々 て王冠 な は Ź で 即 \mathcal{O} 0 には 醜 ち美 驚 を に そこ 々は な 凡 反 気 は 不 事 な が \mathcal{O} を 知覚 と美 於 調 却 動 取 入 真 \mathcal{O} 物 で (h) を 求 それ あ そ 和 \mathcal{O} で 避 利 め \ \ 9 であ 7 \mathcal{O} \mathcal{O} きも を と実 間 لح てこ け 段 め を を 平 我 かの 表 7 -凡さを過 階を経 る。 ぶらされ 創 我 それ 現 造する。 の美的 証 終 々は そん 12 和 を さ 間 際 我 す は 調 習 全 和 2

持てるのを知る。ならずして、その美を真理の中に

する 美 我 に 的 な は 5 云 \mathcal{O} 真 要 < 抹 う 々 な と が殺され、醜 理 素 同様 歪 て、 \mathcal{O} 1 曲 生 \mathcal{O} 活 云 さ 虚 偽 る なる B 完 Þ ~ 芸 全な は 美 きだ 宇宙 表 か理 語 は 現 る は 到 う \mathcal{O} と云 存 力 我 る 中 \mathcal{O} 了 \mathcal{O} 如 組 処 き に形 解 すの 々 を る 織 S に 醜 カ 中 \mathcal{O} 意 لح 5 に が \mathcal{O} 玉 否 中 味 存 来 同 語 0 てる様定ででかと

を 在 活 \mathcal{O} 或 生 る調 る を営 中 ぜ に程 和 4 在度 得 る迄 \mathcal{O} 永 る 真 我 久 理 々 \mathcal{O} のは 法 同 法 我 則様 則々 に に にの 背 到 背 中 いるいや て処 て万 醜に生物

対 自 宙 法 我 自 知 す 12 あ 々 々 る 由 る が る 調 は 泊己 支配 を了 真 和あるを了 /理感を通 法 を知る 解し、 を拡 \mathcal{O} 道 徳 げ は 同 自 的 時 解 美 我本力 感 す 7 る を通 を性 強 我 物 創 支 質 に 造 々 < 配 的我じの 在 な る。力 る て中 々 質得法 にが宇に

活 を意 る美 創 識 \mathcal{O} 浩 す 我表のれ す 歓 る 々 現 様がは びす にる に 自一 層 よだ な 己 真 る の霊 り け 実 つにに 芸 我 れ在普 術々

> るのが た試 ŧ を与 自 そ ら了解 知 眞 味を有る が ねばならな 分 は \mathcal{O} 9 向 へに 美 *179 胸 我 7 へ連 霊 2 々 1) らない。 婆羅 は全宇宙 は \mathcal{O} な と云 安羅 吸摩 とれ帰る 全字 け 動 悪と ば 在 うことを 11 7 な ば 宙 \mathcal{O} が 最 からだ。 な 完 の \mathcal{O} 5 \mathcal{O} 生 グラ È め 全歓 中 愛 高 め 我 な 喜 に \mathcal{O} 心 浸 解 \mathcal{O} フに 何 目 Þ 美は と云う 故れ的 充 立我維 脱 を つつ々持 る 眞 限る 実 カン で を あ

何形と 言 ずに限 で る き っ。 それ故に対 音楽は芸術の 0 あ ほ 葉 驚 る 見 な 々 一打 こと る。 え を は カゝ 精 7 る音 創 であ \mathcal{O} それは 造 物 とを持 \mathcal{O} 楽 る に美 \mathcal{O} に どろ き 7 そ示有 た \mathcal{O} 0 \mathcal{O} 限 5 の最 り 星の現 ゆ _ もはな 最 \emptyset 我 返 ŧ で 絶 \mathcal{O} 煩 で え 乍 す 煌 あ も純 あ 繰 形 \mathcal{O} は さ 重 る ず \emptyset 象 直粋 り 5 夕 で 静 カ 喜 返 そ 地 あ \mathcal{O} かに な 星座 る 宿る で な形 空 な کے 神は 同 縁 純 表 で いく 聴 を感 秘 目 無 \mathcal{O}

塔 然のつス 5 香を灌 た 9 \mathcal{O} う る 7 \mathcal{L} 枯 さ 7 れ 黒 れい らル塊 空を満 た荒 い村 泳 屋め ての 地 者 上の \mathcal{O} す ŧ 12 开 \otimes 散 子 雨 立 り 在 \mathcal{O} \mathcal{O} れる のはつにた 様 音と一でいる。 るヒ えにか尖漠土刺

める。音楽によって宇宙を表現せんと努音楽によって宇宙を表現せんと努った。

て画 用 P を表 行 布 1 眞 な < \mathcal{O} 現す 涯 上を 人 凡は なき線 に ゆ形 絵 る 瞬の 書 の表を 間 発 に 現 象を 過ぎ去 殆 混 ど合 **つ** の

いはぬや何 は が 。そして画が: 、創造 か画故詩 き込められる。 である。 や絵 なら \mathcal{O} 画 の具箱 手 ば 孤独となっ 孤 人 な ら去 画 り 家 を をに 一るこ 上 \mathcal{O} £ 描 止 2 理 た絵 が 最 たく む 由 と甚 初 な り ね を は き のばは 接独画だーな画触立家遠筆ら布 \sim

を 9 れたものではないから発する。. 7 11 手は自 いる。 妹 音 心れの 分 譜の る 関 な は 係い音は裡) 即 لح 刻 彼に t あ の凡 彼は の外生て思で命の 屡 るの外 現々

邪魔されない。する。無縁物の如何なる障壁に

去る。歌は歌い主の生命る。歌い手が去ると歌は楽と音楽家とは不可分なぬものをひょうげんする 去る。歌 ぬそはれもれ明ね を永久に結合し はれそ 明 ね の ぼ 意 のは は如何なる言葉も嘗てらかな意味に頼るの悪はならないからだ。 タサ ならな 思想 る。 いか て 全 いる。 体 らに何 表 生命と知る する。 だよ故現 つかの 美 と数に 要が表 てな 道 更に れ具 \mathcal{O} 解 に し な 音 得 い 楽 さ び消 であ ば 表 とえ

偉大な心な の歓喜そ は 形造 して そ この 云うこと 大な心なの 宇宙 られな 何の にの \mathcal{O} 等 歌 \mathcal{O} 手から あ から分れ Š を な 決 髆 \mathcal{O} とる る \mathcal{O} で ある 7 物かり にたれも 音を 終 。歌わ 送 そいり っな لح 手 7 い。決

るかし 不完全な 決定的 全さが であ るこ あ ならざ 無 \mathcal{O} る。 \mathcal{O} \mathcal{O} 限 音楽 中 な る る そ に ŧ, ŧ 於 \mathcal{O} 調 \mathcal{O} 子 は 反なは

そ れら大 を 引 は の宇 き 弾 宙 動和 にの す ば での 来 心 あ正 手 直 たかのちろ確 うな る ら如に 出 てな \mathcal{O} そ 味 真 5 音 れ を 言 っず 色

昨夜、暗黒をおほへる沈黙の中に私は独り立ち、永久の旋律の歌い手の声を聴いた。私は床に就いて、心の中にこんな考えを抱いて、心の中にこんな考えを抱いてまし私は無意識に過さうとも、生よし私は無意識に過さうとも、生かの頭がは星と歩を合わせつつ私の限れる肉体の幾百万となき生ける原子は弾き手の接触に震える竪琴の調子につれて振動するであろう。』

*183*182*181*180

の永続的歓喜*!82

であ

断定的 来な \mathcal{O} は Þ 行信 は そう ち得る物 に分類され 意を寄 用 したく思 日 神とは多く 列 では せ る 競 政治、 7 到達とは 同盟 0 な 争 自動車 に於 我々 を見るこ 7 戦争 玉 \mathcal{O} 如 だが 有 別

そ 々 \mathcal{O} とか 眞 えを 望 有 き蒐: 5 間 \mathcal{O} 更 を符 性 \mathcal{O} 霊 質 成 を う 絶 B 如 が え λ 神 を る 何 了 ざ ず 求 3 に 解 (ニテ \mathcal{O} を渇望する す 高価 と決 増 \emptyset 宿 カン よう る時 然違う りとも とす لح 日 努め 事 時 る で 抱

か新しいものを作ることでもない。特別のものを求むることでもなく、何裡に了解せよと教える時、それは何かが凡ての物を婆羅吸摩(ブラフマ)のぞれ故に優波尼沙土(ウバニシャド)

分自身 包ま が 与えられしもの 心に 「宇宙に存する凡ての物は神によ れ 宿す いるも \mathcal{O} のなるを知れ。 。な - な *183ら を何 ぬ富 でも享受せよ ^ \mathcal{O} 貪欲を 神に ょ 9 自

る。 何でもれ が 作 有物 唯 贈 存在する \mathcal{O} 主を 意 味 に 神 7 いること、 物なる 一真理 \mathcal{O} 0 は 解 何 \mathcal{O} そ を を L 及 で 汝 \mathcal{U} 現 る 汝 贈 \mathcal{O} 実在 7 \mathcal{O} 0 そ そ \mathcal{O} せ 中 に有 あ唯 れ所のる はみ

に あ るとは そこで 当たら る ラ は 朝 云 7 何 を求 光 を求 カン む を バ 所 \mathcal{O} を と云う ラ 物 7 開 食 間 を見 フ 他 ラ 料 題 7 ば な そこ きこ を 1) Ŋ 12 見出 到 に 走る 寧ろ と 光 で 所

ち得な ると云う であろう。 を 5 況 \ \ \ ば んや りこの忠告を真剣に考え得た何物も得られないのに放棄つう。何人も人間の持てる凡は、かかる戒めは絶対的に無 て代 それに対し何等 わ)べき何物, 完全に,且 完全 \otimes 理 てる凡 棄 無意 な カン 足 いすて 0

よ」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程である。
「は神を漸次獲得しる過程である。
「は神を漸次獲得しる過程ではなくて、は神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」と。かくブラフマによって絶対的には神を漸次獲得しる過程ではなくて、
」といるが表

サバニシャドに曰く「その的を完全に 対抜きし矢の如く、ブラフマに没入せ 対抜きし矢の如く、ブラフマに没入せ を調せれば」ならぬ。「凡てに滲透せる」と。かくブラフマによって絶対的に 思想や行動の凡てに於いて我々は神を であまらしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。我々の全行動に無限 であならしめよ。でいていることは、 であならしめよ。でいていても対的に との真理の して喜ばせよ。

なるのかの如くである、と云われもしそれで神は我々にとり無価値なるもの神は我々の到達し得ぬ彼方に在る。

は食は快楽である。何故かなられた遠くに我々の食の享受は凡ゆるりに来る時、食欲はその歓びのは、は、余地は一層広い。限界はずれた遠くに在る。我々の歌びの来る時、食欲はその歌びのない。な、余地は一層広い。限界はずれた遠くに在る。我々のからだ。然し食の享がれた遠くに在る。我々のかけれる。 う、に い 如 生 詩 る く 以 の 。 に 来 一 である。 的に であ 「は少しも空気がない。我々が食を摂い、飢えを満たす時、それは所有の完な行である。飢えが満たされぬ限りな行である。飢えが満たされぬ限りなけである。飢えが満たされぬ限りなけである。飢えが満たされぬ限りでに我々の食の享受は凡ゆる点で神でに我々の食の享受は凡ゆる点で神流たされるや、叩ってはない。我々が食を摂るからだ。然し食の享楽が、では、それは所有の完満たされるや、叩っている。 対 快 来貴女 に 獲得 り。然し私の眼は、めの顔の美を眺める愛人は恋人に語る て そ 百 لح 3 を 同 方 非実在物に不獲得 えかは叙い愛とい末ての誕情つに離てに

の我々の願望は特定額の金を得る願望をを明らかならしむる。富有たらんと求めているものは、眞に神であること、このことは我々が我々の快楽の中に

*187*186

限 \mathcal{O} 9 \mathcal{O} \mathcal{O} 梯子 限 K 界 神 劇 ・段を愚 に到達 を は λ 無制 < \mathcal{O} 触 Ł ŧ 空 する 限 増 過 で き試 ぎな 空しき試 やすことに り 11 み、 得ざる 享受は 1 有

得ら 上 我 「私は得ることに の も れる筈の ことから明ら Þ のを得 霊 の出来る物 の眞 λ 1 \mathcal{O} とする か は に で 9 囲ま あ 何 か は れた。 る。 に 我 在ること K 在 て霊 触れ \mathcal{O} 所 ま す は 有 7 叫 感 が物

存

する。

時 少 女 最高 はそれ と云う 在る 少女は 人間 \mathcal{O} から」と云う時 p 即ち少女が凡ゆる点で人形以上 「此等の 間 行為 助けになりましょうか。 生命がその人形より大きくなる 真理を披露 あ の霊 人魚を捨てるのである。 りも偉大なるを知る。 史 によって我々は自分が ると了解する時、 何等か 所である。 \mathcal{O} である。これは**が いた 深 夫が彼女に財産 しているのであ (モノ) は に縛り付 の物に る 霊は霊 の実在であること 私はそれ 処 ついて、 放放 一の裡に その 棄 我 在る 時に る 々 所有 \mathcal{O} 7 所 有 自 \mathcal{O} \mathcal{O}

の霊 「それなら此等の物を私は であろう。 す れ 」と答えた時、 俗的所有物に於いて富ま \mathcal{O} ですか 質は 」夫が「此 私にと どうした 彼女は直 9 等 らよ ちに 7 す \mathcal{O}

ある。 が此等 いので に と云う てであることを了解する。 於ける進歩は一聯 を了解し、人 ことを知り、 であるかを了 大きくなることに かくして人間 \mathcal{O} つき最早 そ 間 り遙 の永遠 が ょ 束 カン の自己放 り、 はそ 縛 等 の生命 か そ 眞 間 所 棄 所 自 有 を 自 \mathcal{O} 途上 分 感 間 物 る 分 あ \mathcal{O} ょ \mathcal{O} \mathcal{O} は しに 霊 り る な 所何 で

そ してこの経ずい。それは7 ある。 々に於 で十 ぬことを経 ぬと云うこ は空を飛ぶ事 の生活 我々は絶対的に無限存在 を出 翼は 分で 籠 11 あ て 空 そ な 決 は経験され 験は至福 とは単な 鳥を空 Ź そ \mathcal{O} 知 7 なも る知的 あ 空 翼 ね そこに鳥 7 る。 は 無きを経 の羽 ばならな 又は 12 の彼 1 \$ のであ ー *187 を 所 方 命 ばたきの 0 ただ必 題 て の歓喜が 必要 運 験 る で有 は 1 7 それ な てる いる。 び は Ĺ \mathcal{O} 要 鳥 そ な

ことを毎瞬時感じね が 高 ばならぬ 成 飛 最 就 翔

全執著、める。こ を人間 彼祭凡 全て を 理 捨 想 慘 が 偉大 自 であ の分 間 7 は てへへ 間が見出す るから解っ 、眞に、 ŧ な \mathcal{O} 彼 の永続的幸福 等 生命をも含め 国家 自 \mathcal{O} ことに在る。 人間 人間 は を手放すことを容易 片放し得るら 八間をそので ふや人類やご す迄は の個 与え 与えざるを がし得る或る大な でその所有物に の持てる全ての あ 自分自 ることを見 人的生命よ 我 きこの せ そ 何物 捨 機 々 々 人間 て、 神 会を 大理スの に \mathcal{O} \mathcal{O} 理想 りも偉 椀 我 その 理 か なる に対するの物を一 ŋ 想を代 想 を 々 存 々 自身 大な と 即 在 持 で す する 5 持 は 理 5 大 る 7 悲 想 れる す 表 度 要

間 間 をが 7 考しない ば なる ら最 得久 な £ たに人 恐ろ 人間 11 な ら間 しばが未 あ ろい

物所ら と カュ れ 5 有 に る 来 飢 7 物 7 え て な る いる。いるの何 間 物 決かの 成 物 玉 在 そ る が は有 毎 き いは 瞬 姿は 決 時 る 心 何て得 を لح

いのる。所事 域 た に め はに 生きる そ 所有 が 於 \mathcal{O} 物 衣 所 間 を を た 拡大本 12 \otimes 食 \Diamond することに 7 物 で 5 い限 7 あ 自 う をる る。界 0 そ 自然 忙 で は で 殺 を さ 物 はの れは を \mathcal{O} 取 てそ 得 領 間界

我

々

 \mathcal{O}

存

在

 \mathcal{O}

有

 \mathcal{O}

は

常 我々はる特定 であ 有 そこの の要求 利益 部 と云う 12 に我 々 そこで と云 度迄 みの 間 \mathcal{O} 々 **о** á 4 2 でする。 る。 であ あ 求 適合する カゝ 食 ウ 物 要 < り 7 物 が 度迄 家対 \mathcal{O} たとをばれてる関係がよる関係 る そ 飲 ら分 7 そ は 物 る てで

向 が限 本 向 ることで ず 2 7 なの る 支 自 配 由 々 なは لح \mathcal{O} 止 歓 存

*188

より多くを持つことではな ならん」**と。これ即ち成ることであり って眞となる。 (ブラフマ で 7 それ故に優波尼沙土(ウバ ての意味を汝が知れば、嵩を増さ 言語は思想と一に成ることによ 領域は渾一の領域であ)と一に」なる 「人若し神を知らねば眞と \mathcal{O} であ ニシ 言語は る る

西洋は 全たれ キリス こ の たが 意をも神 宣言し、 ある様に思われる。 西洋は、 それは、 · と 勤 対的超験 人間が神に の思想とは決 聖冒涜 教国に於 且. めた人をその 我れ神と一なり つその追従者に \mathcal{O} の思想は 成ると 々は神と渾 1 一端とし て普 て 師とし 確 \mathcal{O} 及 *190 て咎 如 致 神 と大 \mathcal{O} 思 8) な 胆 δ_{\circ} る合 く完 か りと 0 に ŧ で 8

とを主張する。 ては神とますます \mathcal{O} 」することが 神を何等か 東洋 0 の最高 なる自然界に って成長 世界では \mathcal{O} 一とな 々 \mathcal{O} 間 別 叡 が いする。 即ち結 物を得 智 ケ \mathcal{O} \mathcal{O} る 12 質 於 我 は 上 Þ 質的 ک 分 る を得 部 合 渾 ことは 得 目的 我 であ す るこ る凡 るこ 々 $\sum_{}$

近関 り起きるに非ずして,我 ら生ずる。 原理である神と それ 々 が 何 \mathcal{O} 霊 \mathcal{O} Þ \mathcal{O} 中 必 \mathcal{O} に

である。 出来ない と呼び る。 もない 存在は、 供し得るが 完全を了解することを何とも期待 霊との間に 的を持ち乍ら、 ぬならば無意味である。 ひから尻込みしてはならない い得るや。 し得ぬならば、 7 さうだ、 とにか とならねばならぬ。我々 相違を幻覚と呼び、若し 或 然しブラフ 若し我々がそこに在 く相違はあ 何 は何ん 相違を の相違もな Þ それ それ は 相違あるは」 は全く にどう か名称を与えよう マと我 300 明し尽すこと 幻 いと然 若し 何 Þ 明白 我 は 5 個 目的 Þ ば ラ は であ 人的 到 が 高 々 云 達 目 で \mathcal{O} \mathcal{O} 誓

る。 なる 眞に成るべきであ 我 てしなき行進を続けさす真と美と ること」との は完全と云う無限 々 の源がある。 ブラフマ は眞の我 そしてこの神秘 べきである。 間には愛の永遠の 々 婆羅 では この「あること」と「な り、 \mathcal{O} な 吸摩 の深所に創造 理想である 常にブラフ 1 表示 々 は常に 0 があ \mathcal{O} そ 7 に

それは空しき僭越ではない。それは真確信、即ち「余は海となるべし」が響く。 急端の音楽の中に、歓喜に満ちた

11 完 さ は 存 在 \mathcal{O} \mathcal{O} 完 全頁

森とも を運 はれ的 別 ほに 河 ŧ 関 は 永く な \mathcal{O} 此 等 れ でくを持 様 等 其 な 等 \mathcal{O} 々 等 を清 方法 のに や森 過ぎな 間 そ \Diamond が が れを で 養 低 奉 は 野 1 1) や付出 **\ 徊 と唯 そ 来 所 る 町 う 部 産 7

な の動 河 でき、海 ルの途に は の途に は り れ と親 に き は 少な に横 近 生を必ず得 達 た しわ 持 てる t る 幾 得 2 運 千 て大事 洋 る 物 \mathcal{O} は 大 海 そ

大流々 体広出自 洋れはのい来体 水面を取れない。若にの重要な知 には直一 ち部にと 未 依 だ 然 とな そ そ 部分とすること 息 り と主張 を求 が 然らざるを知る 境界を設定 る。 8 \mathcal{O} すそ つつあるを知 る らば 海 ざ河 河 る るの我 自 て河 カン

のうーマく そ 如 のく同 様 触 位 れ点 ブに の々方 終 ラ 我 \mathcal{O} 動にそれずれ フ々 いブラ 点マ 霊 か 於な は 5 7 \ \ り 河 得る こと が海 を 離 7 本 け 離 れ とな はれ のみ。 他 休 出 動 \mathcal{O} 凡ての霊は ブい 運 な ラ 7 云いフ 行

無目的に性急にない。を見るのみならば、いいの休息を見ずりならば、 動を意義深っ むことはいの滲透せる し我々限 りな心く、 霊 若依そ < 0 の進歩も完全な詩! 的 をを投 透せる 詩 が 続 て光 で 如 がその行 何 がそ思 詩 のみならば < ならば、 に 全 想を持 び了 · 美 \mathcal{O} くとも 突進 解さ 思想を表白 有意義 を 7 喜 そ る 即 0 にれのの れ 生存 部 す 7 \mathcal{O} 7 Ź とな 満 る 4 は 如 分 す 5 や凡 る きも 結 12 々 کے は 唯 1々連絡なき る 局退屈と なる。 る て々 全体 t とな て \mathcal{O} のそ 我 で は \mathcal{O} ある る。 の 行 光 な 々 7 す き か若 \mathcal{O} な

業念に向 々には 目も た 先 ット < 子 記号 供 掴 カン 来 生 見える。 文典 \mathcal{O} 々 \mathcal{O} 」数え て続 日 あ で 時 全部 書 なけたか、世界、ア ったことを思 的 る 合宣 を 我 いみで、 た 々 記 Ĺ 息 者 そ 3 我 意 もこ々 う せ 此 1 では続 サ 出 9 のか我〇 す。 け 活せ々かた 常ス 明 あ休 動ぬのの 平が活課概何 る

*193*192*191

暴虐 を失う の歓 マそ 此等 の思想により調節され 云うこと、 \mathcal{O} の凡ての創造は完全 9 < これは我 喜である。 つあり、 て霊は として捧 に成長しつずけなければ に 7 \mathcal{O} 形を一歩毎にその旋律 此 \mathcal{O} する永久 ょ る。 運動は絶えず完全 等 身振 々 の運動が創造し 霊 そ 0 一の凡て それと一になり の音楽に ね 12 真似 に自 婆羅 \mathcal{O} 耳を藉 し続け 真 は 7 Þ \mathcal{O} 吸摩 一の音楽 動 \ \ はこの 12 る と想像で (ブラ さぬ と云うこ なら 2 7 の無情な げい り、 つあ 且. \mathcal{O} 成 12 る 9 9 長 る。 フ す り 0 知識であり、知識であり、としブラフマ 識 合 に よ か か る知識 ぎず 特質 力は り知 しつ ブラ 知 識 知ることだか 道 る 7 消 具 ら我 9 は フ 部 は を 分 り、それ 息を伝 割 で は 7 7 分部分に 部 の言葉で説明さ され 々を離 愛 分的である べての の対 に婆羅 り て帰 は ブ へ得る 7 分類され、 ラ ぜ 単

フ

マ

識

た 部

り

で

ある。

カュ

5

る

分を然

て得

る物に

に

我々

 \mathcal{O}

に過

且一部

これ我

々

の智

恐怖

から免

れ

るに よ

る歓

喜

吸摩

デ

ラフ

マ

7

9

て来る

思わず」*と。とは思わず。 とは思わず。 べき言がある。 優波尼沙土(ウバニシ 若し 或い 「余は神を長く は余 くは余は神を は 神 ヤ を知 知れ 知に注 らずと り ŋ

7 り得 得ぬ 過程 彼方 対 である。 的 乍ら に 9 無で 在 7 若 る は あ な 我 々 る らば は 神 々 が 神 は を 神 我 全 知 を < 々 我

ことは優波尼沙土 (ウバニ ヤ

葉も 心は と 同 に浸 ラフ め 我 Þ 知 そ 決 ブ U そ か 7 ラ は唯我 であ れ 刻 的 \mathcal{O} て に は マを決 ブラフ ウバ ŋ であ の歓 我 々自身 ブラ \mathcal{O} 喜に = より 5 \mathcal{O} り シャド フ 霊 して模写し得な れ らだ 7 象 歓 によ لح ょ 我 歓 を知り得ない 何等 を 喜 7 々 即 の自我を知ること 7 一層然りである。 知る。 置 と関 の全存在 り、 喜 ち換言すれば、 に Ž に り、 ょ が云う如く、 の疑 知 \mathcal{O} は完全な形 力 全存 り、 の愛によ かかるかかるか は かる知 知る い。 *₁₉₃言 る ħ ょ \mathcal{O} ょ

/マには過不足は有り得ない。 ない。ブラフマは絶対一であり、ブラスい。我々は段段にブラフマに成長し得るなる完全には何等の等級はあり得なな然し如何にしてそうなり得るか。無し然し如何にしてそうなり得るか。無し

が 関係 て 我 トマン)*に宿れる最高まことに我々の個人的で が ŧ 々 に どうして我々はそ \Diamond t 力を籍そう。)『の了解は絶対的完成 7 である。 と考える。 し得よう、 我々の限られた力 我々の自製に 了解の 我々はこ 若し 人的霊 又 我 か どうしてそれ 斬 の霊 かるも 新的 \mathcal{O} を眞なるも 々 P タラ を非 ラ \mathcal{O} 9 $\frac{1}{\sqrt{1}}$ な 7 7

そう 家に にラ の 示 \mathcal{O} \mathcal{O} 隠され 霊 ニシ 即ち意識 って 々は時空が ヤドは に完成され トマン)*196 るブラフ (パラ 中に没入される いることを知ら \mathcal{O} 日く、 支配 7 空たる霊 7 を止 即ち眞 高 7 永久 所を \Diamond

る *197 と。 なる者を知れる人は と融 合 てを意 7 願望 全 識 \mathcal{O} 全目 せ てを知れ るも 的 を享受す る ブラ

九三頁

る。 名状 るも よう はな 式に 霊は 他 高 れ 我 永 余 歓 々 なるものは、 \mathcal{O} *203 \(\tilde{\chi}\) る。そ これ 宝である。 の最奥の 結婚式 の表示 ラム) なき時の中で成し遂げ 喜である。 のな は 合 中に の最高 々 の如くならしめよ。 い者たるエーシャ 進化が式部官 なるものの最高 *は述べられる。 のる。」*これ最高の受いは他のこれなるもの 即 刻 得られた最高 (ラー) これなるものは他 ラー)*が、 逃げ 存在 なるも の歓喜である。 のなる霊を自ら花嫁 」*「このこれなるものの、他のこれなるものの の存在は、 の中にある。 5 のとしか云 進行 \mathcal{T} の役をす フ200は、 **,** \ 。 他のこれ \mathcal{O} られ の愛 な詩 住家であ て 「このこ る余 句 た 最高 のこ 結 の最 表 処 5 地 IJ 8 は 7

在は永久の休息であり、完成であり、この一端に於いて絶えず大洋に達せんとらかである。霊の花嫁は河の如く、そらかである。霊の花嫁は河の如く、そといっかである。霊の花嫁は河の如く、そとれる。霊の花嫁がこのことをよく了と

主人と知 が の家庭だ 変化と 両端 る時 は と知 る権 であ そ 可 る 利 ことを \mathcal{O} に 時に であ 宇宙 0 る。 知る。 て、 附 \mathcal{O} 1 その時に 主を自分 7 宇宙を自分 霊 いること の花嫁 彼 \mathcal{O}

それ

は

間断なき運動

心配、 微笑裡に 女 の全奉 苦 彼 仕 難 女 は 愛 の奉仕 \mathcal{O} 愛 となり、 5 の力を立証 贈 り物をか 人生の 5

面紗(ベール)をかかげず、愛人を認る。然し彼女が頑固に闇の中に止まり、得べく意気揚々と負われる試練と現れ

めず、 余り泣く。 苦労 く。 -*206 苦労 霊の 一嫁は. 7 世界を知る 君臨 恐 である 怖 飢 カ 得る此 ら恐怖 か ら飢

祭に集える 渡船夫よ 嘗て聞 群衆 11 向こう岸 た 歌 \mathcal{O} 喧 \mathcal{O} 噪 \sim -節 渡 \mathcal{O} É を 只

挽 叫 Þ き び が 聞 車を こえる。 \mathcal{O} 駆 り 踏 0 \mathcal{O} 中 印度では、 つ「渡され で「 渡さ れよ」 二輪

了 | かつと「渡されよ」と歌う。 | 歌う。巡回食料承屋はお客に承物を分

れじゃ る。 る 他 我 7 飽きた子供 は か。 我 この \mathcal{O} そし 苦労し な Þ 目的を達し 叫 いと感じる。 て我 目 \mathcal{U} の様に て、 何 これじ 々は か に 何 · 到達 を意 我 我々 な 我 々 何 やな は そし 味す Þ 処に向かう岸 目的 7 ` . 目的 て は る。 我 叫ぶ。 کی 来たらず、 々 は努力 人形に 到 達 が 感

れなが るも \mathcal{O} ることな 何 カン それ 今居る 我 \mathcal{O} か と違 即ち人生 は 々 のか。 処と違 う何 全て か々 持 ·う 全 仕 カン 0 責 何 な 任か 処 \mathcal{O} 我い から カン カ K な 解除され それ 持 \mathcal{O} か 9 て そ 我 11 う

祈 決 で \mathcal{O} に我 して怠らない。 11 を発 我々は や ようと我々は Þ の目的 我々 口に、 7 つも は を求 自 己 渡 \otimes 我 河 \mathcal{O} を 活 7 0 々 2 求 動 \mathcal{O} あ 多忙な手 らうと云 \Diamond \mathcal{O} る る 心 そ そ \mathcal{O} 何 う は れ 処 ŧ)

絶え 彼岸 ある。 彼岸は まことに ず 宿 致されることを期してい 遠 汝 彼岸 に を私 \mathcal{O} 岸 汝歓 全感を失い、 自身 7 れ 喜 7 汝 叫 NO \mathcal{O} で る £ あ の愛に 大 洋 ŋ そして と云う時 於 々 同 る。いて の彼 \mathcal{O} 岸 私 7 完の はの で

*206

ある。 ざる限 きつ 得ぬ はな そのままで居り、 続けよう。そしてこの私 れよ」と。この私のものなる家が汝 ぶであろう。「渡船人よ、 「我」が「私の仕事のすべては汝のも とされる時、その瞬間に揮 ŋ \mathcal{O} つある。 利得を得んとして 此 この「我」は他を傷 の「我」の腕 囲める間と雖も し得ぬ利得、 渡して呉れよ」と叫ぶ 」と云い得るや否や、 り、 の「我」は休みなし。その であろう。 のなるこの「我」 万人のために存するも れる家を求 の私の苦痛 この家を汝 の中に 唯こ それが持ち、 その時迄私 の「我」 つけ、 この家は渡され 握らんと努力 私を渡 この「我」は の心は常に い壁が家を て日夜 凡ゆる物 は藻掻 は渡さ 傷 精神 保留 働 ع 家 き \mathcal{O} *184 0

と — を止 汝なき私 到 汝 私 何 り 変えられ の家とされ に . 処で汝 が私 得ざるべし。 処で汝と一緒に 汝 は無である。 ば、 な に住 り得ざる の家を去れ 私は汝 に会い得 たるこの む故 たるこの 若 ベ \mathcal{O} ば な 私 仕事に於 ようぞ。 私が 0 私 る の仕 り得よう 汝 の家に 私 事 は 私 汝 ぞ。 非ず 7 \mathcal{O} 住 汝 事 家 ず

只中に於いて、「渡されよ」との祈りがそれ故に我々の家、我々の仕事の真

起る。 遠 7 \mathcal{O} 処にと雖 1 贈 る 他 り物 \mathcal{O} 何 \mathcal{O} が 岸 処 あるためだ。 到 に が 達 あ る。 なく、 海 せらるることを待 が波巻き, そうだ遠方にな 此処にこの永 そして 0

九五

頁

本分終了

訳註(其の一)

① Upanishad 訳注」(其の二)

頭略伝参照 ② Devendranath Tagore のこと。巻

主シ 世紀 タマ 郡カピラワ だか 7 ユッツ Y 5 \mathcal{O} ここで云う仏 万 は通 7 - 葉に な聖者達に 陀と云う像 スト な太子たるべき彼 妥当するも その氏族の ウ (悉達多) 喬多摩) キア族 陀と 夫人を母として生ま (浄飯) (迦民羅衛 対する尊 り得る 固有 は存 は ウ (釈 無論世紀前 王 ガ ツ を以 王を父とし 迦族 城) ことであ て苦行 である では \mathcal{O} ウ \mathcal{O}

はれ 可 最い とな 註 \mathcal{O} て沙 カ 去 る ほ三週間静修し、 頃とされる と云はる彼は 世間に教ふべきやを熟慮 智を得た。 日目 して世を終わろうとしたが梵天の (沙羅 (其の二) べさせ り すすめに 0 西方 」ととなえた。 9 樹 た。 彼 、す)。 双樹 に 五年 な 五. 力 人の比丘 の成道を期 病を得 「煩法恙己断。 大涅 の星霜を りそれ 更不復受生。 陀 自己内証 玉 \mathcal{O} 正覚を得た仏 を止 を北 遊 7 ガラ に法を説 急性 憩 野苑 方 て共に修 た。 布教 の法を弘 漏皆空け 是名盡 ガヤ 彼は 陀 \mathcal{O} を 業 0 切な は 1 ر 苦 を を 尚 ラ 0

4 四一頁以下を参照あれ)による行 行業、或業、祭事等を凡て Yoga 婆羅門教では禅定 般にヨー の諸義を包合し訳 わざおこなひ、 ガと云う。 いとな Karma とは (訳註其 ガは広 同 の 二 に ま 行 つ意 精 を \mathcal{O} 味

の方法に名付けられた名

称

学派あ

の教義を有

す

る

れる。 日 日 É ガ け (ヨ 1 ガ学派) 実修 これは特殊 ガ Í, (実際的 編 意 の用法である。 り、 の作為をヨー では業を霊魂に 修業) 根本聖典 とや くさ ガと

輸廻 全な 作 力を使用 と栄光を いうべ \mathcal{O} では 神 到 5 7 7 \mathcal{O} ギ 達 託 相 発 て 自己 を す 対界を超絶 日 現するため これ の業を自ら 自 せ 極 は 訳註 が業 我は完 ここに 動 す 8 \mathcal{O} 力 無 其 12 た n 全 の 二 、 法 享受しつ 動 幾生を距 自 ば 則であ 求を の善 に 色 己 支配 なき最高 五頁以 の活動 る。 ててて 純潔 を完 0

- 意、 訳される。 有する。 中性で、 (5) Der 又 Sadhana は男性、女性(i or Accomplishment Performance weg 又 ledingstsai-ght 「実修」(ゆ伽 zur Vollendung to agoal \mathcal{O} 実修) の意を 或 a) \mathcal{O}
- 学」(弘文堂)教養文庫) 色等概観には高 想とする極め 6 った.尚、 ギリシ ギリシ t て小規模な都 ヤ 山岩男氏著「分化類 文明、 市国家は が格好 西洋 市 文明 国家であ り。 を理 \mathcal{O}
- 周明「米英東亜侵略史」(第一)書房印度に対するこの摘要については,大川の方に対するこの摘要については,大川の Durde and Rule 英国の植民地

り。 を分裂せ り。 をし に 下に唱えること」の 面白 て互 ここでは勿論第二の意味 L 8) あ 分立抵抗せしめて覇を天 て以て天下を治める」「敵 両義を有するも の場合 「小党 九七頁 \mathcal{O}

⊗ 西紀前二○○○年頃のこと。詳し

れよ。 著「大東亜の気候」(朝日新選著) を見らあろう。尚、気候について、荒川秀俊本的な視野を我々に与えてくれるのでの 和辻哲郎著「風土」(岩波)はより根

す。 万物が根本的に一なることを指

式に誦する歌。 ン族 12 行する清祓 の家に Gayatri 三、 の儀式 て、 ガ 六二、 吠陀 胎 中、 0 ょ 最も大 摘 リ神歌 り成婚迄随 要な 切 ŋ な T 時 入法 IJ 執 T

ガンジス る。 参照) \bigcirc ン高原、 べき姿を示 バ とに 湖 7 ラ で Y 泂 至 法 る間 ヒン だけを挙げ タ ヒ (訳註) 印 ズス 7 あ ラ 度 \mathcal{O} 地 Y に n が挙げら を超え、 タン 其 玉 的 るが 5 Y 三二頁 デ 方と ツカ イラ あ 7 ハ

て尚 巡 (五七三一 である。 ラ の首位は何と云 と呼ば くは、 四〇頁) それ は福地 れて 井原徹 を見られよ。 いる。 (ダル っても、 山著「印度教」 これ 7 0 セ

故事を想像されよ。 ⑭ ネロ皇帝 (三七一六八・Nero)の

れには、 占有。 た混 も夫 リカ 発展史」(名原・高木訳) オラ 民 発見さらるる を Max 発展 と云 発展 然たるも リス 々 葡 日 Unitetes それ 発見。 植 B Region Harrand ,"The Development of the Parrand ,"The Development のである。これを表現している。 これを表現している。 (83) 「アメリカ が が 口 主目的 四九二年 ス · 通 説 相に \mathcal{O} ユ 工 である。 ダヤ人と黒人 である。 殆ど凡 ついては、少し古 される。 コ に 黒等なり。 恒 があり参照に ては商業的の デ 尚、 Development \mathcal{O} とを混 ア メリ 史上 ٢ 等 ス 11

れる霊感詩人。) る七聖賢の一人。(吠陀の作者と称せら⑯ Riahi 聖者。梵天の心より生まれた

(E) Samprapyainam rishayo jnanatriptah

Kritatmano vitaragah pracantah te sarvagam sarvatah prapya dhirah Yuktatmanah sarvamevavicanti

(1) 見よ。

Pracantah

S Yukttatmanah

② マタイ伝 第十九章二十四。

② (①) を見よ。

り。 学) ウパ のラテ 世 度思想を ることは注意す hightharpoondown \(\text{K/R/E/von}\) (F/W/J・vonSchelling/77-854)ることは注意すべし。他に ったことは否定し得ぬ。 の自然哲学が印度哲学 - テ (J/W//von 7 ショ 8 \mathcal{O} 8 味読 ニシャッドの影響を受け ウ 厭世哲学が(厭世的な意志 せ 1 8 6 プネカット」によ べし。 りと Hartmaann/ Goethe/49 ハウアー 0 はウパ に親近性を有 (Sohopenhauer る。 183**2**842 ョウ 西洋近 等1906八 7 哲 印 ハ

3 24 な 重要な神 十頁を見よ。 と 0 Brahuma·梵天、 只表裏関係に過ぎぬ $\begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 2 \end{pmatrix}$ *(*) 尚、 種なり。 を身よ。 梵と梵天と 創造神 訳註其 \mathcal{O} ∅–。 印 区別は 度教 $\widehat{1}$ \mathcal{O}

⑤ Icavasyamidam sarvam yat kincha jagatyan jagat

namonamah

S namonamah namas \land (bow salution) nams in compound for namas

南無、帰命、礼拝の意。

- aditya vedahametam 28 Crinvantu ye varnam divya vicve purusham tamasah dhamani amritasya parastat mahantam tasthuh putra
- ② (3) を見よ
- Brahma vihara (144) (147)
- 園 Yacchayamasminnakace tejomayomritamayah purushah sarvanubhuh (24)を参照。
- Yacchayamasminnatmani tejomayomritmamayah purusha saruanubhuh
- ③ Tyaktena bhunjithah Ma gridhah 二五頁参照。
- 詩。聖婆伽梵歌。 歌註其の二、五十五頁以下を見よ。聖 歌記其の二、五十五頁以下を見よ。聖
- Iha chet auedit atha sutyamasti satyamasti nachit iha avedit mahati

プロローグ

vinashtih 尚39頁を見よ。

九九頁

- Blruteshu bhuteshu vichintya
- Yasya chhayamritam yasya mrityuh
- mrityuh spruno mrityuh
- Namo astu ayate namo astu parayate Prane ha bhutam bhavyancha
- Sarvayapisa bhagavan tasmat sarvagatah civah
- (4) Prano virat
- "Qrigin 43 有名なり.岩波文庫に翻訳あり。 な著書あり。 思想文庫に小泉舟氏 玉 に対する誤った考えを精算されよ。 \mathcal{O} 博物学者にして進化論の始唱舎 Charles of Robert Species 参照してダーブイン学説 の注目すべき有益 Dauoin (80-82) 英 (種の起源) 尚、 同 は
- 人に対する尊称に用ふ。 Mahatma 大我の意。又、偉大な
- Na va putrasya kumaya priyo bhavati atmanastu kamaya putrah priyo bhavuti

- 我 46 Paramatma 最上我• 大我 · 至 上
- **47**) タ 1 伝 第五章 本 381 頁参照。
- り。 呼方と云うべし。 48 Sadhu 聖人 Simha • 仏陀の弟子に対する Sadhu piouo
- *の* 二、 49 Auidya 42 頁以下に説く所見られよ。 無智 無明 訳註 其
- 50 Bodhi 菩堤。 正覚。
- 51 例えば、 封建制度等を云う。
- 52 渾 理想実現のこと。
- 53 Tamevaikam janaiha atmanam
- 54 Amritasyaisha setuh
- ahirah sukham 55 Ekam tam tesham cacvatam atmastham rupam netaresham bahudhayah yeanupacyanti karoti
- etad 56 sada Esha viduramritaste jananam devo vishvakarma manasabrklripto bhavanti mahatma ya
- 」と云われる工巧、 面に腕あり 57 Vishvakarma 毗首 建築の か 神。 つ磨。 造一 \neg
- 力 ルマン賛歌。 吠陀・十巻八 一章一一七 ギ 切者。 シ

- 58 Aviravirmayedhi
- mukham 59 Ruda tena yat maur te pahi dakshinam nityam
- deity ヌ) 神の り、 悪疫の る性質 られ等後世に」 60 アタルブア吠陀に 吠陀には三四 体 名を以て、 印度教に於いては、 躯は褐色、 神と並び最高 Rudra の神。 なるも,healig 害悪を人格化せるもの。 嵐 魯 の賛歌あるのみであるが、 達羅 なるにつれ 類は青く、 の破壊力、 なると最高神と認め の神格とな イシ power 神。 ュヌ その destraoying て有力とな 頗る凶暴な 又は痛痒 をも有す。 別名シブ 0 7 リグ・ . る。
- jyotirgamaya 61 Asatoma mrityorma sadgamaya tamasoma
- parasuva 62 Vishvanideva savitar duratani
- parasuva 63 Vishvani (62) deva savitar duritani
- 以下を見よ。 bhadrm tanna asuva 146 頁
- 65 マタイ伝第五章六
- Nanah cankarayacha 66 Namah civataraya sambhavaya cha Namah
- 67 Avih manifesting God ·
- 〇〇頁

68 Aviravirmayedhi

69 70 を見よ。

要 71 す る。 \ , るに 創 創 と云 人間 は 的 何 な 制 偉 り不 作 大 完全な な働きとは云 \mathcal{O} 延長に過ぎな \mathcal{O} え、

悪は に善 哲 \mathcal{O} 最高 非存 は クラテ 乏 在 である.存在するも である。 は考えるべし。 恵であ をは 世に これがギリシャ った。 悪はない ギリシ 悪は と云う。 \mathcal{O} は善だ 要する ヤ \mathcal{O}

73 善を云う。 (本文11 0 頁参照)

74 万物と融合せんとの 心願なり。

繙とかれよ。 「クリントン り筑摩書房よりでている。 得る所多し。 グスチヌスの「ソリロキア」を一読あ 75 真理なり。 邦訳は、 辯明」 真理に (岩波文庫) 髙桑純夫し つき、 ソクラテ をも 12 ょ ウ ス

76 の自己欲望の 満足を云う。

77 註 (34)を見よ。

78 Karma Yoga 註 $\widehat{4}$ を見よ。

79 Buddha 註 $\widehat{3}$ を見よ。

81 宇宙を自己 の手足の如 くに遣うよ

うになること。

81 牢獄を想像され

位置を占める \mathcal{O} 完全に奉仕する時 に 本当

に於ける善悪® 旧訳聖書 ある意也。 想像されよ 創 悪魔 の知恵の木の実」の 世記 \mathcal{O} Π 誘惑を受け ・「エデ ン た 故 \mathcal{O} 事 花 で を 袁

84 之を例えれ ば、 原始宗教 印 教

新興 の諸宗教 • ・ク教等。

涅槃と音訳す。 り 一 加さえ、 った。 転じ いかく 意味となり、 所を見られよ。 れる大乗 積極性が高揚され、 The て副楽歓喜の状態を示す。 読されよ。 L Way て得た寂静安穏の境地。 人間が情欲の火を吹き消し覆 de 教 っパ に至っ 又「覆う」と云う別儀も添 尚本分10頁。 to la 吹 尚訳註其 リ語で Vallee く」から「吹き消す」 Nirvana" てか その大用が らのことで の二仏 ponssin Nibbana) (邦訳 ?発揮さ 涅槃の 更に

 \mathcal{O} 87 を云う。 布と云う調和 系は各「自我」を指す。 \mathcal{O} ある全体を 形作

88 註 (49) を見られよ。

(89)(90) (88) 12 同

る。 91 その伝義は極 dharma 達磨と音訳す。 \Diamond て多面的 法と であ る。

ぼ

む基

礎

7

7

教説を通俗

エ

阿育帝

日

カ)

て自家薬籠中

の も

のとし

Ť

の三大目的

とされ

佛陀もこれ

す。 り方、 種族法、 承等の習例」「不文法」「汎種族法」「バラ 姓の 務」「理想」 もの倫理的義務、 印度教の法は「吠陀のリタ」「人倫的 物が存在するあり方、 物の解を生ぜしめると解され 性を保持し 心理的差別」「起動 モン婆羅門優越保持の規定」「個人法、 の法」等に分類し、 対者と同じもの 業などの神聖な規律 起源 」「現実と理想とお媒介 本性とはここから出る。 あるべき姿の我にて、 (dhr) 種姓法 (四姓の状態等) 職務 て改変せず、 と云う伝源より出 の単に見らるる社会的 (宇宙の理法) 徳」「善行」「宗教的 業と信愛もダル (迷) と遮減 存在 (マヌ 規範とな \mathcal{O} 「習慣 (副次的種 契機を指 一般存 神 」「因果 物 (悟) な のあ 7 0 に 自 五. る 在

す。 は有名なことである。 93 92

「種子」と共に本性

(ダ

ル

マ

を指

(91)を見よ

94 を見よ。

96 95 (34)を見よ。

Svabhaviki

jnana

bala

kriyacha

anandamprayantyabhisamvicanti (97 (140) ・尚 jayante, anandena 171 Anandadhyeva khalvimani jatani jivanti bhutani 138

後に之 精神統一。 98 yaga 註 $\widehat{4}$ に説 所を見よ。

佛教

では最初佛陀

の教説は法

と呼ば

の規範は経と呼ばれたが

は律となり、

法は経と呼ばれ

中

に

対する研究が論と呼ばれ

含まれるとする

人もある。

三八七頁を参照。

覚 99 • maya 絵姿等を意味す。 幻 力。 後に 迷想 迷妄• 幻

Abel の故事を想われよ。 100 旧約聖書創世記第 几 章 • Cain 2

佛陀依然から印度民族

0

人生観にとっ

ては重要な

で

性的快楽、

財宝と共

が又法と呼ばれ

覚証

的

り方を示す

論

の三藏が

成立

そし

て全体

とな

0

然しダ

マと云う語は

 $\widehat{1}^{101}$ 4 1 Anandarupamamritam 照。 yadvibhati

101 愛 \mathcal{O} 中に浸らすことなり。

102 (Soma)を搾った液汁で、 7 なるものがあり、 Amritam リグ吠陀 これ の中の は 神格に 一種 水 \mathcal{O} Ŕ 植

となり、 れる。 う訳が由来する次第なり。 と同 飲んだ故とさる。 とせられ、 興奮させる力がある故疫病を治 牛乳を混 する興奮剤である。 ったと云わ (甘露) と云う.不滅の 霊液と云ふやうな空想的 \mathcal{O} 神々 二八七頁。 視され又、 又 神 々が不老不死 れて 層勢力を増すも 更に不死 7 いる。 月から は人を陽 $\mathcal{O}_{\mathbf{k}}$ 酎に 今日); 永久 7 これを 気 霊薬と $\frac{4}{2}$ とか云 Amrita ラ 5

103 本当の生命と似而非生命なり。

104 聖者等を云う。

得たいとか云うことを云う。 自我を絶滅したいとか神と深一を

106 bodhi (50)を見よ。

由を云う。 本当の自由と似而非自

108 satyam 真実・実有・実在。

生まれいでぬ前より我は在るなり。」ことに誠に汝等に告ぐ、アブラハムの10 新約聖書ヨハネ伝第八章五八。「ま

110神を云う。

11 Mukti liberatirn 訳註其の二、二七

☆ を見よ。 □ □ □ □ □ 以下佛教の項ョ 頁、三○頁以下。四○頁以下佛教の項

一〇三頁

mind tranquility peace of

1 civam • welfare prasperity blise

11 advaita · destitute of duality identity of Brahma or

of the Paramatman or supreme saril

又は with the human soul

ultirnate truih identtity

of spirit

and matter

ならぬ 対者 個人主義的 尚ここの個我は生命我 の前に \mathcal{O} である。 平等 個人我を云うの 如たる生命体 \mathcal{O} でなく ことにし ほ か 絶

114 利己心を消すことを云う。

115 神の精神なり。

116 生命なり。

117 生死の波なり。

118 生命の海は静寂なり。

を続けている意味。 119 宇宙創造の日と同じに今日も創造

来 120 て ر 11 の宇宙 る音楽と云う は 神 \mathcal{O} 声その ₽ そ \mathcal{O} \mathcal{O} か 5 出 で

は な と云う。

121 宇宙創造の第一 日

のと考えるが如き類。 神 か ら分離せる

房)

が平易で初歩向きなり。

123

124 制限を脱 せんとするなり。

t 125 \mathcal{O} を至高 例え ば \mathcal{O} もの 金と と崇めることな か名誉とか \mathcal{O} 有 ŋ̈́ 限 \mathcal{O}

126 完全へ向 か って の流れなり。

jayati bhadrani 127 Adharmenaidhate samulastu pacyati vinacyati tatah tavat sapatnnan tato

128 \sim 帰れ ね ば \mathcal{O} 意味な ŋ̈́

129 dvandva а pair ofoppasites

130 11 い文章を書くことなり。

次 131 行 は ک れは科学が扱うべきも (99) 参照。 \mathcal{O} な り。

創造神 神であ 持 神は,Visnu 三二頁以下 ラ 132 せるものである。 神と考えら Ramayana マ王の犯行。 シブァ を見られよ 本来は太陽の光明を神格化 にして、 ブイ Oま 破壊神なるに対 梵天 詳 リグ、 シ 化身 ヌ 神 (ブラフ 尚 訳註其 吠陀 ブ マ 以来の

> る。 共著・印度神話・ 界に施す神とする点が強 の生類となり、 」ラス ビバリー ラー その恩恵を汎 ・ ボ 7 ーヤナ(敏 ース吉田雄種 ŧ \mathcal{O} であ

(132)を見よ 133 印度女性 \mathcal{O} 鑑と仰ぎ、慕える。

(ランカーコ (132)参照。 Ravana と云う。 \mathcal{O} 玉。 に城を構え セイ 口 ン る。

ある。 羅摩栴陀羅と漢字化され Ramchandra ラーマ 印度男性 の鑑。 (132)参 マ王子 7 照。 ることも のこと。

(132)参照。 136 Hanuman 猿 王 ハ ヌ 7 ン \mathcal{O}

137

訳註其の二、三六頁

138 (97)を見よ。

141 (158) 参照。 三五二 三五二頁を見よ。 尚 訳 註(157)

(101)参照。 Anandarupamamritam yad vibhati

142 (102)を見よ。

共に 梵と が、印度教にて、ブィ梵天は佛教「阿含」にも 143 三位 . 最高神と考えられ 訳し、 (24)を見よ。 体説も 人格神 現 尚 の場合は れ る。 ヌ また、 梵天 梵天と訳す。 ば現れる ブ この三 アと

は は 看。 区別 致 共通 は 0 神であ いるからである。 表裏関係にして 宗教と哲学とが印度で 梵と梵天と (132)をも 両者間 0 \mathcal{O} 区

145 savanubhuh 「 all — perceiving 」「一切を包括する」と訳さる。

4 Ko hyevanyat kah pranyat yadesha akaca anando na syat (184)

147 四八頁。二九二頁。を見よ。

14 Ganges 印度の有名な大河。

別なものと見ることを云う。破り、人間のみ離れて自然界の事物と14 自然界の等級に於ける継続を突然

150 paramatman (46)を見よ。

151 (97)を見よ。尚、二八四頁。

を有 とは に分た (5)訳註其の二・五五頁を見よ シヌを主神と仰ぐものな 達す 在 لح ŧ 同 は 神 とパ 手段なること③ く実証せるも なること。 て全く失われ 量 は ①個人我と 原子 無限 ンチャラトラ派と ④ 個 \mathcal{O} 毗 正 \mathcal{O} 紐笯教) いこと。 梵 ②信愛が 八我と梵 性質 そ

> 色とする。 属性として有することを主張するを特の数は無限であり、各々知と活動とを

〇五頁

152 二八五頁を見よ。

153 Ma ma himsih

54 Kurvanneveha karmani jyivishet catam samah

15 mahativinashtih great destruction

15 Maham brahma nirakuryyam ma ma bralima nirakarot

of him the fire doth burn ; etc 二八五頁参照。

見よ。尚二八四頁。 - 158 jayante things From Anandadhyeva joy are (97) khalvimani born (138)all bhutani created 等を

159 (91) を見よ。

6 Yadyat karma prakurvita tadbrahmani samarpayet

自適、 活。 ことになって 門は一生の中に 161 Sannyasim 行雲流 切の世界、 いる。 水 、 四 つ 遁世者。 \mathcal{O} 生活を送る 神事を捨 そ の時 \mathcal{O} 第四番目 期を経歴する 離 生者。 \mathcal{O} である。 悠々 の生

流水にまかす循解脱を目指し、 味である。 す遁世遊行者なり 欲念を捨て、 身を行雲 0 よき意

162 Brahmavidamvaristhah

163 Atmakrirha atmaratih kriyavan

varnananekan 164 \square a h u d h a nihitarttho cakti dadhati yogat

頁 165 以 下。 11 を見よ。 訳註 其の二、

166 Atmada bulada

167 Sa buddhya samyunaktu

cause sva 168 自己の。 suvartha own aim $^{\circ}$ own object affair swa $^{\circ}$

inherent 169 kept nihitariha inn ariha nihita aim perpose fixed $^{\circ}$

170 Vichaiti chante vicvamadau

etc

171 Svabhaviki jnana bala kriya

cha (96)

172 神なり。 三六五頁を見よ。

173 神な ŋ̈́

174 訳註 其の二、 六二頁以下。

> 175 (97) を見よ。

中の語。 柔和なる者。 マタイ伝第五章の五、「幸福なるか 尚、 八四頁を見よ。 その人は地を嗣が

嘗ては狭き殿堂に閉ざされていた。17 単に美のみならず、真理も知 真理も知識も

以降を見よ。 Brahmins 印度四姓の最上。 訳註 其の二 八 頁

人 179 だ。 タ Urn」中にある有名な句なり。 1821)タゴールが最も愛好せる詩 英国の詩人 ⊗ 「Ode John 0n Keats Grecian 1795

179` (97) 見よ。

180 五四頁を見よ。

that anityanam 181 is nityo cmpermanent の 意。 the nityanaam permament In nityas all

joy higheat 182 unifying raaanam abiding rasatamah enjoyments の意。 the

bhunjitha kincha 184 183 Ko Icavasyanudam jagatyanjagat ma hyevanyat gridhahkasyasviddhanam Tena kah tyaktena pranyat yat

yadesha (146)akaca anando na syat

毗紐(笯派)を見よ。(三二二頁)。 18 Vaishnava lyrics (152)の

掲載されてる。 これは第二編第四章 である。 である。 ルクヤ (Yajnavalkya) 想を代表する哲人 186 の夫人に対する決別の辞が upanishad) い行乞生活に入るに際する時 maitreyi 「プリ 主人が従来 古ウパ 第四編にヤ 就て見られよ。 ド \mathcal{O} ニシャ にも殆ど (Brhad ~ の妻なり。 生活を捨 ドの あり、 同文にて ニバ aranyalsa てて新 梵論者 ジニワ 中心思 \mathcal{O} こと

187神のこと。

ーム・モハン・ライ等を想像されよ。ブラーフマ・サマージ(梵教会)のラ大乗佛教おナーガールジュナ(龍樹)の那教の祖マハーギーラ(大勇)

184 五四頁、三九七頁を見よ。

one) 教に 義」により得られるであろう。 和辻哲郎著「原始基督教の文化史的意 早き知識を、 見解あり、 次著「キリスト教的文学観」に興味深き 190 ついて、 を指す ヨハネ伝第十章三〇、 り 高山光男著「分化類型学」 いて参照あれ。 一渡り文化史的に手取り and my これにつき、 father 「我と父とは キリス 石田憲

9 Naham manye suvedeti no na vedeti vedache 9 Yato vacho nivartante aprapya

manasa

〇七頁

anandam brahmano vidvan na vibheti kntagchana (193)四三五頁を 見よ。

193 四三三頁を見よ。

9 antaratman inner individual soul the soul the internal feeling the heart or mind

195 paramatman the supreme soul (46) (150)

れよ。 の二、十五頁以下、特に二三頁を見ら の二、十五頁以下、特に二三頁を見ら

saha brahmana 199 yo vyoman Satyam veda sognute nihitam jnamam vipagchita guhayam sarvan anantam kaman brahma parame

98 mantrram 詩句、sacred text or speach aprayer or song of praise A sacred formula

9 Yadetat hridayam mama tadastu hridayan tava

going aimed 200 eshah after at の意なるべし。 the that act which of seekig is ರ be $^{\circ}$

20 Eshasya parama gatih

20 Eahasya parama sampat

kleegam passes klegat 206 205 204 203 from Eahasya lila Eahasya Daurbhikshat from play trouble bhayat to parama parama starvatim spart fear yati bhayam to amusement lakah anandah trouble daurbhiksham

to

atarvatiun

she

and

訳註 其

訳 註 (其の二)

蛇足乍らこ 印度精神史上重要なるも (ブッダ) 本書中に出で 優波尼沙土 くが読者 ブラフ トする次第である。 (ウバニシャド) しと考え 発展的 エ

*

この頃 がない。 を見と 王国が崩 頃は 夜であり、 タミヤ パ諸民族となり、 西紀前二 バビロン の全 河畔 印

わり。

こ。 と消えしとは云え、歴史的な地であっかその最盛期の花を開き終わり、流砂がその最盛期の花を開き終わり、流砂五〇年―二七五〇年頃、インダス文明にインダス河畔は、既に古く世紀前三二

の諸学研究重要のもの 重要 巻に 唱す を 記 の現象 二八の詩編より成り、一〇五現存せるものは、一〇一七或 によ る例 次第 一巻と八巻と十巻とは雑多な作者 〕。 二巻-す 2 を先祖とする夫々の家に伝えら のものであり、宗教、神話、言語して、四種のブェーダ中最古、最べき詩句の知識を意味する語)十 神 ŧ 話 7 は 自 ものは、一〇一七或いは一〇究の世界的至宝と云われる。 のが す れ の形にして眺められた。これ と多 貫され てある。その編纂或 西紀前一千年頃 文明を営み て宗教に -七巻迄は古の詩聖 「リグ・ブェーダ」(吟 の神に捧げ ったと云 て 型式共宗教的 一切の生活 関 \mathcal{O} K ラ ○して考えら 見) 句 を 色彩 られ わ IJ 切 \bigcirc

もの、呪法の目的に使用されしもの、にだ小部分に初期の哲学思想を述べしは多く神々に関する神話になっている。あり、又祈願である。その讃歌の内容体)に対する供薦の歌であり、讃○で本)に対する供薦の歌であり、讃○で この詩集の大部分は神々(三十三

る。 を主張 践によ 元的に見 って 主観の自我と客観 の本質との同一性又は 重要なる神秘思想 ダ」末期、 る事は出 可能を信 0 我 々はここに印 んとする努力を 創造の讃歌中に、 \mathcal{O} · —• 何 宇 宇 れ
リ 宙 度 到 宙 同質を予 12 むる 本体 全宇 • 自 11 と自 又 \mathcal{O} 宙 7 \mathcal{O} 殊 であ を 工 12 実 我

ある。 頃迄と推定) に附属する文献、 (ブェーダ) -ダ」、「ヤジュル・ この「リグ の も 時代 ブ エーダ」と各 のが、 エ 「ブラーフマナ」 (西紀前五 ブェー ブ 7 エ • 六 新 لح 百 吠 でダ ェ年陀

ン)、〇帝利々してこの時代に ンジス河とヤム-人も次第に東南F 「リグ あ ンジャップ地方 (デリー ったが 河 1 の合流 ハイシャ)、 河流 · ` にかの有名な地域に移動な 面 ヤ)、 域を 即ち婆羅門(ナ 司 南 トリア(有名なる姓階 河 (今のジ 文化 を して لح 来た 王族 中 ベバラモを脂制度 ュム 0 ア サラ ナ ガ ラパ

至る間と見られて

いる。

年

代は西紀前一五

0

と云う。) \mathcal{O} ら婆羅門、両 が挙げられる。 両足から首陀 巨大 意 腕 11 近な \Diamond 傾

支配 近 る す を ŋ 自己 そ 姓制度は 教徒間に (印度教 は全印 爾来今日まで三千 (ダ 度 度 は 度 ル П 始どない 徒社会 教 \mathcal{O} と云 割近 \mathcal{O} え \mathcal{O} 切を 守ら る。 あ 9 年

た。 ため 説も含めることもある故、「ブラー 官(アドバリラ)にと云う具合にな (ヤジュス) の集録であるが、 ゆる・ブェーダ」は供薦祭の祭詞 勤請 サー として重要なも してこの「サーマ・ブェー (一九四九句中七五句を除 Y 祭祀のためのヤジエルは行祭 · 祭式 官 思想的には、 それにつれ「ブ は歌咏官(ウドガー し、又、祭祀万能 ダ」は「リグ・ブェ ブェ 印 によ の文化 司 新味なく り分業 歌咏 ・ダ」も ダ」は 0 がに \mathcal{O}

かれた。 ラー 歌も ぜ する文献を含むであろう。 れる様になった。 \mathcal{O} つ(これを本集と云う)の各々に (プラ 本 示 られ、 中 含ま フ 工 フ 文を集めたも 害得失に関する招福 「ブェーダ」の中には マン)は四祭官中の主席に 四ブェー ることは注意すべきであ り進歩せる思想を或る点 は後世になるに従 その祭司たる祈 ダ 中 「リグ・ブェ 関する哲学的な讃 のである。 の最上位に その一つ「ブ 万能 ブェ 調伏 主義 る。 涛官 · 附属 \mathcal{O} では しそ お 兀 カュ

度にお に、 る。 な規 った。 あ ・六世 信仰が哲学 話から哲学と宗教とが分離せず、 の成立は西紀前 の行うも する所に特色があり、 プラ り 玄にし そし 益 1紀頃までわたる。先ず、梵書は西紀前100年から佛教興起の五マナ」(梵書) に就いて見る。こ 哲学が宗教的であ 彼等は自己 11 ーフマナ) ては、 7 的思辨を伴 生活と不 かる宗教的 よく云われる如く (狭義)を見る。 行う祭祀 宗教が哲学的 0 可分にす 0 先ず、 た。 は ラー 宗教 \mathcal{O} 融合 あ 印 \Diamond あ 的 で 神

非ブェーダ的新ウパニシャドに重要なものは殆ど含まれていな 見んとする「ウパニシャド」(奥義 ラニアカ(森林書)」があり、祭祀 点に於いては価値を認め得るのである。 ン)とに認めたことは注意すべく、を梵(ブラフマン)と我(アート たものである。 て、「ブェーダ」の実行的方面を代 「ブラーフマナ」は神学的、 である。(ウパニシャドの哲学として 学的解釈を発展させたものであり、 により歪曲されし世界とは云え、こ しそこにある世界が婆羅門 「ブラーフマナ」の最後に、 その最後を占めるも されている ただ、 ウパニシャ しそこに 中に万象 的 のが、次に の利害の 「アー 故に が 神 \vdash 1 \mathcal{O} 眼 源 ょ 7 に子弟相対座して秘密 と云う意味になったのである。 る」と云う意味で在り、 に対する「秘密の会座」、「秘密

ド」にいたる時代は、クル(今のジ 渉る地方が文化の中心地であ 即ち今日のデリーを中心にその東 元前六・ ンジス河本流上流左岸)地方が中心、 この「ブラー -河の上流地方) パンチャ 七世紀のことである。 フマ ナ」から「ウパニシ 9 一西に ュム

「ブェーダの極意」とも称される野であ 終わりの部分、従って「ブェーダの終」「ウパニシャド」は「ブラーフマナ」の これは「ブェーダ」の理知的方面 門の哲学、 て網羅せる哲学 宗教に関する 宗教的なも 全書とも云 \mathcal{O} 思想

原理たる梵は後に

創造神として具体

ブ

中印

せしめたものである。 の聖典である。 に求むる思 両者 「ウバニシャッド」の語源 ハウエルをして宇 玄 の手段 を 方 的 ッ 宙 る 法 \mathcal{O} の哲人 る婆羅 を思 t は「近く と規定 自 又は 書 彐 き 嘆一ペ ょ 瞑 う 想

せるもの この「ウバニシャ である。

相伝の義を集録

それから、

に

「の教義」

要する

出した。而してこれは印度の中心思想バニシャッド」哲学思想の最高峰を生みず、梵我不二の哲学的瞑想に達し、「ウ り、 支配しうると彼等は信じた 7 < 務たる祭祀の窮極 多な現象の裡に潜める統 を確立したことにな 正にこの傾向に合うものであ 本実在―絶対者に向けられて来たのはに於ける探求が専ら万象の中に潜む根 立してきたのである。 してかかる意慾は婆羅門 することが、 に関係せるも してその赴く所、 切を支配することは婆羅門本来の義 ン)と我 若し之を認識 婆羅門 である。「ウバニシャド」のであったが、次第に独 トマン) の目的であ った。(この中性 終に、梵(ブラフ 瞑 想 の職業と密接 とは別存せ った。 った。そ か

絶対者が梵我に見出我々は今暫く、婆羅 さ 門 れ \mathcal{O} 思想 る 程 を

フマナ」の時代に、万象の「アタルブァ・ブェーダ具えた一定の文句を意味 象の第一原理の宇宙の根本的創造力と 色濃き梵が次第にその地位を高 「動力(呪力)」と考えられ、この客観 れて、梵は神々の背景に存する一種フマナ」の時代に、万象の原理探求に 語句を意味し、 る神秘的な力を意味し、 祷又は祈りの言葉を意味するが ダ」に於ける用法が一義的でなか 多岐にわたり、或るは (ブラフマ 或るは婆羅門に内在す ≫の原理探求につ−ダ」及び「ブラー 味した 或るは魔力を ブェー \mathcal{O} `` であ 元 来 0 る。 \mathcal{O} エ

り深く 的 論人間的なものでもない この梵は自然的 とする所に哲学が宗教 の も のである。 のであり、 自然を超えたも の も 梵を宇宙に倫理的な気 のでな لح 対 面 \mathcal{O} 自然よ

()

7

なったの

である。

する自我を示し、 身体 いる所以を見出 て生命、 アート 本体を示す語 の本質を示 更に自我 7 である。 し得る 自己を表 11 られ その出発点 は となった。 の本質を表 なす語とな 非我に 呼吸を意 最後 \mathcal{O} が に 対

> 我、 た。 であ 我(アートマンは我にその地歩を進めた 個々 主体であ 意志も持た 決して人間 側 その宇宙創造が 一層本 そして「ウパニシャド」の初期 は「実有の実有」「真理の真理」であ 賦与する根源的な生命原理 我は主体的な我であ た機能の地位が我に代わ 「ブラーフマナ」の と考えられ から出発しつつ、 世界創造 即ち、此の我の観念が本来主観 質的なも 現象を表 の造化の 明瞭に説かれるに至っ を表 初 この原理に迄明らかい観念が本来主観の 期に息 り、 \mathcal{O} す 5 Ť である。 様 な 万物 った るとは云 であ る。 生命を 9 る。 いて 我

束縛を人間のではなく に 単 られた点を主要な契機とし ド」も進んだ時代は、供に造化の 一されることになったのである。 人格的な性格を媒介とし、 あ に思辨 この二つ 然し乍ら、「ウバニシャド」の哲学は りと見 7 の産物乃至は思辨のため 0) の無知(アブ 根本観念は、 剣な宗教的 知こそ唯一 苦の世界に於ける輪 す 同一 両 主と見 者 方途 の も づく 廻 \mathcal{O} \mathcal{O}

本

される。 大体、 「ブラ 羅門の教義を簡要にせ 経」「法経」の三部に分かれて である。「経書(スー て所畏「ブェーダ」を見終わるのである の詳細は〇じには省略に従う。 左にその一覧表を示し置くことに ーフマナ」広義よ 印度の全社会に浸潤 西紀前五〇〇年 この頃は婆羅門文化が全く完 固 有 トラ)」と云う。 の附属文献 工 トラ)」は「天啓 り以後に成立 \mathcal{O} でなく いるが 〇年頃と いた頃 そ

工

ユマ エー

エ

アタルブ ブェー

(サンヒタ

口 梵書 (ブラーフマナ)

梵書 (狭義)

(アーラニヤカ)

奥義書(ウン。ニシャッ

家庭教 天啓経

つ ス

法経

T 宗教 之を要するに \mathcal{O} とを包合せるもので \mathcal{O} 源泉であり、 ブ エ ダ」は印度ア 内に哲学 ŋ そ \mathcal{O}

> 命を保 砂と消 云われ て思 大 弁的 学問 は窮極 え いるのである。 なる印度人にとっては の権威であ エー る。 ŋ の註 宗教 聖典であ 泂 迄生 ブ に エ

駅れ世界 は界の で とっ 病死は らの 時代にこの二つを思想し、 そ 人間 であるなら真 となるに至ったのである。 貼る準備を進めて 全印度人の信仰に免れ難きレッテルを やすに、 ニシャッド」以後、 (カル の境界 \mathcal{O} 我 厭世観が以後印度思想の重要な特色 の影響を受け、 生活 前 脱却 てこれ ても基礎的な生存 Þ 存在 人間 た所 間性 来的 は次に佛教を見るの \mathcal{O} 7 12 か 根 婆羅門は「ウバニシャッド」の 涅槃 そ は本 に苦 のみならず、 の寂滅境であ 輪廻(サンサ (羯磨) とについ が 幸福 ?ある。 解脱 来的に苦である。 (ニル いたのである。「ウバ 世界である。 厭世調を濃くし、こ のが苦と云える。そ 印度の精神は輪廻思 人間 業 廻 の仕方である。 宇宙の根底が苦 一般に生物に 元来、 之を探究し 滅 生活の否定、 であ ラ て一言費 ここに と云わ らない る 輪 と業 この から 生老 が苦 て 死 廻か

理智 たことによ 供祭や祭 り得 述 \mathcal{O} \mathcal{O} の 如 く れる所 力こそ窮極 理 世 は と云 智 方法 既に 思念 って了 \mathcal{O} である。 う思想が 独自性 儀礼 ŋ · を 見 宗 T と 瞑 想 教 る た 供 法 を 瞑 道 出 所 ラ が 想 具と = \Diamond 般 るこ る。 考え る。 用 通 \mathcal{O} \mathcal{O}

表され ととする。 これを詳 Þ る史詩時代を佛教を見 ラタ」との二大叙 「ラー ならない 々「ラー 0 ` 7 本 書に於 は簡 事や計 ナ」なるを ナ 7 う 要

産 ダ」と異なり、 対 であろうと云わ 7 この二つは 内容 間とされて 紀元前 これ 或るも らは王 「ブラーフマヤ」 型式 「ブェー 兀 って、 100年 のは れている。 いる。 内容共に ダ」の宗教的 文学的 刹帝利 戦挙を主 か 5 紀元 作品 古 階 此 等 とさ 後 題 な \mathcal{O} エ さ لح 所

り、全部で三万四千項である。第二―七化身ラーマ王の紀行)は七篇より成「ラーマーヤナ」(ブィシュヌ神の第

宮廷に るラ ダ そ 7 を妻と チ ウ シ 、赴き、 ラ 玉 7 し四年間平和 は ミラテ 王 強弓を撓 生ま لح デ れ 5 \Diamond 過ごした。 ラ 王 て美姫シ ジャ 青年な 一王妃 王家 7 ナ <u>(</u>ラ 12 力 \mathcal{O} れ コ

森林に タ シの て放 で タ T は 浪 ラニア篇 タ 入り 姫及 セイ \mathcal{O} れ去られ 口 末弟 わ 村 っ れ た。 中 罰 で \mathcal{O} \mathcal{O} せ 魔 南 ラ 5 王 鬼 丰 れ ラ 共 口 を退治 V 力 12 た \mathcal{O}

を命じ

られた。

は

却

けられ

父王よ

_

間

に

せん

と謀

り、

その結果

してラー

7

は

己

が子たる第二王子

バラタを皇儲

 \mathcal{O}

日

デ

日

イ

来事として、

第二王妃

力

還せ に が 味方 タ キ と ラ 方 ユ 会話 てその主都 である。 す ダ で n 一篇 御礼 あ ý, 口 ン لح 本 シ 書 ユ 猿 ハ を遠 中 丰 ヌ 7 \mathcal{O} 引 征 王 用 ハ は を奪 A 7

緯 とを述 りセ 侵入 る 1 軍 が t 口 島 ラ に 到 る う

لح ユ 戦 ツ いダ 後 之 七 を 1 敗 口 1) ン 島 で 妃を ラ 連 れブ てナ 軍

唇をを方く。 に誓いを交わし、ラーマが王位に即き れョーディアに帰り、四人の兄弟はここ て

許されて帰り共に天上に 勢力を拡張するのである。 二王子クシャとラブが生まれ キの小屋に閉じ込め に潔白の 7 王 即 · 昇 を 位 9 罰 后 ここで て自 民 己 ブ \mathcal{O} 第 で

変化は注目すべきことである。 に対しているのであった。この信仰の性格のになった。この信仰の性格のに、「クテイ Bhaakti と言われる。)に対制神的及び至は感情的な献身的信仰、思弁的神秘思想の信仰を離れた信仰、フマナ」の祭祀万能、「ウバニシャド」の存、即ち「ブェーダ」の多神的、「ブラー格、即ち「ブェーダ」の多神的、「ブラーム、ロ神々の人格化は当時の信仰の性にの神々の人格化は当時の信仰の性にの神々の人格化は当時の信仰の性に、

るようになり、種々の派暫く独立し、純理論的な思索が行われ善尚、此の時代、哲学思想は宗教から

新しき思想の中の一つである。の功に帰すべく、佛教も嗜那経教此等ましき思想の多くは婆羅門以外の階級の哲学も台頭し始めた。これらの目覚

る。那教も此等新しき思想の中の一つであれる。は之より新宗教たる佛教、も嗜り

那教並びに一神教的宗教を見る。我々はこれより新宗教たる佛教、嗜

宣揚され ら大 ず テ る 乗佛教(紀元二、三世紀 教を見るのであるが、 対 象を包含擂 ガルジュナ) 迄を凡て佛教とす て共通な った思想 る により大 であ 進行内 るが 。 ・ 時 ・ ・ ・ ・ の始 頃

> のであり、 羅門 る。 苦とする厭世観を有 前五 門教と異らない。き絶対舎を思念するも 行を媒介として解脱 展したもの 婆羅門と異な 門教(後の印度教) 然し佛教と雖も、 て開 五. である。 生老病死 印度教 り、 れた宗教 宗祖を有する に達せ 佛教 \mathcal{O} を地 如き人 であ 民族 \mathcal{O} ŧ 全く り、 亦禁欲や苦 宗教たる婆 んとするも とし 間生活を 従来 \mathcal{O} とを て発 であ な \mathcal{O}

の目標としたのである。
の目標としたのである。
の言標としたのであり、次に、絶対舎的性格を持つのであり、次に、絶対舎的性格を持つのであり、次に、絶対舎の立場を承認し、相対的乍ら現実主義の世標としたのである。

ある。アがて総一 五の額我、 さすれば五蘊と厭い、執着せず、解脱い。」と真実智によって如実に観察し、のものでない。私でない。私の我でな 色、 する我も亦五蘊 この五蘊に還元して し得ると云うのである。凡ての 佛教の根本思想五蘊説に在りとされ 受、 の 一 々 又この説によれば、凡てが我がない、即ち無 即ち本体を認 が我でないと云うことは 行、識の五法をすべて「私 は皆常住永遠 それ 即ち無我な である故 民 現象を \mathcal{O} 永 ない。 固 \mathcal{O} 執 で B 遠

我も、 する解 否定せ て他面 歩を移すことにな 要するに我を否定する。 脱 は 無神論的色彩を を説 我を否定し ね 教 て絶 ば 実践 個 哲学 我 る に そ \sim

互緣成の理を説き、気々あるも、とにかく ナニ縁起と呼ばれて於いて我々はなり如何なる解脱の 名色-生存 なる る解脱 然ら 老死 7 \mathcal{O} であ 六そ 根拠を無明に求め ば単に哲学 の教え佛教は、 苦なる人生超脱を実現せんと 入 \mathcal{O} 爾 「を説き、無さ とにかくこれは、万とにかくこれは、万 標準型は、 で れるも とよりこ る や倫理学に 実践 無明 婆羅 す カン のを見ること 的 え な \mathcal{O} た哲学的理論 思辨 る 万物の相)相互緣 教 無明を滅 脱を目指 止 を誇 ては ま う 5 5 生 す

方法を示せる道諦は、 方法を示せる道諦は、 定禅定(これは大乗数 に禅定(これは大乗数 で意味を持ち、呪術的 な意味を持ち、呪術的 な意味を持ち、呪術的 な意味を持ち、正思、 にだる。)を求め、正 だばの前の完発最損 比にの正的丘人でに価 を置間が らず ると云うのである。 に応じて当然成すどか如何なる位置にな せる道 上值 ど涅 す 全 後 た \mathcal{O} が れる瞑想とか あ て 立なる る。 途の る 認識 の段 の故 陀 に徳法では、 階 そ に尊ばる れは大乗教 如き解脱 の教法即ち の思想と結 修練 7 そ 禅定とは、 入っ に於いても、その気この八正道とは、 慮 べきも あべ於 を得るために 正定を説き る で壊れ、想はなったと云える。 き反 苦 るが とか CK に於 正 一語 般 無 の八正道とは人衆の境に達し得い。一次には、輪廻のは、輪廻の生物では、 のである。 で 9 を意味 省 の境に のでな その道は 9 惚 神 ある 秘 入 八 正 ~ 無 \mathcal{O} 境 渇 \mathcal{O} に的印 丘 定の 徳 位 正

説的な一般法則により万物の緣成を見る立したのである。縁起説は全く非人と実践との組織的に融合せる宗教を開教の実践哲学はかかる立場から理

を

9

司内な哲学内宗教なのである。のである。佛教は合理主義であり、理のである。佛教は合理主義であり、理説明され、縁起の関係にあみ込まれるる故に、万物は合理的な因果の関係で

発展あることとなった。

とに

て大

頁

有する 釈尊 永遠 さほ 的色彩を与え \mathcal{O} な ず佛陀であ には きは 特色を見る。 非 支配 0 の佛法 人格 す 人格 婆羅 ここに佛 とせられる 重大な意義を有せず 的 そ を信仰 り、 を 悟 門教的環境 な原理が支配する の宗教的体験 救世主 但 教 陀は るも の焦点 \mathcal{O} でずとも佛 であ \mathcal{O} 者 大 知的宗教 独 \mathcal{O} る。 影 の優 永遠 の 上 釈 響を受け 運動 位 \mathcal{O} 生 超 であ 真理

それに 乗では 民衆 説 り出で、 カゝ する 喰 間 佛教 信 階 対する献身的 を 性 強調 原始仏 るため んぜず 目を発揮 がなされ 市 あ 立ち、 成 2 但 を超越 た ブ <u>\f</u> 智 \mathcal{O} 尊 た 如 た エ 又 バ であ 理性 専業を認 て ブ る。 後来 の宗 利 る エ

述べることとする。教(ブィレヌ教)」の聖典「ギーター」を的宗教運動の代表としての「バガバッド野に関係なきを以て之を省略し一神教署に関係なきを以て之を省略し一神教

じ頃、西印度の前者のみ見る。: る。 ば で読 ため 生じ 付 Ł った。 あ それらと時を同じ 的 信 神 那両教に比しやや保守 しなかったが 教」と「シブ教」なのであるが ŋ, 佛教や \mathcal{O} 仰の に救済されることを求める宗教 ま に著はされたも であった。この宗教思想は、「マ • 存在を認め、 てクリシナを最高神とする信 ラー 「ブェーダ」や供薦祭を全然 その代表的なも 西印度のマトウラー地方に 絶対帰依によ -」であり、 タ」中のクリシナ崇拝と結 那教と異 印度青年 、重きをおかず 佛教、 この信仰を鼓 くして起こっ 門 って \mathcal{O} 今日最も広 のが「バ 聖典と との し那教発生 であ 「バガ 中間 ここに ガ り、 を行 ブ < 0 起 لح 排斥 ツ 謂 ツ • \sim K < わ 同 は K で 11

四二章 る 現にマハー び二、三世紀 ○と云う意味 神に対する ツ の成立と看 である。 ラー ○又は神 タ第 西 倣 紀 々によ Ź 前 第二五 五. る ケ 及 ツ な

自

5

 \mathcal{O}

理主義と

ぜ

こざるた

8

٤

的 そ \mathcal{O} 本思想は せ 的最 苦行 高 と 宗 神 教 ク \mathcal{O} シ必 須 ナ

どこ迄 が最も を受け よるも 敬虔な 慧道単に哲学的思辨によるの ぞ成満を得る。 おのもに行業 功利心を去ってす の所作 ばならないと云われてい 7 (本書中 ター る 信 を営 も信愛に基づく正しき知 強 \mathcal{O} 所 江調 され でなく 慧 部 仰 の言葉として「人は 道 門 の教えとあるは ·。」がある。) ・ (ナリハイ) 無私無欲に仕 0 る。 自らの 所作道 て最高 べてを神に 哲学的理論 実修 そ 義務に は る。 事をな 祭式 てこ あ に みな 信愛道とは 処を云 専心 で 2 専念 供犠 て、 お なけ べき \mathcal{O} 12

用され 反面 タ」以後新思想、 とは異な の宗教思想は伝統的婆羅 であるが 印度思想界の表面 ブェーダ正系の ・シヌ、 次第に裏面 婆羅門 変容を免 7 で あ を る。 発達 隠 で \mathcal{O} 0 ず、 そ ラ \mathcal{O}

印度に於いては然し乍ら民族宗教た

ろう。 起こり 侵入 ŧ 印 フ 的 下 \Diamond 階 本書 ヤ べくもな 内 が ツ 度 タ 7 教 込退する そ せ K ブ ブ 回教 が 対 法 は は純粋 ŋ 印 四世紀 何 エ • サ 影 世紀 守 影響を受 7 と根本信條 同 初 書も察 地 頭 \mathcal{O} を であ 父はその 絶改革運 表者とし 宗 る。 き 神教 輪 る 廻 1 ことは ウ 興隆を極 0 等抜 ゴ 在 動 半 7 9 多 等 = 宗教 から ŋ ブ ラ لح 本 ル \mathcal{O}

「訳註 其の二」終わり。

× × ×

X

なく、本稿訳註作成に当たりては、云う

多大 第 せ で 斯 であ 道諸先 る。 左 に 唯 \mathcal{O} 参 性 々 質 読 せ 々 者 寛 引 用 書 を を 掲 を に う 省 向 次 後

ある の勉学上何等か の参考となれば幸甚で

(著者名による 口 ハ 順

井原眉 山著 印度教」 大東出版

社

ラ 7 田 澄達著 ヤナ」東洋思想叢書 7 ハーバ ラ 日本評

岩波書店殿 モニール・ウイリアムス著 「哲学事典」 「梵英辞典」 岩波 オックスホ

和辻哲郎著 「原始仏教の実践哲学」

岩波

岩波 金倉圓照著 印 度古代精神史」

木村共著 「印度哲学宗教史」

丙

午

社 版 出

出版社 高楠順次郎訳 「聖婆伽梵歌」 丙午

り佛教まで 河合共著

高楠

「ウパニシャドよ

 $(\mathbf{H} \cdot \mathbf{H})$

デンベルグ)」大雄閣

ヒ゛ハリ・ホ゛ース゛、 「印度神話 高田雄種共著 ラ | マ ーヤナ」

敏傍書房

福島直四郎著 「吠陀及ブラ フ 7

岩波 東

思潮

福島 直 四郎著 (辻と改姓) ヮ

九頁

71

高山岩男著 「文化類型学」

弘文堂

佐保田鶴治著 「印度古代史」

弘文堂佐保田鶴治著 「ラパ ニシ

ヤド 弘文堂

評 壽著 想論」 度現代思潮」岩波 東出版社木村泰賢著 木村泰賢著 「印度哲学史」 丙午出版社木村日紀著 「印度思想史」 東洋思潮宇井伯 岩波版と日本 「原始佛教思 可即 大

論社版

 \times \times

 \times

X

訳者略歴

大正二年 千葉県に生まれる

大阪府立高津中学校、大阪高等学校

文科甲類を

経て昭和十二年東京帝国大学法学部 直ちに東洋紡績株式会社

法律科卒業 へ入社今日に至る。

宅死去 (追 記 昭和二二年五月 年三六歳) 隊後帰

享

平成二六年十月三日 完写

鈴木勲訳 手書き原稿 ソフ 1

郎にて写。 USB メモ リー 保存.パ コ

印刷者。

昭和十六年 大 阪 府 生まれる

鈴木俊藏

(訳者 勲 長男七三歳。

得なか 全稿パ ものに出来たことには、 誤字多くありますが 当時は、文語体で且つ旧漢字、字数も多 りた かも知れませんが、 自身存命中、 して感無量であります。 つ英・独等 く、且つ父は東大、文科系法律科 した皆様に深く感謝申しあげます。 父の生前に、並々ならぬご支援頂きま いきませんでしたので、此 私自身は、これからも答えを求め く事にくことになると思います お読 私には、判読出来ぬ語句も多く、 父が何を悟 ソコン入力に挑戦しましたが った父の最後 と思いが強 いただけますなら、 の表示スペル等写文中誤記 若くして冥府に旅立つを 今日 りましたが くなると共に、 っていたのかご存じ 、私には、 の心境を知りたく 読むには堪える ご関 不肖の息子と \mathcal{O} 何も残 の書 係の方々 冥府 の出身 0 \mathcal{O} 中 且 7

平成二六年十月三日

父の

歓び

如何ばかりなるかと、思う次

鈴木 俊藏

祖父の存在をしる事となりました。 同館より発刊\大正三年三版を遺品の中に見出し, ルリ提督日本遠征記(文学士鈴木周作訳)神田大数年後拝文して抄訳を願い快諾を得て同四五年ペ野された、ペルリ提督の報告書日本遠征記三卷を手された、ペルリ提督の報告書日本遠征記三卷を手された、ペルリ提督の報告書日本遠征記三卷を手された、ペルリ提督の報告書目本遠征記三後を

追拝

此の訳が 如何に, 後 思いです。 き, 中で、 それでは, ありませんので、 元に置いてお 78歳となり、 が 集と祖父周作著と遺稿だけとなりました。 店が、買いに来たと母が話していたことが有りま の顔、 きず、子供とふれあうことも出来ず、 も,あったようですが,死後、度々の引っ越しのした.又佛教\基督教、その他諸々の宗教関係の本 離状態で過ごし、 郷近く海辺に転地療養、私\妹二人を授か 回忌過ぎとなり、 への期待は出来ず、「父によく叱られた、立派な に色々な専門書が蜜柑箱に何箱も有り、 る種の発達障害児にで、 なわず,無念な事と思いますが, く死去いたしました。私の母の献身的な介護もか (肺結核)を煩い帰宅、昭和 人だった」としか語りませんでした。.その母も17 の処置は. の訳が、若し、 目に止まりました。 ルとインターネットで引きましたら、貴交流会 父の、遺稿、製本する力は,私には、ありません 父は,第2次太平洋戦争に, 深淵の思いをゴミ箱に投げ入れることとなり、 使って頂ければ望外の喜びです。私も、今年 遂に今手元にありますのは、鈴木三重吉全 姿声など、 ħ 不肖 役立つことが有りましたら、ご紹介頂 印度文学を, お手元に、 父の思いを, くみ取っ 父が何を悟り、此の書を選んで訳 総て、そちらに、 の息子としても忍び得ません。 いても、今後これを役立てるすべは 断捨離をする年齢となりました。.手 戦時中のこと、 父のこと知るすべはありません。 昭和22年5月に、 何も覚えありません。 廃棄処分とせざるを得ません。 お届け 大海の中に小舟を見付けた 勉強される若い方々に、 当時の記憶全くなく,父 18 いたしますが 年東京か お任せい 結核の薬を入手で 私、早産で,あ 地召集さ 頂 36歳で甲斐無 け 。.父の遺品 東京の書 たします。 .母も私 ば タゴ した

2,019年1月吉日

鈴木俊藏